344
137

霊界物語

霊主体従

寅之巻

口瑞月口述

始

特219
3

靈主体從

寅之卷

出口瑞月口述

天聲社發行

（經界物語第三卷）

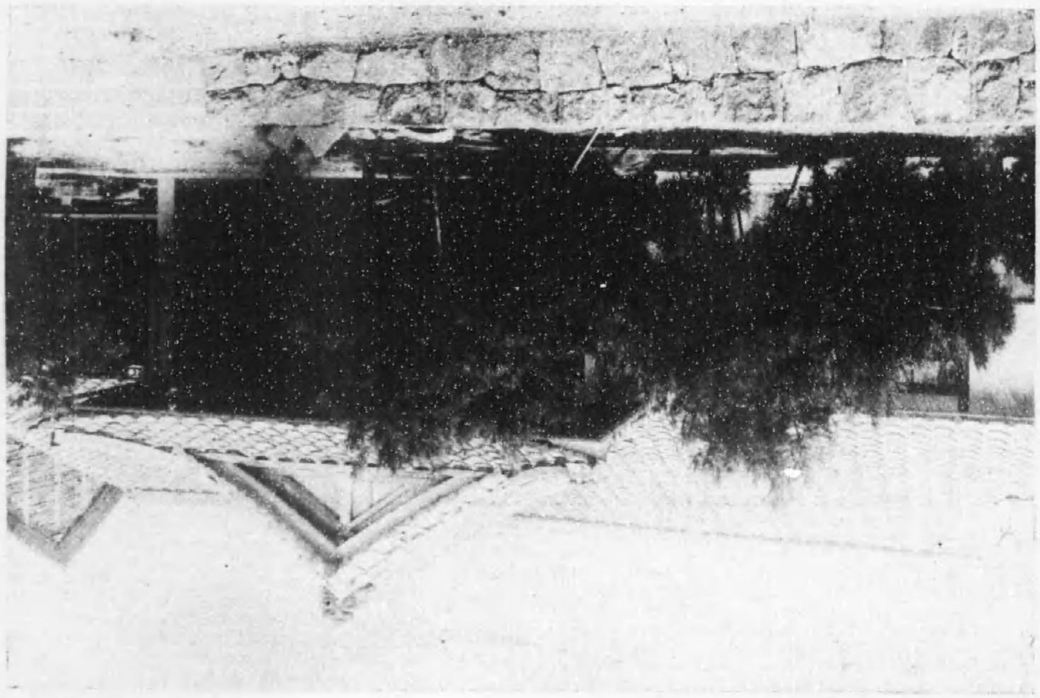

圖　碑　瑞　鄉　恩　天

344-137

序文

艮の金神出現以後三十年の立替は、いよ〳〵明治五十五年、卽ち大正の十一年、三千世界一度に開く梅の花の機運に到達したのである。次に坤の金神出現以後二十五年桃李物言はずして桃李ものとなりし神の敎示も、いよ〳〵開く桃の春、五十二才の曉に、月の光に照されて、靈界探險物語り、もゝの千草も、百鳥も、百の言問ひ言止めて三月三日五月五日の神の經綸を詳細に、悟る神代の魁となつたのも、全く時の力と言ふべきである。明治三十三年九月八日の神筆に

『出口直は三千世界の根本の因緣から末の世のことまで書かす御役なり、それを細かう說いて聞かせるのが海潮の役であるから、一番に男子が現はれて、次に女子が表は

れたら、大本の中の役員も餘り思ひが違ふて居りたと申してきり〳〵舞を致して喜ぶ人と、きり〳〵舞をして苦しむ人と、力一杯われの目的の爲めに男子女子を惡く申すものとが出來るぞよ。神を突込みておいて我で開いてまだ惡く申して歩行く、取次が澤山に出來るぞよ。云々」

大本の筆先はどうしても男子女子でなければ眞解する事は出來ぬのは神示の通りである。然るに各自の守護神の御都合の惡いことがあると『女子の筆先は審神をせなその儘とつてはいかん』と申す守護が現はれて來る、困つたものだ。九月八日に彌〳〵神示の通り女子の役となり、隱退して靈界の消息を口述するや、また〳〵途中の鼻高がゴテゴテ蔭で申出したのである。女子の歸神の筆を審神者する立派な方が澤山出來て、神樣も御滿足でありませう。

明ま治た五十五年の三月三日五月五日と云ふ神の抽象的敎示に對して五十五年は大正十一年に相當するから、今年は女子の御魂に對して肉體的結構があるとか、大本の神の經綸に就て花々しきことが出現するかの如うに期待して居る審神者があるやうに聞く、然れど神の御心と人間の心とは、天地霄壤の相違があるから、人間の智慧や考へでは到底その眞相は判るものでない。五十五年と云ふことは、明治二十五年から三十年間の神界經綸の表面に具体的に顯はれる年の謂である。

三月三日とは三ツの御魂なる月の神の示顯が天地人三体に輝き渡る日と謂ふことである。日は「カ」と讀む「カ」はかゞやくと云ふことである。今まで三十年間男子の筆先の眞意が充分に了解され、また入道二十五年に相當する女子の御魂の光が、そろ〳〵現れることを暗示された神諭である。二十五年間周圍の障壁物に妨げられた女子の御魂の

神界經綸の解釋も、稍眞面目になつて耳を傾くる人が出現するのを「女子にとりて結構な日である」と示されたものである。恰も暗黑の天地に、日月の東天を出で、萬界を照らすが如き瑞祥を、五月五日と謂ふのである。五は言靈學上「出」であつて、五月五日は出月出日の意味である。二十五年の天津風、今吹き初めて經緯の、神の敎示も明けく治まる御代の五十五年（出神出念）いよ〳〵神德出現して、神慮の深遠なるを宇宙に現出すべき時運に向ふことを慶賀されたる神示であります。

月光世に出で、萬界の暗を照破す、これ言靈學上の五月五日となるのであつて、決して曆學上の月日で無いことは明白である。三月三日と五月五日に、變つた事が無ければ信仰を止めると云ふ無明暗黑の雲か、遠近の天地を包んで居るやうに思はれましたから一寸略解を施しておきました。是でもまた女子の御魂の言は審神者を爲なくてはいかぬと、唱ふる豪い人々が出現するかも知れませぬ。これが暗黑の世の中と謂ふのでせう。

神諭に「女子に取りて結構な日である」云々は微々たる五尺の肉体に對しての言では無い。神靈そのもの、大目的の開き初むるを慶賀されたる意味であることを了解すべきである。千座の置戸は、瑞の御魂の天賦的神業たる事を承知して貰ひたい。

靈界物語を讀んで、初めて今日までの神諭の解釋に對する疑雲は一掃され心天忽ち晴明の日月を浮べ、靈体力に光輝を添へ歡喜と了解の日月出現して所謂三月三日五月五日の瑞祥を神人共に祝する事になるのである。

五月五日は男子の祝日、菖蒲の節句である。三月三日は女子の祝日で、桃の節句である。女子の御魂聖地に出現してより二十五年の間桃李物言はず自ら蹊たる爲せしもの、茲に目出度世に現はれて苦、集、滅、道を說き、道、法、禮、節を花々しく開示する事

となつたのも、神界經綸の神業成就の曙光を認め、旭光照破の瑞祥に向つたので、神人界の共に祝福すべき年であります。

○

この物語の中に大自在天とあるは、神典に所謂、大國主之神の御事であつて、大國彦命、八千矛神、大己貴命、葦原醜男神、宇都志國魂神等の御名を有し給ひ、武力絶倫の神にましまして國平矛を天孫に奉り、君臣の大義を明かにし、忠誠の道を克く守り給ふた神であります。本物語にては大自在天、または常世神王と申し上げてあります

大自在天とは佛典にいふる佛の名であるが、神界にては大國主神様の御事であります。此神は八千矛の威力を揮つて、天下を治め玉ふた神である。皇祖の神は、平和の象徴たる璽と、智慧の表徴たる鏡とを以て、世を治め玉ふのが御神意である。故に我皇孫命の世界統御の御神政は、飽く迄も道義的統一であつて、武斷的ではないのである。故に天津日嗣天皇の世界御統一は、侵略でも征伐でもない、併呑でも無い、皇祖大神の大御心を心とし玉ふたのである。劍を用ゐる玉ふは、變事に際してのみ其神聖不可犯の御威力を發揮し玉ふので、是又止むを得ざるに出でさせ玉ふ御神業であります。決して大自在天的武力統一ではない、御仁慈の御政治であります。

又盤古大神盧長彦命は一名潮沫彦命と申上げる、善良なる神にまします事は、前篇に述べた通りであります。此神を奉戴して荒ぶる神々が色々の計畫を立て、神界に活動して國治立命の神政に對抗し、種々の波瀾を捲きおこした事は既に述べた通りである。そこで此世界を救ふべく、諾冊二神が我國土を中心として天降りまし、修理固成の神業を勵ませ玉ふ事となつた。ありがたき物語は篇を逐うて判明することでありらうと思

ひます。惟神霊幸倍坐世

大正十一年一月三日　瑞月　口述者識

愛善の花咲き充つる神の代は
人の心も華やかなるらむ。

我國は德主法從神の國
理窟許りで治まらぬ國。

大日本國は更なり地の上の
凡てに道を明かす斯道。

靈主体從【寅の卷】(3)

目次

	頁
序文	一
總說	一
第一篇　國魂の配置	
第一章　神々の任命	五
第二章　八王神の守護	一〇
第二篇　新高山	
第三章　溪間の悲劇	一三
第四章　鶴の首	一九
第三篇　ロッキー山	

第五章　不審の使神……一二五
第六章　籠の鳥……三二
第七章　諷詩の德……四〇
第八章　從神の殊勳……五一

第四篇　鬼城山

第九章　辯者と辯者……五七
第一〇章　無分別……六三
第一一章　裸體の道中……七〇
第一二章　信仰の力……七六
第一三章　嫉妬の報……八四
第一四章　靈系の抜擢……九〇

第五篇　萬壽山

第一五章　神世の移寫……九七
第一六章　玉ノ井の宮……一〇一
第一七章　岩窟の修業……一〇六
第一八章　神靈の遷座……一一一

第六篇　青雲山

第一九章　楠の根元……一一七
第二〇章　晴天白日……一二三
第二一章　狐の尻尾……一三〇
第二二章　神前の審判……一三八

第七篇　崑崙山

第二三章　鶴の一聲……一四七
第二四章　蛸間山の黑雲……一五五
第二五章　邪神の滅亡……一六二
第二六章　大蛇の長橋……一六九

第八篇　神界の變動

第二七章　不意の昇天……一七七
第二八章　苦心慘憺……一八二
第二九章　男波女波……一八八
第三〇章　抱擁歸一……一九六
第三一章　龍神の瀑布……二〇四
第三二章　破軍の劍……二一三

第九篇　隱神の活動

第三三章　巴形の斑紋……二一九
第三四章　旭日昇天……二二五
第三五章　寶の埋換……二三一
第三六章　啞者の叫び……二三七
第三七章　天女の舞曲……二四五
第三八章　四十八瀧……二五二
第三九章　乘合舟……二五八

第一〇篇　神政の破壞

第四〇章　國の廣宮……二六五
第四一章　二神の歸城……二六九
第四二章　常世會議……二七七
第四三章　配所の月……二八〇

第一一篇　新規蒔直し

第四四章　呵々天下……二八九
第四五章　猿猴と澁柿……二九六
第四六章　探湯の神事……三〇四
第四七章　夫婦の大道……三一三
第四八章　常夜の闇……三二〇
第四九章　袖手傍觀……三二六

第一二篇　靈力體

第五〇章　安息日……三三一

附錄　岩井溫泉紀行歌

＝靈主体從〔寅の卷〕目次終＝

凡例

一、本卷は其の前半を龜岡の瑞祥閣に於て口述筆錄せしめられ、後半は綾部龍宮館に於て完成されたものであります。恒定筆錄者の內、谷口淸治氏が第二卷完了と共に、田口教祖詳傳編輯の任に當る事となり、靈界物語に關係せざるに到りましたことを、共錄者一同遺憾に思ひますと共に、前卷迄筆錄されし勞を多謝する次第であります。

一、第一卷に國常立命、盤古大神、大自在天の各派が、三つ巴となつて惡戰苦鬪を續け、神界を混亂せしめたる記錄を讀み、盤古大神及び大自在天に就き其の眞相を識らんとする人々の爲めに、一寸說明を加へて置き度いと思ひます。

盤古大神とか、盤古神王とか、又盤古眞王と云ふのは、平田の篤胤翁赤縣太古傳成文といふ著書の、盤古眞王記に

『古昔天地未だ分れず、渾沌として鷄子の如し。盤古氏其の中に生ず。萬八千歳にして天地開闢せり。清輕の者は上つて天となり、濁重の者は下つて地となる。盤古其の中に在り。一日に九變して、天に於ては神に、地に於ては聖なり、天日に高きこと一丈、地日に厚きこと一丈、盤古日に長ずること一丈、此の如きこと萬八千歳、天極めて高く、地極めて遠く、盤古極めて長ぜり。數は一に起りて三に立ち、五に於て成り、七に於て盛りに、九に於て處す。

盤古氏夫妻は陰陽の始めなり。大荒に生じて其の初めを知ること莫し。蓋し陶鎔造化の主にして、天地萬物の祖なり。乃ち元始天王、大元聖母は是れなり。盤古氏の後に三皇あり、これ天地人の始めなり』

とある如く、支那の人民が天王聖母として尊崇する所のものが盤古大神であります。

さうして盤古大神は体主靈從（われよし）で、國常立命は靈主体從（ひのもと）であります。

次に大自在天は、力主体靈（つよいものがち）であつて、佛典に據りますと波羅門教徒は、この神は世界萬物の造物主であり、又世界の本體であり、この神の支配のまに吾人苦樂の果報が割り當らるゝのであると云つて、有らん限りの崇拜の的として居るのであります。所が佛教が起つてから後といふものは、大自在天神と命名されて漸く第六天の統治者として、極めて平凡な取扱ひを受くるものとなつたのです。

一、次に常世の國に就て一言して置きます。『稽古要略』と云ふ書物に、

「少彦名神、粟茎（方船のこと）に乗りて、常世の國に渡りき。按ずるに常世の國とは本神仙の幽境を謂ふ、因つて以て海外の絶域、人到り易からざる地を稱す」とのりますから、日本から言へば海外の絶域たる亞米利加は常世の國となりますが、亞米利加から言へば日本が常世の國となる譯であります。故に靈界物語と古文書と比較研究して見ることが肝要だと思ひます。

大正十一年一月廿九日　　龍宮舘に於て　編者識す

霊主体従【寅の巻】〔3〕

口述者　出口瑞月

筆錄者　外山豊二
加藤明子
櫻井重雄
其他數名

総説

天地剖判して大地・日、月、星辰現はれ、地上には樹草、人類、獸、鳥、魚、虫を發生せしめ、各自分掌の神を定めて之を守護せしめ給ふた。

大神は人体の元祖神として天足彦命、胞場姫命を生み玉ひ、天の益人の種と成し

給ふた。然るに天足彦命は胞塲姫命の爲に神勅に背きて靈主体從の本義を忘れ、遂に体主靈從の果實を食し、靈性忽ち惡化して子孫に惡念を遺したる而已ならず、邪念は自ら凝つて八頭八尾の大蛇と變じ、或は金毛九尾の惡狐と化し、六面八臂の魔鬼と成り、世界を混亂紛擾せしめ、國治立大神、國直姫命、大八洲彦命以下の諸神を根の國に隱退せしめ、盤古大神（壇長彦命）を奉じて國治立大神の聖職に代らしめ、壇長姫命をして國直姫命の職を襲はしめ、八王大神（常世彦命）をして大八洲彦命の職を司らしめ、常世姫命をして豐國姫命に代らしめ、和光同塵的神策を布き一時を糊塗して、大國彦命と結託して世界を物質主義に惡化し、優勝劣敗、弱肉强食の端を開き、遂には拾收すべからざる惡逆無道の暗黑界と化せしめ、其の慘狀目も當られぬ光景と成りたれば、天の三体の大神も坐視するに忍びず、茲に末法濁世の代を短縮して再び國治立命の出現を命じ給ひ、完全無缺の理想の神世の出現せむとする次第を略述するものなれども、製本上の都合に依り本卷は國大立命及び金勝要神、大將軍澤田彦命の隱退さるゝ迄の靈界の消息を傳ふる事とせり。故にこの靈界物語は、恰も大海の一滴、九牛の一毛にも及ばず、無限絶對、無始無終の靈界の一部の物語なれば、之を以て靈界の全況と爲すは誤りなり。願はくは此の書を以て靈界一部の消息を探知し、靈主体從の身魂に立歸り、世界萬國のために彌勒の神業に奉仕されむ事を懇望する次第なり。數千年間の歷史上の事實のみ研究さるゝ、現代の人士は、この物語を讀みて或は怪亂狂暴取るに足らざる痴人の夢物語と嘲笑し、牽强附會の言と爲さむは、寧ろ當然の理と謂ふべし。神諭に曰く、

『世の元の誠の生神が、時節來りてこの世に現はれ、因緣ある身魂に憑りて太古から

言ひ置にも、書き置にも無き事を、筆と口とで世界へ知らすのであるから、世界の人民が疑ふて眞實に致さぬのは、尤ものことであるぞよ云々」

と示されあり。又

「此の神の申すことは、因縁の身魂でないと、到底腹へは這入らんぞよ」

と示されあり。故に神縁深き人士に非ざれば、斷じて信じ難からん。

要は單に一片の小説と見做し給ふも不可なく、又痴人の夢物語として讀まるゝも可なり。唯天地の大神等の天地修理固成の容易ならざる御艱難と御苦心の徑路を拜察し奉り、且つ洪大無邊の神恩に報ひ奉り、人生の本分を全ふし得る人士の一人にても出現するに至らば、口述者に取りて、望外の欣幸とする處なり。惟神　靈幸倍坐世

大正十一年一月

口述者識

第一篇　國魂の配置

第一章　神々の任命（一〇一）

國治立命は、無限絶對の大神力を發揮し、先づ大地を創造し給ふた。此時清く輕きものは日月星辰となり、重く濁れるものは大地と別れた。而して茲に陰陽二神の夫婦が生れた。男を天足彦命と云ひ、婦を胞塲姫命と曰ふ。

然るに物には表裏あり、善惡あり、陰陽あり、火水ありて初めて萬物を形成さるゝは自然の理法である。此時宇宙間に存在する邪鬼凝つて妖魅を現出した。靈主体從の神木に、体主靈從の果實を結んだ。神は

「此果實を喰ふべからず」

と女神に命じた。女神は神命を奉ぜず、自ら採つて之を食し、次に夫神にまでも進め食

はじめたのである。之より地上の世界は体主靈從に傾き、種々の罪惡は漸次發生し、邪惡の氣凝つて八頭八尾の惡龍となり、金毛九尾の惡狐となり、六面八臂の邪神妖氣の靈怪天地の間に發生するに到つたのである。之より天地の間には、罪惡旺に行はれ、天地混沌として紛亂に紛亂を重ね、世は常闇となり、殆んど拾收すべからざる狀態となつた。

茲に國治立命は、豐國姫命を補佐神とし、八百萬の神と共に、千辛萬苦を嘗め給ひ、遂に天道別命（モウゼの神）と共に天地の律法を制定せられたのである。その律法は前卷に述べたる如く、內面的には、

省みよ、

恥よ、

悔改めよ、

畏れよ、

正しく覺れよ、

との五ケ條の戒律であり、外面的には

第一、夫婦の道を嚴守し、一夫一婦たるべき事

第二、神を敬ひ、長上を尊み、博く萬物を愛する事、

第三、互に嫉み、謗り、詐り、盜み、殺す、等の惡事を爲すべからざる事

等の大要を示され、其他百般の事物に就て、細密なる律法が設けられたのである。茲に於て、先づ之を地上に行ひ、天上にも之を行はんとし、三体の大神に認許を受け、之を天地に施行さるゝ事となつた。

茲に三体の大神、國治立命は天地合体して世を治むべく、天地間を往來して、神命の戒律を天上地上に宣布すべく、管掌の神を御定めになつた。

茲に國治立命は、天上の三体の神の命により、太陽界に使神となり、日天使國治立命と稱され、豐國姫命は月天使國大立命と名づけられ、日天使の神業を國直姫命に、月天使の神業を豐國姫命に委任され、天道別の命は現界の諸神に律法を宣傳する聖職となられたのである。遂に天地の律法を天上地上に普く擴充すべく、十六柱の靈主体從の天使として、天地の神より、重く任命せられた。十六天使の名は、大八洲彦命、言靈別命、大足彦命、神國別命、花森彦命、磐樟彦命、元照別命、道貫彦命、貴治彦命、有國彦命、眞鐵彦命、磐長彦命、齋代彦命、吾妻別命、神澄彦命、高山彦命の十六神將にして大八洲彦命は天使の長となり、十六天使を指揮さるゝ事となつた。

以上の十六天使は、天上地上を往復し、天地の律法を宇宙間に宣傳し給ひ、一時は天地共に太平に治まり、大神の理想の世が完全に樹立されたが、忽ち地の各所より、邪神が勃興して世は再び混亂の巷と惡化せんとした。

茲に國治立命は、シオン山に鎮祭せる十二個の玉を大地の各所に配置し、之を國魂の神となし、八頭神を任命された。

（大正一〇・一一・一三　舊一〇・一四　栗原七藏錄）

眞寸鏡見むと思へば外國の　瑠　月
醜の敎の塵を拂へよ。

第二章　八王神の守護（一〇二）

日天使國治立命はシオン山に鎮祭せる十二の玉を世界の各所に配置し、以て國魂の神と定められた。新高山には青色の玉を鎮め、高國別命、高國姫命の二神をして、之を永遠に守らしめ給ふた。

次に萬壽山に赤色の玉を鎮め、瑞穗姫命をして之を守護せしめ、又ローマに白色の玉を鎮め、朝照彦命、朝照姫命をして之を守護せしめ、モスコーに黒色の玉を鎮め夕日別命、夕照姫命をして之を守護せしめ、ロッキー山に紺色の玉を鎮め、靖國別命、靖國姫命をして之を守護せしめ、次に鬼城山に灰色の玉を鎮め、元照彦命、元照姫命をして之を守護せしめ、又長白山に白色の玉を鎮め、磐長彦命、玉代姫命をして之を守護せしめ、コンロン山に紅色の玉を鎮め、大島彦命、大島姫命をして之を守護せしめ、天山に黄色の玉を鎮め、谷山彦命、谷山姫命をして之を守護せしめ、次に金色の玉を青雲山に鎮め、吾妻別命、吾妻姫命をして之を守護せしめ、ヒマラヤ山に銀色の玉を鎮め、ヒマラヤ彦命、ヒマラヤ姫命をして之を守護せしめタコマ山に銅色の玉を鎮め、國玉別命、國玉姫命をして、之を永遠に守護せしめ給ふたのである。この十二の玉の守護神を稱して、八頭の神と曰ふ。

さて國治立命は十二の玉を鎮め、八頭の國魂を任命し、次に八王の神を配置し給ふた。新高山には花森彦命をして主權を握らしめ、萬壽山には磐樟彦命、ローマには元照別命、モスコーには道貫彦命、ロッキー山には貴治彦命、鬼城山には眞鐵彦命、長白山には有國彦命、コンロン山には磐長彦命、天山には齋代彦命、青

雲山には神澄彦命、ヒマラヤ山には高山彦命、タコマ山には吾妻別命の十二神將の天使を配置して王となし、各主權を握らしめ玉ふた。之を八王の神と曰ふのである。この八王八頭の神々は、素より至善至美にして天則を嚴守する神であつた。然るに天地の邪氣より現はれて出でたる八頭八尾の惡龍と金毛九尾の惡狐と、六面八臂の惡鬼の邪靈のために、月代り星移るに從ひ、漸次神の國は穢され遂には天則違反の行動を採るの止むを得ざるに立到り、茲に世は益々混濁し遂には國治立命御退隱の止むを得ざるに到らしめた繁雜なる經緯は、章を逐て略述する事とする。

（大正一〇・一一・一三　舊一〇・一四　河津雄錄）

第二篇　新高山

第三章　溪間の悲劇（一〇三）

新高山は天使花森彦命統裁の下に、高國別命、高國姫命が天地の律法を嚴守し高砂島一帶の諸神を至治太平に治めて居られた。偶高國姫命、谷間に下つて清泉を汲まんとし、斷崖より過つて足を踏み外し、谷間に轉落し、神事不省に陷つた。侍神等は大に驚きて、之を救ひ上げんと百方手を盡した。されど斷崖高く、溪流激しく、如何とも救助の道が無かつた。侍神は驚き周章て之の顚末を詳細に高國別命に報告した。急報を聞きし命は、忽ち顏色蒼白となり、取るものも取り敢ず、職服のまゝ現場に驅けつけた。

高國姫命は溪間の激流に陷り、激浪に包まれて、浮きつ沈みつ悶ゑ苦しみ救ひを呼

んで居る。其の聲は次第に細り行きて、遂には蟲の音の如く衰へて來た。如何に救はんとするも斷巖絶壁に隔てられ救助の道無く、唯手を束ねて神々は、あれよ〳〵と絶叫するばかり、見殺しにするより外に方法は付かなかつた。

茲に高國姫命の侍神に玉手姫と云ふ容色優れた神があつた。

玉手姫「主神の一大事、我は生命に替へて救ひまつらん」

と云ふより早く着衣を脱ぎ捨て、數百丈の谷間を目蒐け、急轉直下、高國姫命の溺れ苦しむ前に飛下つた。さうして高國姫命を小脇に抱へ、辛うじて溪流遙の下流に泳ぎつき之を救ひ上げた。高國別命夫妻の嬉悦と感謝は譬ふるに物も無い程であつた。玉手姫は高國姫命の生命の親として優遇され、遂に玉手姫は二神の寵愛深き神となつた。

高國別命、高國姫命二神は、玉手姫の奇智と才略と忠勇心に深く信賴し、城中の事一切は、玉手姫の殆ど指揮を待たざれば何事も決定せざる迄に、漸次權勢を張るに到つた。

茲に新高山を中心とする此高砂島は、玉手姫の水も漏らさぬ經綸によつて大に治まりよく天地の律法を嚴守し、上下一致して神政の模範となり、國の譽も高砂の、千歳の松の永久に、治まる御代と思ひきや、高國姫命は溪流に落ちたる時、身体の一部に障害を來たし、それが原因となつて大病を發し、病床に呻吟し、身體は日に衰へ行くばかりであつた。

茲に高國別命は、高國姫命の寵愛深き玉手姫をして、晝夜看護に盡力せしめたのである。然るに玉手姫の周到なる看護も何の効もなく、病は日々重り行くのみである。

茲に天使花森彦命は、高國別命を近く招き、玉手姫を一時も早く追放すべく嚴命せ

られたのである。高國別命は天使の命を審かり腑に落ちぬ体にて、

高國別「彼玉手姫は忠勇無比にして眞心より懇切なる神なり。高國姫命の危急を救ひたるも亦玉手姫なり。多くの侍神ありと雖も、玉手姫の如き忠實なる神は外に一柱もなし然るに天使は何をもつて玉手姫を追ひ出せと命じ給ふか」

と反問したのである。花森彦命は、

花森彦「今は何事も語るべき時期に非ず、唯我命を遵奉せば足れり」

と、鶴の一聲を殘して殿内深く足早に進み入つた。而して高國別命は妻神及び玉手姫に向つて、天使花森彦命の嚴命の次第を物語つた。高國姫命は重き病の頭を擡げながら、

高國姫「我生命は玉手姫のために救はれ、今又懇切なる看護を受く、妾に取つて命の親神である。假令天使の嚴命なりと雖も、かゝる沒義道なる命には從ひ難し」

と非常に天使を恨み興奮の結果遂に上天したのである。高國別命は妻神の憤死を見て大に悲しみ、且つ花森彦命を深く恨むに到つた。

茲に玉手姫は高國別命の心中を察し、熱涙を浮べ、花森彦命の無情冷酷を怒り、高國別命をして信書を認め天使に捧呈せしめた。其文意は、

「高國姫命は天使の冷酷なる命令を恨み憤死致したり。また玉手姫は誠意を疑はれ且放逐の命を受けたるを大に憤慨せり。我は如何に天使の命なりとて盲從するに忍びず、實に貴神を恨みまつる」

と云ふ意味であつた。花森彦命は之を披見して直に高國別命に對し、天則違反の由を申渡し、

花森彦「根の國に至るべし」

と嚴命せられたのである。高國別命は天使の神通力を知らず、唯單に無情冷酷の處置とのみ思惟し、自暴自棄となつて、花森彦命の無道を天使長大入洲彦命に進言せんとしたのである。

（大正一〇・一一・一三　舊一〇・一四　加藤明子錄）

瑞月

刈ごもの亂れたる世を治めむと
　本つ教を說きひろめけり
親々の立てたる教一と筋に
　守るはおのが願ひなりけり

第四章　鶴の首（一〇四）

高國別命は妻神に先立たれ、心淋しく新高山の城中にあつて、神業に奉仕しつゝあつた。而して天使花森彦命の神意を了解せず、心中に不平を抱いて居た。玉手姫は高國別命の常に怏々として樂まず、不平無聊に日を送りつゝあるを慰撫し、遂に命の絶對的信任を得るに至り、茲に第二の妻神と昇進した。玉手姫は其實は常世姫命の間者であつた。高國姫命を谷間に落して苦しましたのも、又重病に陷らしめたのも玉手姫の率ゆる惡魔の暗中飛躍的弱計であつた。天使花森彦命は流石に名智の神將なれば能く之を察知し、高國別命に向つて、玉手姫を追出すべく嚴命された。されど高國別命夫妻の神は玉手姫を少しも疑はず、深く信任して天使の嚴命を無情冷

酷と恨み且つ猥りに怒るといふことは、天地の律法違反なるを以て、是が處罰を命ぜられた。

高國別命は玉手姫と夫婦になり、窃に天使長大八洲彦命に向つて、信書を奉り花森彦命の横暴限りなき處置を、口を極めて進言した。大八洲彦命は直に言靈別命をして新高山に急行せしめ、精密なる調査を命ぜられた。言靈別命は茲に花森彦命、玉手姫を一同に我が前に來らしめ、審判を開始された。花森彦命は言靈別命に向ひ、高國別命夫妻の神が玉手姫の惡計にかゝり居ることを詳細に述べられた。此の時玉手姫は涙を流して泣き倒れ、言靈別命に向つて、花森彦命の無情を愬へ且つ自分の誠意の貫徹せざることを言葉巧に進言した。

茲に花森彦命は高國別命の天地の律法に違反し、且つ玉手姫を妻とせる不法の行爲を述べたてた。高國別命は恭しく言靈別命に向つていふ。

高國別「我は不幸にして高國姫命に死別れ、神務を輔佐する神なく、實に煩悶苦惱せしに忠實なる玉手姫は陰に陽に我が神業を輔佐し功績最も顯著にして、此の高砂島に於ては彼に優る完全なる輔助神なし、如何に一夫一婦の律法あればとて、我は既に妻を失ひ獨神となれり。故に茲に諸神に信任厚き玉手姫を登用して、妻となすに何の不可か是あらん。一夫一婦は天地律法の精神ならずや」

言靈別「汝のいふ所一理なきにあらざれども、本嶋の主權者たる花森彦命の認許を受けずして、獨斷的にかゝる一大事を決行するは道理に反するものなり。今後は主權者の認許を得て何事も決行すべし」

と嚴命した。高國別命は曰ふ。

高國別「貴神の嚴命は實に尤も千萬なれども、本嶋の主權者たる花森彦命は既に天則に違反し、延いて稚櫻姫命を幽界に降し奉りたる無道の神なり。我如何に天地を畏れ長上を尊べとの律法ありとは雖も、斯る不德不義なる天使の命を聞くに堪へんや。君君たらずんば臣臣たらず、願はくは公明正大なる御裁斷を乞ひ奉る」と涙を流して陳辯した。言靈別命は高國別命に向つていふ。

言靈別「花森彦命の罪は律法制定前の罪にして、國治立命の既に恩赦されしは汝も知る所ならん。然るに汝律法制定後、八頭の神となり、國魂の神に仕へ乍ら、邪神の爲めに誤られて最愛の妻を失ひ、玉手姫の容色に迷ひ、且つ長上の命を奉ぜず。是に越ねたる律法破壞者は無し」

と宣示された。言靈別命は

言靈別「高國別命猶迷夢を醒さゞれば是非なし」

といひつゝ、神殿より青色の玉を取出し、玉手姫の面上を射照して見せた。今迄玉を欺く姫の姿は忽ち惡狐と變じ、雲を翔りて空中高く西天に姿を隱した。高國別命は茲に初めて花森彦命の明察に驚き、今迄の無禮を涙と共に陳謝した。言靈別命は深く將來を戒め、……何事も主權者の命を奉じ、神政に奉仕せよ……と嚴命し、且つ……委細を大入洲彦命に報告し、何分の沙汰ある迄謹愼を表し居れ……と嚴命して地の高天原に歸還し、一伍一什を天使長に奏上した。審議の結果高國別命に嚴しく注意を與へ、今回の失敗の罪は問はざることゝなつた。

然るに常世姫一派の惡魔は、千變萬化の惡計を廻らし、遂には高國別命を陷れ、

蒙古別をして其地位に代らしめ、花森彦命は新高山の西南方に押込められ、さしも平和の高砂島は大半常世姫の部下の占領する所となつた。されど花森彦命の至粹至純の靈魂は永く本嶋に止まり、青色の玉と共に此の島に今迄隱されてあつた。此の神の子孫も今に儼存して勇猛義烈の神民となり、神の御魂を維持しつゝ、彌勒神政の出現を鶴首して靈を研き待つて居るのである。

（大正一〇・一一・一三　舊一〇・一四　土井靖都錄）

瑞　月

日も月も天津御神の造られし
物と思へば我物は無し
村雲に隱れし月も天つ風
伊吹拂へばまたも輝く

第三篇　ロッキー山

第五章　不審の使神（一〇五）

ロッキー山は紺色の玉を、荘厳なる神殿を建立して鎮祭され、天使貴治彦命、八王神となり、靖國別命八頭神となり、律法を遵守して、極めて平穏に神事と神政が行はれた。

或時、靖國姫命の居間の扉を、窃に叩く者があつた。靖國姫命は、侍女神と共に扉を開き、

靖國姫「斯かる深夜に戸を叩くは何者ぞ」

と問ひ糺せば、聲に應じて、

「私は地の高天原なる國直姫命の密使にして、小島彦命と申す者なり」

（附言、小島彦命と稱するは實は僞名にて、常世彦命の間者、玉醜別といふ者である）

と答へた。靖國姫命は小島彦命に、一面識もなければ、その眞僞を知らず、國直姫命の急使と聞きて大に驚き、

靖國姫「斯かる夜陰に窃に來り給ふは、地の高天原に何事か急變起りしならん。先づ吾居間に」

と小島彦命を引入れ、その用務をあわたゞしく息をはづませ問ひかけた。小島彦命は聲を低ふし四邊に眼を配り且つ畏れながら、

小島彦「隣神を遠ざけ給へ」

と云つた。

靖國姫命は其言の如く隣神を遠ざけ、小島彦命と唯二柱對座した。小島彦命は聲を低ふしていふ、

小島彦「地の高天原には大變事出來し、天使長大八洲彦命は、八王大神部下の神の惡辣なる計略に陷り、遂に上天せり。其他の天使は善後策につき協議中にして、一歩も外出する事を得ず、上を下への大騒ぎなれば、我をして天使代理として遣はし給ふ。故に我が言は國直姫命の神言にして、天使の言も同樣なり。一時も早く靖國別命に貴神より傳言せられたし」

との事であつた。靖國姫命は其儘使者を我が居間に待たせ置き、靖國別命の寢殿に到り、密使の次第を逐一進言した。靖國別命は大に驚き暫く双手を組んで思案の体であつたが、忽ち座を立つて、貴治彦命の御殿に參向し、密使の次第を逐一奏上した。

命は之を聞いて大に訝かり、

貴治彦「國直姫命の密使ならば、第一着に我れに傳へらるべき筈なり。然るに如何なる變事ありとて我れを差置き、而も女神の居間を叩き、斯る一大事を報告すべき理由なし。想ふに反逆を企つる者の奸手段なるべし。汝等は速かにその密使を我が前に伴ひ來れ。我は彼に會ひ實否を調査せん」

と言葉を殘して殿中に進み入つた。

靖國別命は命を奉じ、小島彦命を伴ひ窃に殿中に伺候し、貴治彦命に向つて謁を乞ふた。命は小島彦命に向つて密使の次第を詳細に訊問した。小島彦命は低頭平身して言葉巧に、前述の次第を奏上し、一時も早く貴治彦命の地の高天原へ登られん事を懇請し、

小島彦「徒に躊躇逡巡して時を移さば一層大事變を惹起し、遂には國直姫命の御身邊も危からん。大神の一大事、早く此場を立つて我れと共に地の高天原へ參向されたし」

と進言した。

折から忽ち城下に起る鬨の聲。命は急ぎ勾欄に登り山下遙に見渡せば、夜陰のため確かに夫と判別はつかざれども、立並ぶ無數の高張は、十曜の神紋が記されてある。唯事ならじと元の座に還り、靖國別命に何事か耳語し初めた。矢叫びの聲、鬨の聲、次第に近づき來る。其時地の高天原の從神豐彦は（實は常世姫命の間者）輕裝の儘走り來り階下に平伏し、

豐彦「恐れ乍ら八王の神に注進し奉る。地の高天原は殆ど破壞の運命に逢着し、國治立命は行衛不明となり、大混亂狀態に陷り、收拾すべからざる慘狀なり。國直姫命

は從神を從へ小島彦命の跡を追ひ、只今出御相成りたり。相當の禮を盡して諸神をして城門に奉迎せしめ給へ」

と遽然しく奏上したのである。命は寢耳に水の注進に暫し茫然として居た。直に靖國別命に命じて城内の諸神に非常召集を命じ、國直姫命を城門に迎へ奉るの準備に着手された。

命の命令一下と共に、諸神は各自禮裝を整へ城門に奉迎した。

茲に國直姫命は諸神と共に悠然として入り來り、慇懃に挨拶を述べ、地の高天原の慘狀を物語られた。そして國直姫命の命分を奉じ、貴治彦命、靖國別命は少數の神軍を率ゐ、地の高天原へ應援のため奏向さるゝことゝなつた。

數多の諸神將卒は靖國姫命を守護し、ロツキー山の城中に止まり暫く形勢を觀望する事となつた。

是より曩に貴治彦命は、國彦を窃に地の高天原に遣はし、實否を糺さしめ、且つ小島彦命の密使の眞僞を調査せしめて居た。

大八洲彦命は國彦の言を聞いて大いに驚き

大八洲彦「地の高天原はかくの如く平穩無事なるに、斯る密使を出すべき理由なし。察する所邪神の奸策ならん。此儘に捨て置かば、ロツキー山は、如何なる運命に逢着するや計りがたし」

と、言靈別命に、國彦を添へ、數多の從神と共に、ロツキー山に急ぎ出發せしめられた。

（大正一〇・一一・一四　舊一〇・一五　栗原七藏錄）

第六章　籠の鳥（一六〇）

國直姫命は靖國姫命と共にロッキー山の諸神將卒を集め、高天原の慘狀を物語り且つ……我は天の御三体の大神の命を奉じ、ロッキー山に地の高天原を建設し、國治立命を迎へ奉り、天地の律法を嚴守し、以て至善至美なるミロクの神政を布かんとす汝等諸神將卒心を合せ我が命を奉じ、力を一にして以て神政成就のために努力せよ……と宣示した。

諸神將卒は一點の疑ひもなく、此宣示を遵守し、益々結束を固くし、各城門には勇猛なる神將を配置し、固く之を守らしめたのである。此時東天を蔽かし、天の磐船に乘りて來る神あり、靖國別命に面談せんと、眉目清秀威嚴犯すべからざる言靈別命がこの場に現はれたのである。東門の神將玉國別は直に此旨を國直姫命に奏上した。命は直に大廣間に諸神將を集め、列座せる中央に言靈別命を招き、其來意を尋ねた。茲に言靈別命は、

言靈別『貴治彦命の使神國彦の進言に依り、高天原の混亂狀態に陷り、國直姫命は身を以て免れ、大八洲彦命は昇天し、國治立命は行衛不明となり給ひたりとの密使ロッキー山に來れりと聞き、不審に堪へず、事の實否を調査せんために、我は大八洲彦命の使神として出向せり。今日の地の高天原は極めて平穩無事なり。從つて國治立命を始め、國直姫命大八洲彦命は頗る健全にして神務に鞅掌せられ天地の律法は完全に行はれつゝあり。然るに何者の奸策にや當城に向け虛僞の密告をなし當山を攪亂せんとはする、貴神は何神なるぞ』

と國直姫命に向つて詰問された。此時國直姫命は容色を改め威儀を正し、

國直姫「汝言靈別命と自稱するも我は之を信ぜず。現に國直姫命は我なるぞ。然るに國直姫命高天原に在り、大八洲彦命も健全に神務に從事せりとは虚僞も亦甚だしかゝず、汝は「詐る勿れ」と謂ふ天地の律法を破りたる邪神なり、國直姫命豈二柱あらんや」

と色を作して言ひ放つた。茲に諸神將は……我等を詐る不屈至極の邪神、贋言靈別命を嚴罰に處せん……と言ふより早く目と目を見合せ、直に立つて命を後手に縛り上げ、口に猿轡を箝ませ、神卒をして泥深き堀の中に投棄し、凱歌を奏し再び國直姫命の御前に出で鼻高々と此顚末を奏上した。國直姫命は賞詞を賜はるかと思ひきや、……汝等は「殺す勿れ」との天則を違反せり。速に根の國に退去を命ず……と嚴かに言ひ渡された。案に相違の神々は梟の夜食に外れたる如き不平面して、神々に引立てられ牢獄に投げ込まれた。一方言靈別命は辛うじて泥中より這ひ上つた處を、番卒に見附けられ高手小手に縛められて牢獄に投げ込まれ、無限の苦痛を嘗めた。

折しも何處ともなく微妙の音樂聞こ、紺碧の蒼空より五色の雲に乘り、數多の神將を從へ十曜の神旗を幾十ともなく押立てゝ、ロッキー山に向つて下り來る、榮光と權威の具はれる大神が現はれた。國小姫命は恭敬禮拜拍手して之を迎へ、……國治立命樣御苦勞に存じ奉る……と大聲に奏上した。數多の神々は命の聲を聞くと齊しく、恭敬禮拜低頭平身、禮の限りを盡して奉迎し、歡喜の涙に暮た。

茲に國直姫命は國治立命を奥殿に案内し奉り、且つ諸神を集めて地の高天原を天の大神の命に依り、ロッキー山に遷されし事を宣示した。諸神將卒は欣喜雀躍手の舞

ひ足の踏む處を知らなかつた。時しも天の鳥船に乘りて、地の高天原より八王神なる貴治彦命、八頭神なる靖國別命歸り來り、東門に降下し、番卒に向つて開門を命じた番卒は大に驚き、唯々として門を開き二神を通した。二神は直に奥殿に氣色を變へて進み入り、靖國姫命を一間に招き、高天原の實況を物語り、且つ……當山に逃げ來りしといふ國治立命は、其實常世姫命の部下の邪神なり……と言つた。靖國姫命は大に驚き且つ其眞僞に迷はざるを得なかつた。

茲に貴治彦命、靖國別命は城内の諸神を集め、地の高天原の實況を傳達せんとし城内一般に令を發した。僞國直姫命は陰謀の露見せんことを恐れ、自らも諸神將に令を發し、大廣前に集まらしめた。諸神將卒は一柱として國直姫命を僞の神と信ずる者はなかつた。且つ國治立命を一層深く信賴して居たのである。此時、貴治彦命、靖國別命は正座に直り、國直姫に向つて、

貴治彦「汝は何れより來りし邪神なるか有體に白狀せよ、返答次第に依ては容赦はならぬ」

と双方より詰めかけた。國直姫命はカラ〳〵と打笑ひ、

國直姫「汝は主神に向つて無禮の雜言、「長上を敬へ」との律法を破る反逆者ならずや。又汝は地の高天原に至りて其慘狀を見極め歸りしにも拘はらず、我に同つて何れの邪神ぞと口を極めて罵るは、之れ又律法違反に非ずや。我は直に奥殿に入つて國治立命に汝が無禮の次第を逐一奏上し奉らむ、暫く控へよ」

と、足音荒く奥殿に急ぎ進入したのである。城内の諸神將は此光景を見て稍不審の雲に包まれて居た。貴治彦命、靖國別命は怒心頭に達し、二神は共に刀の柄に手をか

け、國直姫命を一刀の下に切り付けんと決心したが、忽さ天地の律法を思ひ出し……

「怒る勿れ、殺す勿れ」今我れ短慮を起しなば自ら天則を破る者なり、嗚如何にせん……

……と思案に暮るゝ折しも、奥殿より國治立命數多の侍神を從へ、悠然と立さ現はれ、

國治立「國治立命之に在り、汝何故なれば天地の大命を拜持する國直姫命に向つて暴言を吐くや、汝は天地の律法を破壞する邪神なり、一時も早く此場を立去れ。萬一我言に違背せば、止むを得ず汝等二神を、根の國に退去を命ず」

と、言辭嚴かに傳へられた。城内の諸神將卒は何れも眞正の國治立命と信じ、此二神を天則違反者となして、ロッキー山を退去せしめた。靖國姫命も共に退去を命ぜられた茲に貴治彦命はモスコーに逃れ、蟄居して時期を待つ事となつた。靖國別命夫婦神は何處ともなく落ちのびた。

附言　この國治立命といふは六面八臂の邪鬼の變化にして、國直姫命は常世姫命の部下醜玉姫であつた　斯くしてロッキー山は惡魔の手に陷り諸神將卒は、其邪神たる事を覺る者一柱も無く、茲に僞高天原が或時期まで、建設されて居たのである。

（大正一〇・一一・一四　舊一〇・一五　河津雄錄）

瑞月

親しきは常の事なり皇神の
　直なる御法曲ぐる可しやは
世の人の口の車に乘せられな
　惡魔は人の口を借るなり

第七章　諷詩の德（一〇七）

大八洲彦命は、ロッキー山は惡神の爲めに根底より覆やされ、貴治彦命、靖國別命、夫妻の何處ともなく逃亡し、且天使言靈別命は敵の爲めに捕はれ、牢獄に繫がれ呻吟せることを知り、茲に諸神を集めて、ロッキー山を回復し、言靈別命を救ひ出さんことを協議した。諸神は鳩首謀議の結果、神軍を起してロッキー山を一擧に奪還するはさまで難事にあらざれども、言靈別命の身邊に却て危險の迫らんことを慮り、表面之を攻擊することを躊躇した。

茲に言靈別命の侍神に忠勇義烈の譽高き言代別といふ神があつた。言代別は恐る恐る諸神將の前に出で、

言代別「我つら〳〵考ふるに、ロッキー山の攻擊に先立ち、言靈別命を救ひ出さゞれば、命は神質同樣なれば、魔軍は危急に陷りたる場合、命を殺害し奉るは必定なり我は「僞る勿れ」の嚴しき律法を破り自ら犧牲となりて、我が主神を救ひ奉らんとす幸に此の大任を我に許し給へ」

と誠心面に表はれて嘆願したのである。大八洲彦命は打頷き、

大八洲彦「汝は主神を救はんとして敵を僞らんとする行爲は元來忠良の眞情よりいでたるものなれば決して罪とならざるべし。速かにロッキー山に至りて言靈別命を救ひ出せよ」

といひつけた。言代別は大に悅び天にも昇る心地して、直にロッキー山に向つたのであた。言代別は聞き石に金鍍金を施し、如意寶珠の珠を僞造して懷中に深く秘藏し、ロッ

キー山の南門に現はれ、

言代別「國直姫命に奉るべき珍寶あり。拜謁を乞ひ度し、願はくば貴神等の斡旋により此の由を奏上されんことを」

と、言葉巧に輒み込んだのである。番卒は果して、

番卒「貴神は如意寶珠の珠を所持さるゝならば、我等に一目拜觀せしめよ。珠の有無を確かめざるに於ては、輕々しく奏上することを得ず」

といつた。言代別は、

言代別「貴神の仰せ實に尤なり」

とて懐を披き、金色燦然たる珠の一部を現はして見せた。番卒は之を上級の神に傳へ漸次國直姫命に此の次第を奏上したのである。國直姫命は、

國直姫「ロッキー山には未だ如意寶珠の珠なきを憾みとす。然るに天運循環して茲に珍寶の手に入るは愈願望成就の時期到來せしならん。速に言代別を我が前に喚び來れ」

といそ〳〵として命令を下したのである。言代別は暫くして城内の神々に導かれ、國直姫命の前に現はれた。而して懐中より珠を取出し八足の机上に恭しく安置し、

言代別「我は高白山の麓に住む言代別といふ神なり。今や當山に國治立大神現はれ給ふと聞きて歡喜に堪へず。我往古より家に傳はる如意寶珠の珠を持參し、之を大神に奉り、以て神業に參加せんと欲し、遠き山河を越えて茲に參のぼりたり」

と言葉を盡して奏上したのである。國直姫命は大に悦び、其珠を手に取り熟視して滿面笑を含み、

國直姫『實に稀代の珍寶なり。汝は此の珠を奉りし功により、如何なる望みなりとも叶へやらん』

と宣言した。言代別は頓首再拜、喜色滿面に溢れ、

言代別『實に有難き大神の御仰せ、御恩は海山に代へ難し。願はくば我をして牢獄の番卒たらしめ給へ、是に過ぎたる悦びはなし』

と願つた。國直姫命は少く首を傾け、

國直姫『心得ぬ汝が望み、かゝる麗しき世界の珍寶を奉りたる功神であり乍ら、何を苦しんでかゝる卑しき職を求むるや』

と反問された。言代別は直に言葉を反していふ。

言代別『諺にも喬木よく風に當り、出る杭は打たれ、高きに昇る者は、地に落つることありと聞き及ぶ。我は役目の高下を望まず、只誠心誠意大神に仕へ、神業の一端に加へ給はゞ是に過ぎたる幸なし。それとも我が技倆を大神に於て認め給はゞ其時相當の地位を與へ給ふべし。急に上職を賜るより漸次に重く用ゐさせ玉はゞ、我が一身に取りて最も安全ならん』

と申上げた。國直姫命は言代別の名利を求めず、寡慾恬淡なるに感激し、直に其乞ひを容れて牢獄の番卒の仲間に加へらた。言代別は日夜番卒として忠實に奉務し心窃に言靈別命の繋がれたる牢獄を探つて居たのである。言靈別命は頭髮長く背後に伸び、髯は胸先に垂れ、顏色憔悴して、殆ど見擬ふ計りの姿と變じた。其れ故言代別は、命を認めることが容易でなかつた。

或る時國治立命出現の祝ひとして、ロッキー山の城内は祝宴を張られ、又獄卒一般

は獄前に於て祝意を表する爲、酒宴を催した。獄卒は珍らしき酒肴に醉ひ、或は舞ひ、或はうたひ、踊りて立騒いだ。中に言代別は立ちて歌をうたひ、踊り始めた。其歌は

昔の昔のさる昔、
猿が三疋飛んで來て、
鬼に逐はれて二疋は逃げた。
殘の一疋捕まへられて、
今は鬼等の玩弄とせられ、
暗い穴へとほり込まれ、
消息せうにも言傳しよにも、
今は詮なし只一言の、

言靈別の神代と、
現はれ出でし言代の
別て苦しき暗の夜半、
高天原より降り來て、
お猿の命を助けんと、
思ふ手段は有明の、
十五の月のまん圓い、
光をあてに飛んで出よ。
猿が餅搗きや、兎が混ぜる。
混ぜる兎が言代別よ。

今年や豐年滿作じや。」

心持よき望月の

光と共に飛んで出よ。

光と共に飛んで出よ。

よいとさのよいとさ、

さつさとぬけ出て東へ走れ。

東に羊が千疋をつて、

猿を抱へて飛んで往く。

よいとさのよいとさ。

節面白く自ら謠ひ自ら踊り狂ふ。數多の番卒は何の意味なるやを知らず、只面白き

歌とのみ考へて笑ふばかりであつた。言靈別命は此の歌を聞いて言代別の我を救ひ出さん爲めに番卒となり、合圖の歌を謠ひしものと大に悅び、十五夜の月を待つて居た。晝來り夜去りて遂には仲秋の月の夜となつた。國直姫命以下の諸神は、高臺に昇り月見の宴を催して居た。番卒も亦一所に集まつて月見の宴を開き、酒に醉ひ狂ひ面白き歌を謠つて餘念なく戯むれて居た。此の時言代別は、再以前の歌を謠ひ牢獄を見廻つた或る牢獄の中より小聲にて、

「言代別」

と呼ぶ聲がした。疑ひもなく聞き覺えたる主神の聲である。言代別は大に悅び、直に戸を開き縛を解き、憔れたる言靈別命を背に負ひ、東門指して逃げ出した。

外には言靈別命の部下の神卒數多現はれ來り、命を天磐船に乘せ、天空高くロッ

キー山を後に、地の高天原へ無事歸還した。言代別は何喰はぬ顏にて牢獄の戸を閉ぢ、元の如く酒宴の場に現はれ、數多の番卒と共に酒に醉ひ踊り狂うて居た。後に殘りし言代別は後日如何なる活動をするのであらうか。

（大正一〇・一一・一四　舊一〇・一五　土井靖都錄）

瑞月

天津神地上の爲に降りたる
ひとの子獨り世を偲び泣く
五十鈴川澄み渡りたるひと筋の
清き流れぞ世を洗ふなり

第八章　從神の殊勳（一〇八）

望の夜の月影と共に、言靈別命の姿は牢獄より消え去つた。されど言代別の監守する獄舍に非ざれば、言代別には何の咎も無かつた。言代別は漸次重用されて遂には國直姫命の參謀となつた。これよりロッキー山の城内は殆ど言代別の意志の儘に一切の事物が處理された。

話かはつて、地の高天原に於ては大八洲彦命以下の諸神將は、言靈別命の歸還により一切の情勢を知悉し、この儘に放任せば國治立命と僞稱する常熊彦、及び國直姫命と僞稱する醜國姫等の、如何なる奸策を巡らし、遂には各地の八王八頭神を籠絡し、地の高天原の神政を轉覆せんとするやも計り難し、躊躇して徒に時日を移さば遂

に斧鉞を用ふるも及ばざるに至らん。宜しく二葉の内に刈り取るに如かずと、茲に天使大足彦命に命じ、諸神將卒を引率してロッキー山に向はしめ、東西南北の各門より一齊に之を攻め落とし、邪神を膺懲し、天地の律法を說き諭し、心底より悔悟せしめんと、衆議一決した。

茲に大足彦命は諸神將卒を引率し、天磐樟船を連ねて、天空を翔り、ロッキー山に向つて進發した。

大足彦命の部將、足世彦は東門より、足永彦は西門より、大照彦は南門より、大嶋別は北門より、一齊に鬨を作つてロッキー城に攻め寄せた。時しも一天墨を流せし如く月の光も星の輝きも無く、咫尺を辨ぜざる有樣となつた。俄に騷ぐ雞の羽音に國直姫命は驚き目を醒し、

國直姫『言代別は何れにあるや、敵軍俄に押し寄せたり諸神は速に各門の守備につけよ』

と大聲に呼ばはつた。魔軍の諸神將は、國直姫命の聲を目當に、大廣前に駈集まつた城内の參謀兼總指揮官たる言代別は、何故か些しも姿を現はさなかつた。諸神將は統率者を失ひ周章狼狽、なすところを知らなかつた。大足彦命の率る神將は堀を越ね、壁を破り、門戸を破壞し、破竹の勢をもつて本城に進擊する。

此時言代別は血相かへて何處よりとも無く走り來り、

言代別『事態容易ならず、國照姫命は奥殿に入り國治立命の身邊を守護したまへ、我は是より、寄せ來る數萬の敵軍に向ひ、六韜三略の兵法をもつて敵軍を千變萬化に駈け惱まし、一柱も殘さず濠の藻屑となし、御神慮を慰め奉らん、諸神將は我に從ひ防

禦に從事せよ」

と言葉嚴かに令を下し、自ら東門に向つた。

東門には大足彦命、足世彦と共に侵入せんとする眞盛中であつた。言代別は大足彦命に向ひ、

言代別「我は言靈別命の從神言代別なり、國の眞澄の鏡を出してロッキー城を照させ給へ」

と呼ばはつた。此時城内の諸神將は、言代別の指揮の下に殘らず東門に集まつて居た。大足彦命は、國の眞澄の鏡を取り出し、敵軍に向つて射照した、城内の神軍の六分迄は、邪鬼、惡狐、惡蛇の正体を現はし、鏡の威德に照されて、旭に霜の消ゆる如く煙散霧消した。言代別は大足彦命の先頭に立ち、常熊彦、醜玉姫の奥殿に進み入り戸の外より大音聲に、

言代別「我今如意寶珠の玉を取り出し敵軍を照すや否や、敵は玉の威德に縮み上り、蜘蛛の子を散らすが如く四方に散亂して、もはや城内には敵の片影をも認めず、斯くなる上はいつ迄も奥殿に忍ばせたまふに及ばず、此戸を早く開かせたまへ」

と呼ばはつた。國治立命、國直姫命の僞神は言代別の言葉を聞き大に安堵し、忽ち内より戸は開かれた。大足彦命は直に奥殿に進入し、國の眞澄の鏡を懷中より取り出し、二神に向つて射照し初むるや、忽ち六面八臂の邪鬼と變じ、金毛九尾の惡狐と化し魔神の正体を現はし、常世城目蒐けて、黑雲に乘じ雲を霞と逃げ去つた。幸にロッキー山の紺色の玉は、魔軍に汚されず、嚴粛に鎭祭せられてあつた。

茲に大足彦命は言代別の忠勇義烈を賞し、言代別に命の名を與へて言代別命と稱

せしめロッキー山の主權者となし、八王神の列に加へられた。次に東門の武將足世彦に命の名を與へ足世彦命と稱せしめ八頭の列に加へた。次に足永彦、大照彦、大嶋別を殘し、ロッキー城の部將として留め置き、自らは少數の神軍と共に天の磐船に乘り、無事高天原に凱旋せられたと思ふ途端に、冷たき水の一二滴、襟首に何處からとも無く落ち來り、驚いて正氣に復れば、身は高熊の靈窟の入口に兩手を組み端坐したまゝ、鎭魂の姿勢を取つて居た。

（大正一〇・一一・一四　舊一〇・一五　加藤明子錄）

瑞月

神と謂へば皆かしこくや思ふらん
鬼をろちあり曲津靈もあり

第四篇　鬼城山

第九章　辯者と辯者（一〇九）

寒風吹き荒み、牡丹餅雪さへ降り來る高熊山の巖窟の入口に、靈縛を受け、身動きも成らぬ苦しさに、二時間斗りを費やせしと思ふ頃、またもや自分は靈界に逍遙した。

忽ち巖壁に紫紺色の雲の戸張がおろされた。中より莊重なる大神の御聲が聞こゆると同時に、紫紺色の雲の戸張が自然に捲き上げられ、正面には得も言はれぬ、莊嚴なる寶座が設けられて數多の天使を從へ、國治立命、國直姫命と共に中央に着座され、再び神界探險の嚴命を降し玉ひしが、寶座は忽然として消え去つた。途端に自分は或る高山の頂きに登り、鬼城山に起れる種々の經緯を見るとは無しに、見物して居た。

鬼城山には灰色の玉を鎭祭し、眞鐵彥命を八王神となし、元照別命を八頭神となし、眞鐵姫命、元照姫命を八王八頭神の妻神として、永遠に守護せしめんと決定された。然るに鬼城山には既に棒振彥の變名なる美山彥命、高虎姫の變名なる國照姫等、常世姫命の權威を笠に着て傍若無神の擧動多く、加ふるに杵築姫、清熊、猿世彥、駒山彥等の邪神と共に武威を輝かし、容易に國治立命の神命を奉ぜず、且つ律法を遵守せず、地の高天原より八王八頭の神の赴任を妨げ、魔神を集めて飽まで對抗しつつあつた。

茲に大八洲彥命は諸神將を集め、美山彥命の罪狀に對し、

大八洲彥「天地の律法御制定に依り從前の罪惡を大赦せられたれば、此際本心に立ち歸らせ神業に參加せしめなば如何」

と提議された。諸神將は天使長の御意見に贊成し奉らんと、滿場一致を以て命の提議を可決した。されど邪智深き美山彥命以下の神々の一筋繩にては到底城を追ひ難きを知り、龍宮城の侍神にして辯舌に巧なる口子姫を遣はし、神意を傳達し、速かに大神に歸順せしむべく旨を含めて鬼城山に遣はし給ふた。

口子姫は照妙の美はしき衣を着飾り、二柱の侍女神を伴ひ、鬼城山に到り、美山彥命を始め國照姫に面接を申込んだ。美山彥命等は、口子姫を奥の間に導き來意を尋ねた。口子姫は一禮して後徐に言ふ。

口子姫「此度天地の律法地の高天原に於て制定され、世界の各所に十二の國魂を鎭祭し八王八頭の神を任命し給置たり。然して鬼城山は眞鐵彥命、眞鐵姫命、元照彥命元照姫命の主宰の許に於かるゝ事に決定されたり。汝は速かに此の神命を拜受

し、鬼城山の城塞を明け渡し、地の高天原に參上りて神務に奉仕されよ。以上は天使長、大八洲彦命の直命なり」

と淀みなく申渡した。

此時國照姫は、膝を進めて其處置の不當なるを罵り、且つ懸河の辯舌を振ふて滔々と辯駁に勉めた。口子姫は名題の辯舌者なれば、負ず、劣らず布留那の辯を振ふて神命の冒すべからざる理由を極力辯明したのである。國照姫も流石の惡漢、口子姫が一言述ぶれば又一言、互に舌鋒火花を散らし鎬を削り、辯論果しも無く、寢食を忘れて七日七夜を費やした。布留那の辯者口子姫も、遂に國照姫の舌鋒に突き破られて兜を脱ぎ、國照姫の幕下となり、地の高天原に三年を經るも復命せなかつたのみならず、其身は鬼城山の美山彦命に重用され、高天原に一時は反旗を飜すに至つた。

大八洲彦命は再び諸神將を集めて言ふ。

大八洲彦『鬼城山に遣はせし口子姫は三年を經るも未だ復命せざるのみか、脆くも國照姫命の佞辯に肝を抜かれ、今や鬼城山の重神となり、反旗を飜さんとせりと聞く鬼城山の美山彦命一派に對し膺懲の神軍を向け、一擧に之れを討滅せんは容易の業なれども如何せん、天地の律法は嚴然として日月の如く、毫末も犯すべからず、諸神の御意見承はりたし』

と質問を發せられた。茲に天使神國姫命進み出で、

神國姫『天地の律法は「殺す勿れ」とあり、仁慈を以て萬物に對するは、大神の御神慮にして、且つ律法の示す所なり。大神は禽獸蟲魚に至る迄、廣く萬物を愛せよと宣ひ且律法に定め置かれたり。彼等は如何に猛惡の神なりと雖も、一方頭領と仰がるゝに

於ておや。望むらくは再び使を遣はして大神の神慮を懇切に說き示し、大義名分を悟らせなば、遂に心底より歸順するに至らん。宜敷吾妻別命の一子須賀彦を遣はし給へ」

と進言した。天使長は此の言を容れ、須賀彦を第二の使神として、鬼城山に派遣する事となつた。

（大正一〇・一一・一五　舊一〇・一　森良仁錄）

月瑞

勇ましく事はなす共恥づる事
知らずば遂に爭となる。
眞心をこめて御敎をとく舌の
劔に亡ぶ曲津靈の神。

第一〇章　無分別（一一〇）

天使長大八洲彦命の命により須賀彦は、第二の使神として、伴をも連れず只一騎龍馬に跨り蹄の音高く、鬼城山に向ふて出馬した。須賀彦は、容貌麗しく眉目淸秀にして、飽迄色白く肌輕く恰も天女の再來かと疑はる、美男神であつた。

須賀彦は鬼城山の城門を、何んの憚る色も無く、龍馬に鞭ち奥深く侵入し、玄關先に馬を棄て奥殿に進み入り大音聲を揚げて云ふ。

須賀彦『我こそは、地の高天原を司り賜ふ國治立命、天使大八洲彦命の直使として出馬せり、言ひ渡すべき仔細あり、美山彦命はあらざるか、國照姫は何處ぞ。速に我眼前に罷出で、直使の命を承はれ』

と呼ばはつた。其言靈の力は、實に雷鳴の如く轟き渡り何となくすさまじき中にも優しみがあつた。美山彦命は須賀彦の言靈に呑まれ、稍恐怖の念にかられて躊躇逡巡の色が見えた。

此時國照姫は一室より走り出で、須賀彦の容姿端麗にして、何處と無く權威に充てる其態度に荒膽を拉がれ、何の言葉も無く頭を垂て默視する而已であつた。此時一間より靜に入り來る女神が在つた。須賀彦は一目見るよりハッタと睨み、

須賀彦「反逆不忠の口子姫、見るも穢らはし片時も早く此場を立ち去れよ」と睨みつけた。口子姫は恨めしげに須賀彦の顏を見上げ、袖を以て垂る涙を拭き、四邊に眼を配り我胸を押へ、何事か口には出さざれど秘密のこもれる事を暗示した樣子である。

美山彦命の一女に小櫻姫といふ絶世の美しき若き女神があつた。此小櫻姫は最前よりの須賀彦の容貌端麗なるを、戸の陰より垣間見つゝ心臟に劇しき波を打たせた。小櫻姫は、遂に耐へ兼ねて顏を赤からめながら戸を押し開き、靜々と須賀彦の立てる前に愧かし氣に兩手をつき、慇懃に述ぶる挨拶も口ごもる。

小櫻姫は思ひ切つて面をもたげた其刹那、須賀彦と互に視線が合致した。何れ劣らぬ花紅葉色香爭ふ美神と美神、兩者の眼は何事かを物語る樣であつた。此時美山彦命、國照姫、口子姫は其場に現れ、山海の珍味を持出し須賀彦を丁寧に饗應した。茲に五柱は打ち解けて談話を交換した。

須賀彦は徐に使者の赴きを傳へ、美山彦命の返答を促した。美山彦命は

美山彦「使者の赴き、慥に拜承し奉る。然し乍ら、城内の諸神を集め一先づ協議を遂ぐる迄、數日の猶豫を與へ給はずや」

と顔を稍左方に傾け、須賀彦の顔を見上げた。須賀彦は其請求を許し、數日城内に滯在して返事を待つ事とした。國照姫は小櫻姫に命じ、須賀彦の身邊に侍せしめ用務を俾ぜしめた。

遠き樣でも近く、難きに似て易きは男女の道である。茲に須賀彦、小櫻姫は人目の關を破つて割無き仲と成つて終つた。此樣子を覗ひ知つたる國照姫、口子姫は大に喜び、須賀彦を停めて婿となさんと思つた。

夫より須賀彦と小櫻姫は親神の默認の下に夫婦氣取になり、緊要なる大神の使命を忘却するに到つた。須賀彦は小櫻姫に魂を奪はれ日夜姫を相手に淫酒に耽り、數多の城内の神と共に花見の宴を催した。諸神は酒に醉潰れ且庭前に今を盛りと咲き香ふ、櫻木の下に或は謠ひ或は舞ひ、鐘や太鼓の拍子に乘つて踊り狂ひ、且須賀彦の手を採り、

「貴神も謠ひ且舞ひ給へ」と、諸手を取つて大櫻木の下に誘ひ、春風に散る花吹雪を浴びつゝ愉快氣に須賀彦は酒の威力で謠ひ出した。其歌は口述者は今は殆んど忘却したが其意味の大要を、今樣式に茲に擧ぐれば左の意味の籠つた歌である。

須賀彦「花の顔色月の眉　富士の額に雪の肌
天津乙女の再來か　小野の小町か照手の姫か
ネルソンバテーか萬龍か　欣々女史か揚貴妃か
褒似の姫か難波江の　よしもあしきも判き兼ぬる
富田屋八千代も丸跣　年は二八か二九からぬ
小櫻姫の微笑は　天下の城も傾けん
鬼神も怖るゝ幽靈の　閻魔もよだれを流すらむ

優び姿は海棠の　雨の濕ほふ如くなり
かゝる美神が又と世に　三千世界を探すとも
有明月の丸々と　春は高からず低からず
一度に開く紅梅の　露に綻ろぶ姿かや
口より見する齒の光　光明姫か衣通の
姫の命の再生か　涼しき聲は鈴虫か
扨ては彌生の鶯か　松の神代に遇ふよりも
小櫻姫と諸共に　仲も吉野の山深く
竹の柱に茅の屋根　虎狼の住家でも
なぞや厭はん糸櫻　夜半の嵐に散るとても

散らぬ兩人の戀衣　戀に上下の隔てなし
隔て無いのが神の道　隔て無いのが神の道
心須賀彦須賀々々と　入雲の琴の須賀掻も

シャッチン　シャッチン　シャッチンチン〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

と二弦の琴を彈じながら、四邊構はず土堤を切らして踊り狂ふ。

斯くして須賀彦は、遂に戀の虜となり、地の高天原への復命を成さず、遂に敵城の蟇子婿となりすまして不義の神となつた。樂き鴛鴦の契も束の間、何處よりとも知らず白羽の矢は飛び來つて須賀彦の胸を貫ぬき、須賀彦は茲に悶死を遂げた。嗚呼、實に愼むべきは男女の道にこそあれ。

（大正一〇・一一・一五　舊一〇・一六　有田九皐錄）

第一一章　裸体の道中（一一）

茲に國直姫命、大八洲彦命は、國治立命の命を奉じ、口子姫を使神として、鬼城山に遣はし給へども、口子姫は國照姫に言向和合され、三年になるも復命せず、依つて更に須賀彦を遣はし、神命を傳へしめ給へども、是れまた、小櫻姫の容色に迷ひて命に背き、美山彦命の養子となりて、三年に至るも復命せず、何れの神を遣はして、之を言向和合さんやと、國直姫命は、諸神を集めて言問はせ給ふた。

茲に諸神協議の結果、天使言靈別命を使神として、派遣する事になつた。言靈別命は、直に命を奉じ、村幸彦を從へ鬼城山に到り、美山彦命に、大神の大命を、いと嚴かに申し渡された。

美山彦命、國照姫は、數度の戰鬪に擊ち破られ、千載の怨恨を懷ける敵將、言靈別命の直使と聞き、大に怒り、平素の鬱憤を晴らすは、今此時なりと、さあらぬ体に裝ひ、懷中に兇器を呑み、態と恭しく他意なき風を裝ひ、命に海山河野の珍物を以て造りたる食膳を奉り、甘き酒を勸めんとした。國照姫は窃に、口子姫を我が居間に招き、毒酒を勸めん事を小聲に命令した。口子姫は、今は鬼城山の使神として重く用ひられつゝあれども、何として天使言靈別命に毒酒を勸め奉るに忍びんやと、心は矢竹に焦燥てども、傍に國照姫の目を瞠り、眼を据ゑて、其動靜を窺ひつゝあれば、如何ともなすに由なく、止むを得ず、酒に毒を混入した。

此時同じ形したる二個の甕に酒を盛り、一個は毒の入らざる清酒であつた。こゝに國照姫は、頭髪一筋を抜きて酒甕を縛り、毒酒の印とした。二本の酒甕は命の前に据ゑら

れた。茲に言靈別命、美山彦命は晩餐を共にする事となつた。口子姫は、件の頭髪を取り外し、清酒の甕に括り附け、素知らぬ体を裝ふて居た。

晩餐には國照姫、口子姫現はれて、酌婦の用をつとめた。國照姫は、頭髪を括りたる甕を取り、之を言靈別命に勸めた。また口子姫は印なき甕を取りて、美山彦命に勸め、次に國照姫にも之を勸めた。數多の侍女は酒杯の間を往來し、歌舞音曲を奏でて此宴を賑した。酒は追々と進むに從つて醉が廻つた。此時美山彦命は、俄に胸苦しとて席を外し、言靈別命に無禮を陳謝しつゝ、醉歩蹣跚として寢所に入り、間もなく頭痛を起し、腹を痛め、咽喉よりは盛んに黑血を吐き、七顚八倒して苦しむ。侍神は驚いて、水よ藥よと周章狼狽、上を下への大騒ぎとなつた。時しも國照姫はまたもや頭痛を發し腹を痛めこれ亦七顚八倒の苦しみ、黑血を吐いて其場に打ち倒された。言靈別命は之を見て大に驚き、國照姫の介抱に餘念なかつた。

口子姫は、言靈別命に向ひ目くばせしながら、美山彦命の寢所に駈附け、介抱に從事した。幸にも、毒酒の量は少かりし爲めか、數日の後二神は恢復を見るに至つた。言靈別命は、我を毒害せんとし過つて二神の、毒酒を飲みたる其顚末を毫も知らず、又口子姫の反り忠義の所爲なる事を知らずに居た。

美山彦命は、こゝに新しき湯槽を造り、波々と溢るゝばかり湯を沸し、先づ言靈別命を賓客として、第一着に入浴を勸めた。口子姫は、言靈別命に何事か私語つゝ、一間に入りて衣服を脫ぎ、之を言靈別命に着せしめ、自らは言靈別命の衣裳を身に着して悠々として湯殿に入つた。

此時、國照姫は男神の浴殿に入りし事を慥め、直に美山彦命に急告した。美山彦

命は、時を計らひ、大身の鎗を提げ浴殿に入るや、忽ち魂消る女の叫び聲。よく〳〵見れば思ひきや、我が寵神の、口子姫ならんとは、驚き狼狽之を援けんと駈け寄つた。

此時湯槽の湯は、赤色に變じ、口子姫の身體は强直したまゝ朱に染まつて絶命して居た。

茲に美山彦命は、……言靈別命を取り逃せしか殘念至極なり、譬鬼神の勇ありて天を翔り、地を潜るとも、要害嚴しき此城内を遁るべき手段なし、飽迄探し索めて、多年の怨みを晴らさん……と、數多の從神に命を下し、血眼になつて、城内隈なく搜索した。此時城門を走り出んとする女神あり、怪しみて清熊なる神あとより追ひ縋り、背後より襟筋目がけて、無手とつかんだ。女神に變裝せる言靈別命は手早く衣を脱ぎ捨てて裸體となつて、城の堀にザンブと許り飛び込んだ。清熊の手には、口子姫の着衣が殘つた。言靈別命は、水底を潜り、向ふの岸につき、辛うじて命を拾ふた。命は夫より裸體の儘、鬼城山の城塞を後にして、章駄天走りに、北へ北へと落ち延びた。

寒氣は益々烈しく齒の根も合はぬ苦しさを耐へて、とある荒廢家に逃げ込み、老神夫婦の厚意により、垢つき破れたる衣を與へられ、ホッと一息つきながら、猶も一目散に北方さして逃げ出した。遙か後方より、聲を限りに呼ぶものがある。ふりかへり見れば、まがふ方なき從神の村幸彦である。命は彼に神策を授け、再び此場を引返して、鬼城山の偵察に向はしめた。村幸彦は今後果して、如何なる活動を爲すで在らうか。

（大正一〇・一一・一五　舊一〇・一六　栗原七藏錄）

第一二章　信仰の力（一二）

茲に村幸彦は言靈別命の内命に依り、再び鬼城山に取つて返し、城内外の偵察に苦心して居た。或る時猿世彦、清熊等の一行に城外に於て出會した。清熊は村幸彦の姿を見るなり直に從神に命じ、四方より包圍して難なく之を捕縛せしめ直に城内に連れ歸り言靈別命の所在を嚴しく訊問したのである。村幸彦は空惚けて、

村幸彦「言靈別命は城内にましまさん。汝等は何々狼狽へてか我に向つてかゝる奇問を發し且我等を捕縛せしや、思ふに汝等は酒興の餘り、滑稽にも我を愚弄する心算ならん我は苟くも天使言靈別命の從神なり。如何に卑怯未練の命なりとて、何を苦んで城内を窃に脱出する要あらん。囈語も程々にせられよ」

と大口を開けてから〳〵と打笑つた。城内の魔神共は眞劍になり、忽ち憤怒の色を現し口々に罵りつゝ執念深くも、

「命の所在を汝は知るならん、逐一白狀に及べ」

と疊かけて嚴しく訊問の矢を放つた。村幸彦は神色自若として何の怖るゝ所なく、益々空惚けて笑ひくづれた。

魔神共は

「かゝる狂神を相手とするは恰も暖簾と腕押しをする樣なものである。エ、邪魔臭い、此奴の衣類を脱がせ、冷水を頭上より浴びせかけ、逆上を下げやらん」

といふより早く寄つて集つて眞裸にし、氷の張り詰めたる池端に連れ行き、氷を打ち破り、池中に陷れ頭上よりは長柄の柄杓を以て幾千杯ともなく、水を代る〴〵浴びせか

げた。

村幸彦は心中に深く神を念じ、小聲になりて天津祝詞を頻りに奏上しつゝあつた。忽ち身体冷凍ゐ死するかと思ひきや、村幸彦の身体よりは濛々と湯煙立ち昇り、少しも寒氣を感ぜず。悠々として湯に入りし如き愉快に滿ちた顏色に微笑をうかべ、

村幸彦「ヤイ魔神湯が熱いぞ、最少し水を吳れんか」

と大聲に笑ひつゝ言つた。魔神共は一体合點行かず、かゝる嚴寒の空に投込まれ其上幾千杯とも限りなき寒水を頭上よゝ浴びせかけられ、神色自若として、何の苦痛も感ぜざるのみか剩さへ……此湯は熱い、些少し水を吳れ……とは正氣の沙汰にあらざるべし。かゝる大狂を何時までも池中に投じて苦めんとするも何の益なしと、遂に村幸彦を救ひ上げた。村幸彦の身体よりは盛に湯煙が立つて居つた。是は全く村幸彦が信仰の力と、國治立命の厚き神助に依つたものである。

美山彦命、國照姫は此奇瑞を訝かり、此度は赤裸のまゝ北風吹き荒ぶ廊下の柱に村幸彦を縛りつけ寄つて集つて、嘲笑罵詈を極め且、

「汝は大狂亂の大馬鹿者ぞ。神と雖も見掛によらぬもの」

といひつゝ、竹箒を數多携へ來り四方八方より、頭といはず顏といはず、身体一面を或は打ち或は突き、遂には竹箒の柄にて頭部を幾百千となく擲りつけた。されど村幸彦は何の苦痛も感ぜず、平然として笑を含み、

村幸彦「鬼城山の魔神共の腕力の弱さよ」

と嘲をしやくつて嘲笑した。茲に美山彦命は烈火の如く憤り、

美山彦「然らば我等の力を現はし吳れん。從神共は各自鐵棒を携へ來つて、彼が面上を

力に任せて打据ゑ粉砕せよ』

と命じた。鶴の一聲從神共は忽ち鐵棒翳して現れ、前後左右より村幸彦を力限りに頭部面部の嫌ひなく打ち据ゑた。されど村幸彦は心中深く神を念じ、天の祝詞を奏上しつゝありし爲、さしも烈しき鐵棒の亂打も鎧袖一觸の感じもなく、口を極めて魔神共の非力を嘲笑した。彼等は益々怒り、遂には面上目掛けて、各自に痰唾を吐きかけ辱んとした。如何はしけん、何れの痰唾も村幸彦の面上に至らず中空に飛び上り、忽ち落下して各自の面上に數十倍の量と數十倍の汚穢とを增して瀧の如くに降つて來た。美山彦命は己の吐き出した痰唾に祟られ、面部一面に布海苔を浴びたる如く、青白き瓜實顏は忽ち紙鞠を舐て吐き出したる如き滑稽な顏になつてしまつた。

美山彦命は益々怒り大刀を拔き放ち、村幸彦に切つて掛つた。村幸彦の身体は石地藏の如く、切れども突けども何の答へもなく、劍は曲り刀は缺れ、忽ち鋸の刀の如くなつてしまつた。今度は美山彦命奥に入り、捩鉢卷に赤褌、袴の股立高く紮げ、大身の鎗を扱き乍ら、村幸彦の胸先目掛て「エヽ」と一聲、電光石火の勢を以て突込んだ。如何はしけん鎗の穗先は蕊の葉の如く脆くも曲り、美山彦命は空を突いて、ひよろ〳〵と數十間斗り前方に走つて倒れた。此時高手小手に縛られたる太き麻繩を見て村幸彦はから〳〵と打笑ひ、

村幸彦『かゝる腐れ繩を我に掛て何とする。　要ざる戯事を爲な。鼻屎にて的を張りし如き汝等の計畫、實に失笑に値す』

といひも終らず、「エヽ」の一聲、さしもの強き太繩もばら〳〵に寸斷された。此樣子を最前より窺ひ居たる須賀彦、小櫻姫は走り來つて兩手をつき、村幸彦に向つて

村幸彦「貴神は如何なる尊き强き神にましますぞ、我等は茲に前非を悔い、眞情より反逆の罪を謝し奉る」

と畏る畏る述べたてた。傍に在りし美山彦命、國照姫は聲を放つて號泣し、神德の偉大なるに感じ、夢のさめたる如く始めて本心に立ち歸り、大八洲彦命の直命を奉じ、鬼城山を快く開け渡し、一同は從神を率ゐて地の高天原に參向し、歸順の意を表し、犬馬の勞を執らんことを誓つた。

茲に日出度鬼城山は眞鐵彦命、八王神となつて、灰色の玉を瑞の御舍仕へ奉りて恭しく鎭祭し、元照彦命は八頭神となり、眞鐵姫命、元照姫命は共に城內に止まり、夫神の輔佐を勤むることになつた。

天地の律法は最も嚴重にして毫末も犯すべからざるものとは雖も、發根より改心と認められた時は直に之を許さるゝものである。實に改心ぐらい結構なものは無い。現に惡逆無道の極みを盡したる美山彦命、國照姫の罪を赦し地の高天原の神業に參加せしめ玉ふたのも、大神の無限の御仁慈の發露である。

（大正一〇・一一・一五　舊一〇・一六　土井靖都錄）

選まれて敎の柱と生れたる
ひとの言靈世を活かすなり。
大方の世人の眠りさましたる
人は現世の木鐸なりけり。

第十三章　嫉妬の報（一二三）

長白山には白色の玉を、莊嚴なる神殿を造營して之に鎭祭し、國魂の神の御神體とされた。八王神は、有國彦命之に任ぜられ、妻神有國姫命神業を輔佐する事となつた八頭神には磐長彦命任命せられ、磐長姫命は妻神となり、内助輔佐の役を勤めて居た。

然るに磐長姫命は、其性質獰猛邪惡にして、且嫉妬心の深き女神であつた。常に夫神の行動を疑ひ、何事にも一々反對的行動を執り、夫神が東へ往かんとすれば、西へ往くと云ひ、山へ往かんと言へば、川へゆくと言ひ、常に夫婦の間に波瀾が絶えなかつた

そして磐長姫命の頭髪は、實に見事なるものにして、其色澤は漆の如く飽迄黑く、延いて地上に垂るゝ程であつた。磐長姫は或時たゞ一柱深山にわけ入り、白布の瀧に身をうたれ、夫神の我意に從はん事を祈願した。

百日百夜强烈なる瀧にうたれ、見るも凄じき血相にて、猛烈なる祈願を籠めた。此時山上より騷がしき跫音聞え、樹木を吹き倒し、岩石を飛ばし、姫命のかゝれる瀧の上にも、數多の岩石が降つて來た。姫命は之にも屈せず、一心不亂に、長髪を振り亂し、祈願を籠めつゝあつた。そこへ忽然として白狐の姿現はれ、姫命に向つて

「我は常世國の守護神なり。汝の熱心なる願ひにより今より汝の肉體を守護すべし」

といふかと見れば姿は消えて、たゞ瀧の水のはげしく落つる音のみ聞ゆる。

夫より磐長姫命の頭髪は、黑漆の色は俄に純白色に變じ、眼は釣りあがり、唇は突出し、容貌忽ち一變するに至つた。

磐長姫命は、我は白狐の守護により、夫神の驕慢を矯直し、夫妻和合の目的を達する事と確信し、欣然として長白山に還つた。

さて磐長彦命を始め、數多の神々は姫命の俄然白髪となり、且つ面貌の凄くなつたのに驚いた。夫より姫命は性質益々獰猛となり、日夜從神を從へて山野に入り、兎猪、山鳥なぞを狩立て無上の樂みとして居た。夫神は之を固く戒め、

磐長彦「天地の律法を嚴守して、總ての生物を斷じて殺すべからず」

と嚴かに訓諭したのである。されど白毛の惡狐に憑かれたる姫命は、夫神の訓諭を、東風吹く風と聞き流し、益々殺生を續け、遂には我が意に少しにても逆らふ從神は、片つ端から斬り殺し、生血を啜つて無上の快樂となし、惡逆の行爲日に日に增長し、從神も恐れて近づくものなきに至つた。

此事、八王神なる有國彦命の耳に入り、唐山彦命をして嚴しき訓戒を傳達せしめられた。磐長姫命は、聲を放つて號泣し、夫神の無情を陳辯し、且つ

磐長姫「妾は天地の律法を嚴守し虱一匹と雖も殺したる事なし、其證據には我が着衣を檢められよ」

と云ひつゝ、下着を脱いで唐山彦命の面前に差出した。唐山彦命は、その下着を見て大に驚いた。下着には、殆ど隙間なき程に、粟の如く虱が鈴生になつて居た。唐山彦命は之を見て、同情の涙に暮れ、

唐山彦「貴神の御心中察するに餘りあり。斯の如く虱に至る迄、仁慈の情を以て助け給ふ。今は疑ふ所なし。此の由直に八王神に達し奉らん」

と袂を別つた。あとに磐長姫命は長き舌を出し、いやらしき微笑を浮かべた有國彦

命は、唐山彦命の復命の次第を詳細に聽き終り、直に磐長彦命を召して、

有國彦『事實の詳細を包まず、隱さず奏上せよ』

と嚴命し給ふた。磐長彦命は事實を以て奉答した。されど有國彦命は頭を傾け半信半疑の面色にて、命の顏色を熟視されつゝあつた。此時磐長姫命は、夫の後を追ひ出で來り有國彦命に向つて、涙と共に、言葉巧に我身の無實を陳辯した。

茲に夫妻二神の爭論は開かれた。姫命は口角泡を飛ばし、舌端火を吐き、兩眼は益々釣り上り、口は耳元迄割け、見るも凄じき形相となつた。有國彦命は此光景を見て直に奥殿に入り、白色の國魂を取り出し、其玉を兩手に捧げ、磐長姫命目がけて、伊吹の神業を修し給へば、その身體より、忽ち白毛の惡狐現はれ出で、空中を翔つて、西天に姿を沒した。

茲に磐長姫命は大に愧ぢ、此場を一目散に逃げ出し大川に身を投じ、終焉を遂げた磐長姫命の靈魂は化して無數の綠白色の鴨となり、水上に浮つ沈みつ、日を送る事となつた。是より此川を鴨綠江といふ。

（大正一〇・一一・一六　書一〇・一七　栗原七藏）

神つ代の神の御典を明めて
世人導け本津大道に

第一四章　靈系の拔擢（二二四）

磐長彦命は獨神となり、神務を管掌されて居た。然るに內助者たるべき妻神に死別後は總ての事について內政上不便を感じ、茲に忠實無比なる侍女神玉姫を擧用して正妻となさんとし、諸神を集めて其意見を聽取した。諸神は磐長彦命の孤獨不遇の生活を見て大に同情の意を表し、玉姫を正妻となすべき事を滿場一致をもつて贊成した。磐長彦命は滿足の體にて直に八王神の御殿に參候し、玉姫を正妻とすべき事の許可を奏請した。有國彦命は一身上の一大事なれば、自分單獨にては決し兼ね、此旨を書面に認め使神を地の高天原に遣はし、天使長大八洲彦命の裁決を請はれた。

大八洲彦命は直に天使長言靈別命、大足彦命、神國別命を大廣前に集め、磐長彦言命の婚儀について其可否を討議せんとし、茲に天使會議を開かれた。

彌々天使會議は開かれた。大八洲彦命は立つて磐長姫命の平素の行跡より變死の際に至る迄の種々の經緯を詳細に說明し、且つ……侍女神の玉姫を入れて其正妻となすべき事の可否を審議されたしと、長白山の八王神、有國彦命より奏請し來れり。願はくは天使諸神の愼重なる審議を望む……と、宣言して座に着いた。茲に言靈別命は靈別『磐長彦命の妻帶は止むを得ざる次第なれば直に承認を與ふべきものと思意す一時も早く之を正妻となし、長白山の安全を計りたし』

と述べ立てた。

大足彦命は座を立つて顏色を變へ、言靈別命の說を極力反駁して云ふ。

大足彦『天地の律法は一夫一婦の道を嚴しく戒めあり、然るに後妻を迎ふるは律法に違

反するものにして、惡例を後日に遺すものなれば、斷乎として許すべからず、體主靈從の行動は上に長たるものの最も愼むべき事ならずや、上のなすところ下之に從ふ、上流濁れば必ず下流濁るは自然の道理なり」

と言葉激しく反對の意を表示した。言靈別命は直に起立し、

言靈別「實に心得ぬ貴神のお言葉かな、唯今體主靈從の行爲とありしが、我は第二の正妻を迎ふるを以て律法違反となし、又は體主靈從の行爲と見做すを得ず。如何となれば磐長姫命は夫神に對し根本的に其靈系を異にし居れば、常に圓滿を缺き、風波の絶ねざるは當然なり。此夫妻は素より恰好の緣に非ずして、靈系を無視し體系を重んじたるに起因するものなり。靈系の合致せざる神と神とを夫婦となし、外觀の體裁に重きを置くは實に靈系を無視したるものなり。今や此過ちを去り、靈系の等しき玉姫を入れて正妻たらしめんとするは、體を輕んじ靈を重んずる天地の法則に適ひ、靈主體從の本義に歸りたるものなり。故に我は斷じて體主靈從の行爲と斷ずる事能はず」

と述べ立て席に着いた。大足彦命は再び立ち上り、

大足別「言靈別命の仰せは一理あるに似たれども。今一應熟考を乞ひたし。如何に靈主體從をもつて天地の法則なりとは云へ、現在卑しき侍女を擧用して、一國を司る八頭神の正妻たらしめんとするは、神界の秩序を紊すものにして、恰も提灯に釣鐘、均衡の取れざる事最も甚だし、斯の如き不均衡の結婚を許すと雖も忽ち輕重の度を失し早晩顚覆破鏡の悲を見るは必然なり、斯る一大事を輕々しく聽許せんとするは敢て天地の律法を輕んじ神意を冒瀆する無法の行爲なり」

と極言した。言靈別命は三度立つて口を開き、

靈別「心得ぬ大足彦命のお言葉かな、卑しき侍女をして八頭神の妻となすは不均衡なりとか、神界の秩序を紊すものなりとか、仰せられたれども、そのお言葉こそ体主靈從の甚だしきものならん。如何に卑しき侍女なりとて、其靈性に於て美はしく高貴ならば譬へ形體の上に於て卑しき職にありとも其精神にして立派ならば、靈主体從の本義より見て之を否定すべきものに非ず、徒に門閥的舊思想を墨守し、いらざる體面論を主張さるゝは却て神慮に背き、律法の精神を辨へざる頑冥固陋の舊思想なりかゝる所論は殆ど齒牙にかくるに足らず」

と氣色ばみて陳辯した。

大足彦命は三度立つてこの說を駁し、互に熱火の如く論難攻擊いつ果つべしとも見ねなかつた。此時神國別命は立つて

神國別「二神の所說いづれを聞くも一理あり、然るに靈主体從及び体主靈從の本義については、我は言靈別命に贊成す、諸天使速に玉姫を正妻に入るゝ事の許可を與へられん事を希望す」

と言明した。

茲に大八洲彦命は多數の意見を容れ、磐長彦命の妻神に、玉姫を入るゝ事の決定を與へ目出度天使會議は終了を告げた。元來玉姫は忠實なる神であつて磐長姫命の寵神となつた位であつた。彌々玉姫は玉代姫命と改名し、磐長彦命の妻となり內助の功最も多く、長白山は無事に治まつた。

（大正一〇・一一・一六　舊一〇・一七　加藤明子錄）

神言を正しく說きたるひとつ火の
光は闇世の燈臺なりけり。
君の爲御國の爲に盡したる
人をなやむる暗世忌々しき。
奇魂曾富戸の神と坐れたる
人は現世の導師なりけり。

第五篇　萬壽山

第一五章　神世の移寫（一一五）

萬壽山には八王神として磐樟彦命、磐樟姫命の夫妻居住し、赤色の玉を莊嚴なる神殿に鎭祭し、瑞穗別命入頭神となり、瑞穗姫命妻神となりて內助の功最も多く、天地の律法は完全に行はれ、神人一致して至治太平の神世は嚴かに樹立され、加ふるに忠實無比なる大川彦命、清川彦命、常立彦命、守國別命、その他の諸神將は綺羅星の如く集まり地の高天原に次ぐの聖場となつた。

萬壽山の神殿は月宮殿と稱へられ、赤玉の精魂幸はひ玉ひて、神人の心は赤誠丹心能く神に仕へ、長上を尊み、下を憐み、各自の顏は何時も春の如く、心は常に洋々として海の如く、滿山の紅葉は黃紅赤緋色を競ひ、春は紅の梅、香ひ芳ばしき白梅樹々の間

に點々し、蒼々たる常磐の松は、紅葉の間に天を摩して榮え、千年の鶴は樹上に巣を組み神政の萬壽を謳ふ。城廓を廻れる池の清泉には萬代の龜、幾千萬とも限り無く、神世を壽ぎ、右往左往に遊びたはむる其の光景は、五六七神敎成就後の神代の移寫とも稱すべき瑞祥である。斯かる目出度き萬壽山は、實は靈鷲山の神靈三ッ葉彦命の內面的輔佐の神德の功、あづかつて力ある故であつた。

茲に萬壽山の八王、八頭の神を始め、部下の諸神將は靈鷲山を以て第二の高天原と崇め三つ葉彦命の神跡を慕ひて、神人修業の聖場と定め、美はしき神殿を山下の玉の井の邑に造營し、坤金神豐國姫命の安居所と爲し奉仕せんとし、此處に莊嚴なる大神殿を宮柱太敷立て、高天原に千木高知りて日の大神、月の大神、玉照姫命、國治立命鎭座し給ひて洪大無邊の神德は、四方に輝き地の高天原と相俟つて神界經綸の大聖場となつた。之を玉ノ井の宮と曰ふ。

玉ノ井の宮は眞道姫命眞心を以て大神に仕へ、且つ靈鷲山に日夜通ひて神慮を伺ひ終に三ッ星の神靈に感じて、三ッ葉彦命を生み、之を地の高天原の國治立命に獻じ奉り、神政維新の神柱と成さしめた。三ッ葉彦命は、天の三ッ星の精魂の幸ひによりて地上に降り、眞道姫命の体に宿りて玉ノ井の邑に現はれた。玉の井の邑には玉ノ井の湖と云ふ清泉を湛へた湖水があつて、此の湖水は神界經綸上必要の神泉である自在天の一派は、この湖水を占領せんと百方手を盡し、終に三ッ葉彦命と爭つたが、結局は目的を達することが出來なかつた。

自在天の一派なる蟹雲別、牛雲別、種熊別、蚊取別、玉取彦等は、一齊に玉ノ井の湖水に押寄せ來り、數多の魔神をして前御左右より取り卷き、第一着に玉ノ井の宮を破壞

し、眞道姫命を捕へんとし、三ッ葉彦命の神威に恐れて遁走し、二度押し寄せ初志を達すべく奮闘せし顚末は、次席に於て略述する。

（大正一〇・一一・一七　舊一〇・一八　加藤明子錄）

第一六章　玉ノ井の宮（一一六）

玉ノ井の邑は、玉ノ井の湖の中央にある清らかな一つの島である。玉ノ井湖の水は深くして清く、常に紺碧の波が漂ひ、金銀色の諸善龍神の安住所である。湖の外は、大小高低、千變萬化の靈山を以て圍らされてゐる。そして萬壽山は東方に位し、靈鷲山は、西方に位し、其他の山々には諸々の神々が鎭まり、春は諸々の花咲き亂れ、山は雲か霞かと疑はるゝばかりである。夏は新綠諸山榮に、老松處々に點綴し得も言はれぬ風景である。秋は諸山錦の衣を織り、冬は滿山銀色に變じ、靈鳥は四季共に悠々として舞ひ遊び、山々の谷を流るゝ大河小川の水清く、玉ノ井の湖水に潺々として注ぐ。

國治立命は世界の中心に地の高天原を建設し、今又東方の靈地を選み、此地點を第二の高天原となし、東西相應じて、陰陽の如く、日月の如く、經と緯との神策を定められた。常世姫命は地の高天原なる蓮華臺及龍宮城を占領せんとして、千變萬化の奸策を弄し、苦心焦慮すれども、神威赫々として冒すべからざるに落膽し、第二の經綸なる玉ノ井の湖を占領せんとし、大自在天に其意を通じ、東西呼應して大神の經綸を破壞し、盤古大神の神政を覆へさんとした。

萬壽山は第二の地の高天原に擬すべき靈地であり、玉ノ井の邑は、龍宮城に比すべき大切なる靈地である。故に萬壽山を占領するに先たち、玉ノ井湖を占領するの必要が起つた。玉ノ井湖は前述の如く、四方靈山に圍まれ、神々の守護強く、容易に之を突破する事が出來ない。

茲に大自在天の部下蟹雲別は、數多の神々を悉く蟹と化せしめ、東南の山々の谷を傳ひて玉の井湖に這ひ込むだ。又牛雲別は、數萬の部下を殘らず牛に變化せしめ、東北の山々の谷を傳ひて、湖水に近寄らしめた。又蛟取別は數萬の魔神を幾百萬の蚊軍と化せしめ、西南より山々の谷を傳ひて玉ノ井の邑に進ましめた。玉取別は數萬の魔神を殘らず瑪瑙の玉と化せしめ、西北の山の頂に登り、玉ノ井の邑を目がけて、雨の如く降り下らしめた。數多の蟹は忽ち惡龍と變じ、湖水に飛び込んだ。茲に湖水の諸善龍神と惡龍とは、巨浪を起し、飛沫を天に高く飛ばし、死力を盡して爭ふた。さしもの清き紺碧の湖水の水も瞬く中に赤色に變じ、得も言はれぬ血腥き風は四方に吹き捲つた。一方牛雲別の部下は、忽ち水牛と變じ、湖水に飛び入り、蟹雲別に加勢した。戰鬪は益々烈しくなり、湖水は既に敵軍のために、占領されんとした。

茲に天道姫命は玉ノ井の宮に、敵軍降伏の祈願を籠められた。三ッ葉彦命は旅輝彦命、久方彦を部將とし、湖水の敵軍に向つて、天津祝詞を奏し、金色の大幣を打ち振り〳〵大に敵を惱ました。時しも西北の高山より石玉の雨頻りに降り注ぎ、味方の神軍の頭上を目がけて打ち惱ました。西南の敵軍は、億兆無數の巨大なる蚊群となりて、味方の身体に迫り、其聲は暴風の荒れ狂ふが如く、咫尺を辨ぜざるばかり立塞がつて暗黒となつた。三ッ葉彦命は天に向つて救援の神軍を遣はされん事を祈願した。忽ち天上の三ッ星より、東雲別命、白雲別命、青雲別命の三柱の軍神、雲に乘りて萬壽山に降り來り、大地を踏み立て、三柱一度に雄健びし給へば、玉ノ井の湖水の水は一滴も殘らず中空に舞ひ上り、遠く東西に分れて降り來り、一大湖水を現出した。此時石玉も、蚊軍も、共に湖水の水に浚はれて中天に舞ひ上り、影を潜めた。

東に分れし湖水の水は地上に停留して再び湖水を形成した。之を牛の湖水と曰ふ。今日の地理學上の裏海である。又西に分れ降りて湖水を形成したるを、唐の湖と曰ふ。現今地理學上の黒海である。茲に東雲別命、青雲別命、白雲別命は、湖水を清め、新しき清泉を湧へられ、永遠に玉ノ井の湖の守護神となり、白龍と變化した。斯くして三ッ葉彦命と共に、神政成就のミロクの世を待ち慕すこと、なつた。

（大正一〇・一一・一七　舊一〇・一八　河津雄録）

蹴落され踏みにじられて世の爲に
つくしたるひと眞の神なる。

第一七章　岩窟の修業（一一七）

萬壽山は前述の如く、神界の經綸上最も重要なる地點なれば、之を主管する八王神は他の天使八王神に比べて最も神德勝れ、且神界、幽界の大勢を辨知し、大神の神慮を洞察せざるべからずとし、八王神なる磐樟彥命は、單獨にて萬壽山城を窃に出城し、靈鷲山の大岩窟に到りて百日百夜、凡ての飲食を斷ち、世染を免れ一意專心に靈的修業を勵み、終に三ッ葉彥命の神靈に感合し、三界の眞相を極め、天晴れ萬壽山城の王たるの資格を具有するに到つた。

磐樟彥命は、靈鷲山の大岩窟を深く探究したるに、數百千とも限りなき小岩窟ありて、大岩窟の中の左右に散在して、それ〴〵受持の神が守護されて居る。此岩窟は所謂宇宙の縮圖にして、山河あり、海洋あり、種々雜多の草木繁茂し、禽獸虫魚の類に至る迄森羅萬象悉く其所を得て、一ッの神の國が形成されてある。

磐樟彥命は、三ッ葉彥命の靈媒の神力に依り、數十里に渉れる大岩窟の磐戸を開き、現はれ出たる氣品高き美しき女神は、數多の侍神と共に出で來り磐樟彥命に向ひ輕く目禮し乍ら、

女神『汝は神界の爲めに晝夜間斷なく神業に從事して餘念なく、加ふるに百日百夜の苦行を嘗め、身体やつれ、痩おとろへ、歩行も自由ならざるに、誰の神々も恐れて近付きし事なき、此岩窟の神仙境に來りし事、感ずるに餘りあり。妾は今、汝の熱心なる信仰と誠實なる赤心を賞て、奥の神境に誘ひ、坤の大神豐國姫命の御精靈体なる照國の御魂を親しく拜せしめんとす。速に妾が後に隨ひ來れ』

と云ひつゝ、岩窟の奥深く進まれた。

命は女神の跡を辿りて、心も勇みつゝ、前進した。遥か前方に當りて、眼も眩き斗りの鮮麗なる五色の圓き光を認め、兩手を以て我面をおほひ乍ら恐る〳〵近付いた。女神はハタと立留まり、後に振返り命に向ひ、

女　『汝の修業は彌完成したり。直に兩手を除き肉眼の儘、御神体なる照國の御魂を拜されよ。この御魂を愼み拜せば三千世界の一切の過去と、現世と、未來の區別なく手に取る如く明瞭にして、二度目の天の岩戸開きの神業に參加し、天地に代る大偉功を　萬世に建て、五六七の神政の太柱と成らせ玉はむ。神界の狀勢は、此御魂に依りて伺ふ時は、必然一度は天地の律法破壞され、國治立命は根の國に御隱退の止むなきに立到り玉ひ、坤の金神豐國姫命も共に一度に御退隱のる可し。然して其後に磐古大神現はれ、一旦は花々しき神世と成り、忽ち不義の行動天下に充ち、僅に數十年を經て磐古の神政は轉覆し、茲に始めて完全無缺の五六七の神政は樹立さるゝに至る可し。汝は妄が言を疑はず、萬古末代心に深く祕めて天の時の到るを待たれよ。神の道にも盛衰あり、又顯晦あり。今後の神界は益々渉瀾回折に富む。焦慮らず、急がず、恐れず、神德を修めて一陽來復の春の來るを待たれよ』

と懇に說き諭し玉ひて、忽ち其の氣高き美しき女神の神姿は消ゑて了つた。

磐樟彥命は天を拜し、地を拜し、感謝の祝詞を恭しく奏上し玉ふや、今迄光の玉と見ゑたる照國の御魂は崇高なる女神と化し、命の手を執り、紫雲の扉を押し明け、寶座の許に導き玉ふた。

夢か、現か、幻か。疑雲に包まれ居たる折しも、寒風さつと吹き來つて、肌を刺す

一刹那身は高熊山の岩窟の奥に、端座して居た。

（大正一〇・一一・一七　舊一〇・一八　土井靖都録）

斯の道の蘊奥を深く究めたる
人の開きし三五の教
逆しまの世に惱みたる人草を
救はんために天降りし神の子

第一八章　神霊の遷座（一一八）

霊鷲山は磐樟彦命修業の霊場にして、天神地祇の中にても最も先見の明ある神々の潜みて時を待ち給ふ神仙の境なれば、等閑に附すべき所にあらずとし、磐樟彦命は諸神と議り霊窟の邊に大宮柱太敷く造營し、神々の御修業所として鄭重に設備を施し、三ツ巴の神紋は、社殿の棟に燦然として朝日に輝き、夕日に照り映ゑ實に壯觀を極めた。滿山悉く常磐の老松を以て覆はれ、得も言はれぬ程の神々しさであつた。社殿の境内には千年の老松、杉、檜、楓、雜木苔生して中天高く聳えたち　諸鳥の囀る聲は恰も天女の來りて音樂を奏するかと疑はるゝ斗りであつた。

茲にいよ〳〵社殿は完全に建て上げられた。八王神磐樟彦命、磐樟姫命を始め、

八頭神なる瑞穗別命、瑞穗姫命は神靈鎭祭の爲神衣を着し參拜さるゝ事となつた。祭官としては、神世彦命齋主となり、守國彦命副齋主となり、大川彦命は祓戸主となり、國清彦命は後取を奉仕し、清川彦命は神饌長となり、常立別命は神饌副長を奉仕した。供物は海山河野の種々の珍らしき供物が並べられた。神饌の中に鴨、山鳥、猪、海魚、川魚等數多八足の机代に盛られて在つた。茲に旗照彦命、久方彦命はこの供物を一見して、

『穢らはしき物を神前に献るは何の故ぞ。神は清淨を喜び汚穢を嫌はせ玉ふ。然るに斯の如き禽獸や魚類の肉を獻り、机下は神殿を汚し神慮を怒らせ、加ふるに博く萬物を愛せよとの、天地の律法を侵害し生物を殺して神饌に供するは、何たる心得違ひぞ。神は律法を定めて殺生を固く禁じ玉へり。神威を冒瀆するの罪輕からず。速にこの神饌を撤回し清淨無穢の神饌に改めよ』

と二神は肩を搖すり乍ら顏色赤く氣色ばみて述べ立てた。これを聞くより清川彦命、常立別命は容を改め襟を正し二神に向つて曰ふ。

『貴神等は今我等が獻らむとする神饌に對して色々と故障をいれ玉ふは心得ぬ事ともなり。況んや斯かる珎出度き大神遷座の席に於て折角選りに選り、清めし上にも清め千辛萬苦の結果、山野河海をあさりて漸く集め得たる宇豆の神饌を汚穢の供物なれば速に撤回せよとの貴神の暴言實に呆然たらざるを得ず。貴神等は祓戸の行事を何んと心得らるゝや。恭しく祓戸の神の降臨を仰ぎ奉り清きが上にも清き神饌なり萬一之をも汚穢の供物なりとせば、祓戸の神の御降臨は一切無意義にして只單に形式のみに終らん。我等の大神の祭典に奉仕せむとする以上は常に靈主體從の法則に依り

赤誠を籠めて奉仕す。苟ぞ形式的に、祓戸の神業を奉仕し、体主霊従の逆事に習はんや。慎んで二神の御熟考を請ひ奉る』

と顔色を柔げ乍ら陳辯した。旗照彦命、久方彦命は直に反對して曰ふ

『貴神の言は一應尤もらしく聞ゆれども、凡て大神は仁慈を以て神の御心と爲し博く萬物を愛育し給ふ。然るに其の廣き厚き大御心も無視し、神の愛に依りて生出でたる生物を殺し、天地の律法を破壞し、大罪を犯し乍ら、猶も之を大神の清き神饌に供せんとするは何事ぞ。仁慈の神の大御心を無視したる暴逆無道の擧動にして之に勝れる無禮の行爲は無かるべし。是非々々この供物は瞬時も早く撤回され度し。貴神は强情を張り神饌長の職を以て此儘にして我等の言を容れず、汚穢に充ちたる祭事を敢行するに、於ては、我等は只今限り折角の御盛典に列する事能はず』

と吾意見を固執して動く色なく、清川彦命、常立別命は大に當惑しつゝ在つた。双方の論爭を聞き兼たる祭主神世彦命は

神世彦『諸神暫時論爭を中止し玉へ。我今大神の神慮を奉伺し神示を得て正邪を決すべし』

と、直に件の大岩窟に白き祭服の儘進み入り神の敎示を乞ひ、再び祭場に還りて神敎を恭しく諸神に傳へた。神敎は極めて簡單にして要を得たものである。卽ち其敎示は、

『神は一切の萬物を愛す。神の前に犧牲とさるゝ一切の生物は幸ひなる哉。そは一の罪惡を消滅し新しき神國に生れ出づればなり』

と云ふ理義明白なる神示である。双方の爭論はこの神示を尊重し、恭しく祭典を完了し、天地に濂く言靈の祝詞に四方の神々集まり來りて、莊嚴無比の遷座祭の式は執行さ

れた。

（大正一〇・一一・一七　舊一〇・一八　栗原七藏錄）

瑞月

神殿に神は在ねど人々の
齋かむ度に天降ますかも
皇神の恩頼に報いんと
眞心かけて拜む齋庭

第六篇　青雲山

第一九章　楠の根元（二一九）

青雲山は、八王神として神澄彦命任ぜられ、神澄姫命妻神となり、吾妻彦命は八頭神となり、吾妻姫命は其妻神となり給ひて、青雲山一帶の神政を司る事となつた。

青雲山には國魂として、黄金の玉を祭るべく、壓んに土木を起して、莊嚴無比なる宮殿の建立に着手された。此宮殿を黄金の宮といふ。宮殿の竣工するまで、玉守彦をして大切に之を保護せしめた。

此黄金の玉は、十二個の國魂の内にても、最も大切なる國魂である。八王大神、一名常世彦命は、如何にもして此玉を手に入れんとし、部下の邪神、國足彦、醜態、玉取

彦に内命を下し、常に玉守彦の保護せる國魂を手に入れんと、手を替へ品を代へ、附け狙うて居た。

玉守彦は、大切なる此寶玉を、敵に奪はれん事を恐れ、窃に同形の石玉を造り、之に金鑛金を施し、眞正の玉には墨を塗て黒玉となしつゝあつた。玉守彦の妻神玉守姫は此樣子を窺ひ知り、玉守彦に向つて其不都合を責め、且つ偽玉を造りたる理由を尋ねて止まなかつた。玉守彦は止むを得ずして答ふるやう

玉守彦『此黄ん の玉は、天下稀代の珍品にして、再び我等の手に入るべきものに非ず、吾れ此玉の保管を命ぜられしを幸ひ、同形の偽玉を造り、之を宮殿竣工の上、殿内深く納め、眞正の玉は吾家に匿し置き後日此玉の徳によつて、我等夫婦は、青雲山の八王神となり、一世の榮華を極めんと思ふ故に偽玉を造りたり』

と云ひつゝ、玉守姫の顔を視いた。玉守姫は喜色滿面に溢れ、大に夫神の智略を譽め立てた。

玉守彦は智慧淺く、口輕く、嫉妬深き妻神の玉守姫に、秘密を看破されし事を憂ひ、終日終夜頭を垂れ、腕を組み、溜息を吐いて思案に暮た。女神は嫉妬の爲に大事を洩らす事あり、如何にせば妻神を詐り、この秘密の漏洩を防がんかと苦心焦慮した。

茲に玉守彦は、眞僞二個の玉を、玉守姫に預け置き

玉守彦『我は數日間山中を跋渉し、眞寶玉の匿し場を探し來らん。汝は大切に此寶玉を片時も目放さず、堅く守るべし。此玉は我等夫婦の榮達の種なり』

と、まづ名利慾を以て玉守姫を欺き、自分は山に入りて、兎を擒り、また海に到りて鮭を捕へ、夜中窃に、寶珠山に別入り、廣い谷川の瀨に兎を笊に容れ、淺瀨に浸し置き

八尾の鮭を大樹の枝に吊し、何喰はぬ顔にて數日の後吾家に歸り、玉守姫に、適當なる匿し場所を探し得たる事を、喜び勇んで報告したのである。玉守姫は大に喜び

玉守姫『善は急げといふことあり。一時も早く、此黒き黄金の寶玉を匿し潛かん』

と玉守彦の神を曳いて、そは〳〵しき態度を現はし急き立てた。玉守彦は、

玉守彦『然らば明朝未明に吾家を出で、汝と共に寶珠山にゆかん』

と答へ、その夜は二神共に安眠し、早朝黒き玉を携へ山深くわけ入つた。途中かなり廣き谷川が流れて居る。二神は淺瀬を選んで渡り始めた。川の中程に到る時、バサ〳〵と音するものあり。玉守姫は耳敏く之を聽きつけ、眼を上流に轉じた。川中には一個の笊が淺瀬にかゝり動いて居る。二神は不思議に堪へずと近寄り、笊の蓋を明けて見た。中には兎が二匹這入つて動いて居る。玉守姫は玉守彦に向ひ

玉守姫『之は實に珍しき獲物である。天の與へか幸先よし』

と笊と共に之を拾ひて、なほも山奥深くわけ入つた。

鬱蒼たる老松は天を覆ひ、晝なほ暗き迄に繁つて居る。その樹下に二神は横臥して息を休め、玉守姫はフト空を仰ぎ見る途端に

玉守姫『ヤー不思議』

と絶叫した。玉守彦は素知らぬ顔にて

玉守彦『不思議とは何事ぞ』

といつた。玉守姫は頭上の松の梢を指し

玉守姫『此松には澤山の鮭が生つて居る』

と答へた。玉守彦は如何にも不思議千萬と呆れ顔に答へ、直にその木に上り、鮭を一々

樹の枝よりむしり取つた。二神は其鮭と兎を重たげに擔ひ尙も山深くわけ入り、楠の大木の根元に玉を埋めて歸つて來た。

そして二神は兎と鮭を料理して、祝ひの酒を飲み、雪隱にて饅頭喰ひし如き顏にて日を過した。

（大正一〇・一一・一八　舊一〇・一九　栗原七藏錄）

國々の神の政を知食す
生國魂の著き御勳功

瑞月

第二〇章　晴天白日（一二〇）

青雲山上の黃金の宮は竣工を告げ、愈國魂として、黃金の寶玉を鎭祭する事になつた。神澄彥命は、玉守彥を招き

神澄彥『前に保管を命じたる寶玉を持參せよ』

と命じた。玉守彥は、預かりし玉を恭しく奉持して之を奉り、莊嚴なる儀式の下に國魂は祀られた。茲に玉守彥は、黃金の宮の司となり、嚴重に守護することとなつた。

玉守彥の侍女に良姬といふのがある。常に玉守彥夫妻に忠實に仕へ、特に玉守彥には親任最も深く、何事も良姬に相談した。玉守姬は夫神の良姬を深く信ずるを見て、嫉妬心を起し、自暴自棄となつて、日夜飲酒に耽り、隣神を集め踊り狂ひ、やこもすれば酒

氣に乘じて、夫神の秘密を口走る。そして玉守彦と良姫の間には少しも汚き關係はなかつた。

玉守彦は、妻神の日夜の放埒を見るに忍びず嚴しく訓戒を加へた。玉守姫は忽ち眉を逆立て目を瞋らせ、顏色鋭く、狂氣の如くになつて、玉守彦に向ひ

玉守彦『貴神は平素妾を疎んじ、侍女の良姫を寵愛し、妾に侮辱を與ふ。最早勘忍袋の緒も切れたれば、妾はこれより八王神の御前に出で、夫の隱謀の次第を逐一訴へ奉らん』

と云ふより早く、我家を飛び出し、八王神の御前に夫の罪を殘らず奏聞したのである。

奏聞の次第は

玉守姫『玉守彦は大切なる黃金の寶玉を預りながら、此玉を我物とせんと謀り、眞の寶玉には黑く塗を塗り、別に同形の石の玉を作り、之に金鑛金をかけ、眞の玉は、寶珠山の奥深く之を埋め、擬玉を差出して、黃金の宮に祀り、後日時を得て、眞の寶玉を取り出し、玉の神力に依つて、青雲山の城寨を乘取り、八王、八頭の神を放逐し、己取つて代つて八王神とならんと、不軌を謀りつゝあり。夫ながらも實に恐ろしき惡逆無道の惡神なり。速かに捕へて獄に投じ、國の害を除かせ玉へ』

と嫉妬の炎凄じく、身を搖つて泣いて訴へた。こゝに八王神神澄彦命は、八頭神吾妻彦命を招きて、玉守姫の訴への次第を物語り、直に玉守彦を召し捕へしめた。

玉守彦は妻神の玉守姫と共に、吾妻彦命の前に呼び出され、嚴しき訊問を受けた。

玉守彦は、言辭爽かに其無實を陳辯し、且

玉守彦『玉守姫は嫉妬深く、今は狂者となれり、必ず彼が如き狂者の言を信じ給ふ勿れ

至誠は天に通ず。願はくば天地の大神も我が赤誠を照覽あれ」

と天を拜し地を拜し、涕泣して訴へた。この時玉守姫は首を左右に振り吾妻彦命に向ひ、

玉守姫『玉守彦は大膽不敵の曲者なり。彼は確かに國魂を寶珠山に埋め、この黄金の宮の國魂は擬玉を祀り居れり。其證據は現在妻の妾と共に山中に匿し置きたり。何時にても其所在をお知らせ申さん』

と周章しく苛ち氣味に奏上した。玉守彦は言辭を荒らげて、妻に向ひ

玉守彦『女の姦ましき要らざる讒言、今に天地の神罰は立所に到らん、慎めよ』

と睨めつけた。玉守姫は躍氣となり、

玉守姫『夫神は何を呆け顔に辯解するや。寶珠山の谷を渡る時、川の中にて二匹の兎を生捕にし、又寶珠山の松の大木に大いなる鮭の生り居りたるを妾が見付け、夫神と共に之をむしり歸りて、其夜兎と鮭を料理し、祝酒を飲みし事をよ　や　忘れ玉ふまじ。其時寶珠山に玉を埋め置きたるを忘れたるか』

と烈火の如くなつて述べ立てた。玉守彦は吾妻彦命に向ひ

玉守彦『只今お聞き及びの通り、妻の玉守姫は發狂し、取止めなき事を述べ立て候。彼が如き狂人の言は御採用なからんことを乞ふ』

と奏上した。吾妻彦命は玉守姫の狂者たることを知り、茲に玉守彦の疑ひは全く晴れ許されて家に歸つた。

八王大神常世彦命は、黄金の宮の國魂を奪はんとし、部下の國足彦、醜熊、玉取彦に命じ、種々の奸策を授けた。或夜國足彦等は夜陰に乘じ、黄金の宮に入り國魂を首尾

よく盜み、遠く常世の國へ逃げ歸つた。八王神澄彦命は國魂を拜せんと諸神を從へ神殿に進み入つた。此時神前の堅牢なる錠前は捻切られ、肝腎の國魂は紛失して居た。

そして

『八王大神の部下、國足彦、醜熊、玉取彦、玉を取つて常世の國に立歸る、藻脫の空の宮の神德彌顯著ならん、アハ、、、、』

と認めてあつた。八王神は顏色靑ざめ、

神澄彦『我は貴重なる國魂の守護を命ぜられ乍ら、今之を敵に奪取され、大神に對して謝すべき辭なし。此玉なき時は八王の聖職を奪はれ、且重き罪に問はれん。如何はせん』

と歎き玉ふ折しも、玉守彦は進み出で

玉守彦『八王神よ必ず神慮を惱まし給ふこと勿れ。我は寶玉の保護を命ぜられてより、今日あることを前知し、擬玉を作りて奉齋し、眞正の國魂の寶玉は、寶珠山の奥深く楠樹の下に大切に埋め置きたり。直に之を掘出して更めて鎭祭し玉へ』

と誠を色に現はして奏上した。神澄彦命は大に喜び、直に玉守彦を先頭に、數多の神々を遣はし、白木の輿を作りて寶玉を納め、靑雲山に奉迎せしめ、茲に更めて立派なる遷座式を擧行し、玉守彦は疑ひ解けて晴天白日となり、且その注意周到なる行動を激賞し、重く用ゐらるゝ事になつた。

（大正一〇・一一・一八　舊一〇・一九　河津雄錄）

第二一章　狐の尻尾（二二）

ヒマラヤ山には純銀の玉を其の國魂とし、白銀の宮に恭しく鎭祭し、高山彦命は八王神に任ぜられ、高山姫命は妻神となつて神業を輔佐し、ヒマラヤ彦命、八頭神となり、ヒマラヤ姫命を妻神とし、神政を監掌し、一時よく上下共に治まつた。白銀の宮には玉國別宮司として恭しく奉仕した。

茲に八王大神常世彦命は、部下の武寅彦、武寅姫及び猛依別に命じ、種々の秘策を授けて、此國玉を奪取せしめんとして居た。武寅彦は毎日毎夜宮詣でに事寄せ、晝夜の間斷なくつけ狙うて居た。茲に玉國別は武寅彦等の行動を訝かり、密かに同形同色の擬玉を造り、之を神殿に鎭祭して居た。武寅彦等は玉國別の妻神なる國香姫に、種々の手段をもつて近づき、珍らしきものを與へ、巧言令色到らざるなく、漸くにして國香姫を藥籠中のものとして仕舞つた。さうして武寅彦は、國香姫に向ひ

武寅彦「貴神にして白銀の宮に鎭まれる純銀の國魂を、夫、玉國別に奪はしめ、之を常世國の八王大神に獻じなば、汝夫婦をヒマラヤ山の八王神に任じ給ふべし。他神の幕下に何時迄も、唯々諾々として神妙に仕ふるも、惡き事には非ざれども、彼の庭前の小松を見られよ、大木の蔭に立てる小松は何時迄も幹細く葉薄く日蔭の境遇に甘んじ幾年を經るも、立派に成長する時期なし。然るに同じ時に植ゑられたる小松も、大木の蔭に隱れざる松は、年と共に成長し、幹強く枝繁り、衝天の勢を有するに非ずや貴神は斯の如き、不利益なる地位に甘んずるよりも、人は一代、名は末代と云ふ諺あり。此際奮起して純銀の玉を奪ひ取り、身の榮達を計られよ」

と口を極めて巧妙に説得した。國香姫は幾度も頭を縦に振り、肩を搖り、會心の笑を漏らし、武寅彦に向つて夫神、玉國別をして其目的を遂せしむる事　豫約した。

茲に國香姫は邪神の甘言に惑はされ、夫玉國別に向ひ種々言葉を盡して、國魂を盗み取らしめんとした。玉國別は天地の律法を嚴守せる正義の神なれば國香姫の言を聽いて大に怒り、唯一言の下に叱責せんとしたが、忽ち「省みよ」と云ふ　律法を思ひ出し、俄に笑顔をつくりて曰ふ

玉國別「之れには深き仔細のあることならん。我は最愛なる汝のために玉を盗み出し夫婦諸共一度の出世をなさん」

と、態と嬉しげに答へた。國香姫は夫神の逐一承諾せる事を、武寅彦に急ぎ報告した。武寅彦は願望成就の時こそ來れり、八王大神の賞賜に預からんものと、身も心も飛び立つばかり、勇み進んで夜半、玉國別の舘を訪れた。

玉國別は喜んで、三柱の神を迎へ、山海の珍味佳肴を以て饗應し、丑滿の頃、武寅彦等を伴ひ白銀の宮に詣で、自分は黄金の鍵をもつて社の錠をはづし、扉を開き大なる麻の袋に擬玉を包み持ち出し、再び扉を閉ぢ、武寅彦に向つて云ふ

玉國別「首尾よく國魂は手に入れり。一時も早く此場を立ち去り、玉の湖の畔に到りて之を渡すべし。長居は發覺の恐れあり」

と自ら先に立ち、夜陰に紛れて玉の湖の畔に出た。

此時玉國別は武寅彦外二神に向つて笑つて云ふ

玉國別「貴神等は實によく巧妙に化けさせ給へども、如何せん、背後に白き狐の尻尾の見ゆるは不都合ならずや。我は實にヒマラヤ山に住む年經たる大狸なれども、貴神

等の如く少しも尾を見せし事なし」

と云つて武寅彦等の顏を穴のあく程覗いて見た。三柱は、玉國別の言葉に感歎して云ふ

「われは貴神の見らるゝ如く、常世國の白狐なり。然るに今貴神に其正體を看破せられたるは、實に慚愧の至りである。貴神は何故に尻尾の見ねざるや」

と訝かり問ふた。玉國別は、こゝぞと肩を搖り、鼻びこつかせ、得意滿面の體に

玉國別「さればとよ。我は純銀の玉を近く守り居れば、其玉の德によりて天地の間に如何なる貴き神も我正體を見極むるものなし。貴神等も此玉に一度手を觸れ給ひなば我等の如くよく化け果さるべし」

と笑つて云つた。武寅彦は矢も楯も堪らず、

武寅彦「われに此玉を持たせ給はずや」

と羨まし氣に顏を覗き、玉國別の首は何れにふれるやを凝視した。玉國別は忽ち首を左右に掉り

玉國別「中々もつて滅相千萬、この玉は常世國の八王大神に奉るまでは他見は許されぬ」

ときつぱりと刎付けた。武寅彦等は兩手を合せ

武寅彦「常世國まで歸る道は中々長し。萬一途中にて我が尻尾を他神に發見せられなば身の一大事なれば、お慈悲に唯一度我手に觸れさせたまへ」

と歎願した。玉國別は不性不性に

玉國別「然らば望みを叶へさせん。三柱とも一度に白狐の全正體を現はし、この麻袋に飛び込み、各自由に手を觸れられよ」

と云つた。

茲に三柱とも忽ち白狐と變じ、先を爭ふて布袋に飛び込んだ。玉國別は、手早く袋の口を締めた。

玉國別「サア惡神ども思ひ知つたか。狐の七化け、如何に巧に化けるとも、狸の八化けには叶ふまじ」

と云ひつゝ袋を大地に幾度となく拋げつけた。中より白狐は痛さに堪へ兼ね苦しき悲しき聲を擧げて救ひを求めた。玉國別は

玉國別「邪神の眷屬馬鹿狐、容赦はならぬ」

と云ひつゝ袋に重き石を縛りつけ、玉の湖の淵へぎつと投げ込んだ。忽ち湖水は左右に開き波浪立ち騷ぎ、擬玉も、狐も共に、ブク〳〵と音をたて湖水の底深く沈沒したのである。

此事常世彥命の耳に入り、純銀の國魂は玉の湖の底深く、白狐と共に沈めるものと確信された。之より白銀の宮の國魂を奪はんとする計劃は、跡を絶つたのである。

（大正一〇・一一・一八　舊一〇・一九　加藤明子錄）

瑞月

敷島の道開きたるひとの聲
天地四方に鳴り渡るなり。
皇國の爲に誠を盡したる
人の子攻むる世こそ歎てき。

第二二章　神前の審判（一二二）

天山には黄色の玉を祀り、宮殿を造營して、之を鎭祭し、埴安の宮と名づけられた。齋代彦命を八王神とし、妻神齋代姫命をして神業を輔佐せしめ、谷山彦命を八頭神となし、谷山姫命をして神政を輔助せしめられた。谷山姫命は嫉妬猜疑の念深く齋代姫命の命令を聽くことを非常に不快に感じて居た。常に二神は、犬猿の如く、互に嫉視反目を續け、其が爲に天山城内の神政は、常に紛擾が絶えなかつた。

茲に八王神は、部下の邪神荒國彦を谷山彦の肉体に憑依せしめ、又荒國姫といふ邪神を谷山姫命に憑依せしめた。是より谷山彦命夫妻の性行は俄然一變し、齋代彦命夫妻を却け、自ら八王神たらんことを企てた。斯の如く惡心を起したのは、憑靈の所爲である。茲に谷山彦命は妻神の使嗾に因り、埴安の宮司、國代彦、國代姫の夫婦を手に入れ、國魂を盜ましめ、八王神の身に、失策を招かしめ、其目的を達せんとした。

然るに宮司國代彦は正義の神なれば、容易に其心を動かすべからざるを悟り、妻の國代姫を甘言を以て説得せんとした。國代姫は谷山彦夫妻に招かれた。谷山彦命はいふ谷山彦「汝の辯舌を以て夫國代彦の心を動かし、國魂を盜み出さしめなば、我は直に八王神の位に上り、汝等夫妻を八頭神の位置に据ゑん」

と言葉巧に説き立てた。國代姫は其成功を危み、且天地の律法に背く由を述べ、之を謝絶せんとした。此時何心なく夫の國代彦は此場に現はれた。谷山彦命は國代彦に向つて前述の謀計を打明けた。國代彦は一も二もなく贊成の意を表した。國代姫は夫の言に

驚き涙と共にその惡行を止んとて泣いて諫言した。されど國代彦は決心の色を面に現はし、今此場に於て、谷山彦命の意見に反對を表せんか、如何なる危害の身邊に及ばんとも計り難しと、態と空惚けていふ

國代彦『我は天則違反の行爲ならんと察すれども、諺にも勝てば善神、敗れば邪神といふことあり。我が出世榮達の道を開かせ給ふならば、悅んで貴神の命を奉ぜん』

と即答した。

谷山彦命夫妻は大に喜び、埴安の宮の祭典を行ひ、之を潮に宮司、國代彦をして玉を盜み出さしめんとした。國代彦は同形同色の僞玉を造り、深く懷に秘めて祭典に列し自ら鍵を出して、宮の扉を開き種々の供物を獻じ、窃に僞玉を谷山彦命に手渡しした。谷山彦命は素知らぬ顏に、之を懷中に秘して居つた。祭典は無事に終了したが、八王神齋代彦命、齋代姫命も列席され、直會の宴は盛んに開かれ、入百萬神は神酒に醉ひ、歌を謠ひ、踊り狂ふて居た。此時國代彦は起ちて歌を謠ひ、頻りに踊り始めた

其の歌は

國代彦『時世時節は怖いもの、
　深山を越えて谷越えて、
　常世の國の涯の涯、
　黃が氣でならぬ玉の守り。
時世時節は怖いもの、
　谷は變じて山となり、

山は代つて谷となる、
　變れば變る世の中よ。
頭は今に尻尾となり、
　尻尾は轉げて谷底へ、
落ちて苦む眼前、
　何の用捨も荒國彥の、
靈の憑りし谷と山、
　何處の國代か知らねども、
木々（黃々）の木魂に響くなり。
　埴安宮の玉欲しと、

谷と山から攻めて來る、
　谷と山から狙ひ居る。
照る日の影は淸くとも、
　雲霧立つは山の谷、
虎狼も隱れ住む、
　氣をつけ守る國世彥、
玉は日に夜に曇るなり。
　曇る玉こそ替玉よ』

といつて面白く踊り狂ふた。茲に八王神、齋代彥命は此歌を聽き、谷山彥命の謀反を悟り、直に夫妻二神を捕へて、嚴しく詰問した。谷山彥命は答ふるに實を以て

した。

茲に齋代彦命は谷山彦命夫妻の職を免じ、國代彦、國代姫をして八頭神の後を襲はしめんと宣言された。此時謙讓、德高き國代彦夫妻は

國代彦『命の大命實に有り難く、身に餘る光榮なれど、我はかゝる聖職に任ぜらるゝの資格なし。願はくば以前の如く宮司たらしめられたし。谷山彦夫妻は思ふに元よりかかる惡事を企つる如き邪神にはあらず。惡靈の憑依に因つてかゝる無道の行動に出でられしならん。速に神前に伴ひ行きて嚴肅なる審神を奉仕し、其上にて裁斷あらんことを』

と涙を流し赤心面に溢れて奏上した。齋代彦命は打ち頷き、直に二神の審神を開始された。忽ち二神は上下左右に身體震動し、邪神荒國彦は谷山彦命の体内より、荒國姫は谷山姫命の体内より、神威に畏れて脱出し、惡狐の正体を現し、常世の國に向つて雲を霞と逃げ去つた。

邪神の脱け出でたる後の谷山彦命夫妻は、夢から醒めたる如く前非を悔い、且邪神の謀計の恐ろしきを悟り、それより心を改め、神々を篤く信じ、元の誠心に立ちかへつた。齋代彦命は今迄の谷山彦夫妻の行動は、全く邪神憑依の結果となし、其罪を赦し元の如く八頭神の聖職に就かしめた。

（大正一〇・一一・一八舊一〇・一九　土井靖都錄）

背に腹を替へて斯の世に降りたる
人の子攻むる世こそ嘆てき。

瑞月

形ある實に眼くらみなば
　罪に汚れし身とぞ成り行く。
人を愛で慈しむ共天地に
　おそるゝなくば道にさからふ。
味氣無き舌の劔や大砲は
　萬のあだを招き集むる。

第七篇　崑崙山

第二三章　鶴の一聲（二三）

崑崙山には紅色の國魂を、紅能宮を造營して鄭重に鎭祭され、八王神には磐玉彦命を任じ、妻神磐玉姫命は神務を輔佐し、八頭神は大島彦命任ぜられ、大島姫命妻神として神政を内助し、紅能宮の司には明世彦、明世姫の二神奉仕して、崑崙山一帶の地方は、極めて太平無事に治まつて居た。

磐玉彦命は名利に薄く、且つ忠誠無比の神にして、一切の寶玉、珍品を地の高天原に獻納し、自己を薄くし、下を憐み、善政を布き給ひて、四邊克く治まり、鼓腹擊壤して神人その業を樂み、小彌勒の神政を樹立された。爲めに天上の日月は清く晴れ渡り、蒼空一點の妖氣を止めず、五風十雨の順序整ひ、地には蒼々として樹草繁茂し、五穀

豐に、鳥啼き花笑ひ、四季共に春陽の氣充ちて、世界第一の樂土と羨望さるゝに至つた。

磐玉彦命は

磐玉彦『天下克く治まり、神人自ら田を耕して食し、井を穿つて飲み、室に憤怨の聲なく、神人的和樂の色あり。斯る瑞祥の世には、天地の律法も徒に空文と化し、八王神の聖職もまた無用の長物たり。我は日夜無事に苦みつゝ、高位にあるは、天地に對し何んと無く心愧かしさに堪へず。速に八王神の聖職を辭退して下に降り、神人と共に神業を樂まん』

と決意し窃に八頭神、大島彦命を招き、其の意を告げ示した。

大島彦命は此の言を聞きて大に驚き、暫時默然として何の答辯も無く、八王神の御顏を眺めつゝあつたが、忽ち首を左右に振り涙を流して諫めて曰ふ

大島彦『崑崙山一帶の今日の至治太平なる祥運は、貴神の神德の致す處にして、我等を始め下萬神萬民の貴神を慕ひ奉りて、感謝措く能はざるところ也。然るに貴神にして聖位を捨て、野に下らせ玉へば、何れの神か、克くこの國土を治むべき。上を敬ひ下を愛撫し、以て社稷を安全に保つは聖者の天賦的聖職なり。願はくば大慈大悲の聖德によりて、何卒退位の儀は、斷念させ給へ』

と聲涙交々下つて、諫言克く努めたのである。天使磐玉彦命は答へて

磐玉彦『我は八王神として、高天原の大神より重職を忝なうし、何の功勞も盡さず、日夜神恩の深きを思ふ毎に、慙愧の念胸に迫りて苦しく、一日として心を安ずること能はず。下神人は日夜營々兀々として神業に奉仕し、汗油を搾りて勤勉神業を勵む。我は

徒に雲深く殿中に在りて、安逸の生を送り、何の活動をも爲さず、曠職徒に光陰を消するは、天地の大神に對し奉り恐懼に堪へず。今日の至治泰平は、要するに貴神等が誠實と苦心の賜なり。速に我の思望を許し、貴神は直に、八王神の位に昇りて神務を主管されたし。我は是より夫妻共に山野に隱れ、修驗者となりて神明に祈り、神政の萬歳を守らむ。男神の一度決心したる上は、如何なる諫言も拒止も耳に這入り難し」

と決心の色面に現はれ容易に動かすべからず。大島彦命も、平素寡慾にして恬淡水の如き八王神なれば、如何ともするに由なく、只默然として深き憂に沈む。ヤ、ありて大島彦命は口を開き

大島彦『貴神の潔白なる御神慮は、神人共に常に歎賞措かざる所、今更如何に諫め奉るとも、初志を翻させ玉ふこと無からむ。されど貴神の身魂は貴神單獨に處置さるべき輕々しきものに非ず、遠き神世の因緣に因りて上下の名分定まり、天地の大神の優渥なる御委任に出づるものなれば、我等は是より直に地の高天原に參上がり神示を蒙りし上、其の結果を詳しく奏上せむ。何は兎もあれ、夫までは何事も我に一任あらん事を』

と力を籠めて歎願した。磐玉彦命は

磐玉彦『貴神の言道理に叶へり、萬事は汝に一任す。良き樣に計ひくれよ』

と言を殘して奥深く姿をかくした。

大島彦命は直に天の磐船に乘り、從神を伴ひ空中風を切つて龍宮城に到着し、天使長大八洲彦命に謁を乞ひ、八王神の退隱の件に就き、裁斷を下されん事を奏請した。

茲に天使神は、直樣地の高天原の大宮に到りて國直姫命に拜謁し、前述の次第を逐一奏上し、神勅の降下を願ふた。國直姫命は、衣服を更め、身体を清め、大神殿に進み入り、恭しく神勅を乞ひ玉ひ、大八洲彦命を近く召し、容姿を改め、嚴かに神示の趣きを傳達された。その神示の大要は、

國直姫『磐玉彦命は遠き神代よりの御魂の因緣に由りて、崑崙山に八王神の聖職を拜するは動かすべからざる神界の一定不變の經綸なり。君神は萬古君神たるべく、臣神は又萬古末代臣神たる可し。王神にして臣神となり、或は下賤の地位に降り、臣神にして忽ち王神の位に進む如きは、天地の眞理に違反し、且大神の御神慮を無視するものなり。神勅一度出ては再び之を更改すべからず。神の一言は日月の如く明かにして一毫も犯すべからず。且名位は神の賦與する正慾にして、長者たるもの、缺くべからざる榮譽なり。磐玉彦命如何なれば斯かる明瞭なる問題を提出して、大神の御神慮を惱ませ奉るぞ。例令生るも死するも皆大神の御心の儘なり。一時も早く片時も速に神慮を反省し、以て神勅のまにまに八王神の聖職を奉仕し、今後再び斯かる問題を提出し神慮を煩はす事勿れ』

との嚴命であつた。

大八洲彦命は神示を拜し、恭しく禮を述べ、大島彦命を近く招きて、神示を詳細に諭達した。

大嶋彦命は大に歡び急ぎ崑崙山に飛還し、八王神に一切の神示を恭しく復命奏上した。素より正義純直の八王神は、神勅を重んじ前非を悔い、再び元の聖職に就き、其後數百年の間は、實に至治至樂、泰平の聖代が繼續された。神命の犯すべからざるは、

之にても窺ひ知らる可し。

（大正一〇・一一・二〇　舊一〇・二一　今井梅軒錄）

瑞月

久方の天津御神の御心は
人の魂の基なりけり。

肝向ふ人の心は天地の
神のまに〳〵動きこそすれ。

第二四章　蛸間山の黑雲（二二四）

蛸間山には銅色の國玉を鎭祭し、吾妻別命を八王神に任じ神務を主管せしめ、妻神には吾妻姫命を娶はし內面的輔佐を命じ、國玉別命を八頭神に任じ國玉姫命を妻神として神政を輔助せしめられ、駒世彥を宮司となし、駒世姫をして祭事に從事せしめられたのである。然るにこの蛸間山には、豫て地の高大原より、天使言靈別命神命を奉じて國魂の神を鎭祭し、莊嚴なる宮殿まで建立しあれば、約り二個の國魂を並べ、祭祀さるゝ事となつた。茲に二つの國魂の靈現はれて互に主權を爭ひ玉へば、蛸間山は常に風雲立籠め、時に暴風吹き起り强雨降りそゝぎ樹木を倒し、河川の堤防を破壞し、濁水地上に氾濫して神人その堵に安んずる事能はず、神々の嫉視反目は日に月に激烈の度

を加へ、東天より西天に向つて眞黒の雲橋懸りて天地は爲に暗黒となり咫尺を辨ぜず。こゝを以て常夜往く萬の妖は悉く起り、國土間斷なく震動し、草の片葉に至るまで言問ふ無道の社會を現出し、所々に大火あり大洪水あり疫病蔓延して神人將に滅亡せんとした。銅能宮は日夜震動して妖氣を吐き、國魂の宮また同時に大音響を發して百雷の一時に轟くかと疑はるゝ斗り凶兆頻りに到り、神人共に心安からず、戰々兢々として纔に日を送る有樣であつた。

國魂の神よりして既に斯の如く互に主權を爭ひ殆んど寧日無きの有樣であるから、その靈精また一は八王神に憑依し、一は八頭神に憑りて常に狂暴の行爲多く、殊に八頭神には前の國魂神憑依して、八王神の命令に一々反抗し互に權利を主張して、相讓らず犬猿も只ならず氷炭相容れず、混亂紛糾益々甚だしく神人塗炭の厄に苦み、荒ぶる神々の言騷ぐその聲は、五月蠅の如く群がり起りて修羅道を現出し、動亂止む事なく饑饉相次ぎ虎狼、豺狼、毒蛇、惡鬼、妖怪なぞの邪靈は地上に充ち滿ちた。此の事直に國祖の御耳に入り國直姫命の口を藉りて、天使長大八洲彥命に神敎を傳へしめ給ふたのである

國祖の御神敎の大要は

國祖『天に二日無く地に二王なきは天地の神則なり。汝等蛸間山に國魂の神を鎭祭し置き乍ら、國魂神には何の通告も爲さず、新に同じ神山に二個の國玉を奉齋せるは、自ら秩序を紊亂し爭亂の種を蒔くものなり。彼等八王神八頭神は名利に耽りて爭ひ憎み、互に怒りて天下を騷擾せしむるの罪輕からずと雖も、要するに一所の靈山に二体の國魂を鎭めたる失敗の結果にして、直に二神を懲戒すべきに非ず、此度の出來事は凡て汝等の一大責任なるぞ。神は神直日大直日に見直し詔り直し以て今回はそ

の罪を問はざるべし。一日も早く改言改過の實を擧げ、蛸間山を境として國土を南北に兩分し、その持場を決定し騷亂を鎭定し國祖の大神に復命せよ」

と嚴かに宣り玉ふた。

大八洲彦命は恐懼措くところを知らず、自らの不明不德を謝し、天使大足彦命と共に蛸間山に向つて出發した。

大八洲彦命は八王神に、大足彦命は八頭神に向つて神示を說き諭し神恩の忝なく尊き事を殷懃に宣り傳へた。八王神は直に天使長の懇篤なる說示を承はり、飜然として前非を悟り且つ國魂の神の最も恐るべき威力に感じ、正心誠意を以て神業に厚く奉仕し、且つ如何なる神勅なりとも、今日限り斷じて違背せじと、心底より誓約を爲したのである。

之に引替へ、大足彦命は八頭神なる國玉別命に向ひ順逆の道を說き、神の威德を諭し言辭を竭して說示した。國玉別命は天使の敎示を聞くや忽ち顏色獰猛の相を現はし、口を極めて反抗し容易に屈伏せず、殆んど捨鉢となつて天使、大足彦命の面上に嚙み付かむとした。大足彦命は、心得たりと兩手の指を交叉し鎭魂の姿勢をとり、ウンと一聲發くその言靈に、國玉別命は地上に仰天して倒れ、口中よりは多量の泡沫を吐き出し悶え苦しむ。天使は猶も一聲言靈の矢を放つや、八頭神の体內よりは俄に黑煙立ち登るよと見る間に、金毛八尾の惡狐の姿が現はれ、雲をかすみと西の空目掛て逃失せた。

國魂神の嫉妬的發動の狂態を洞察したる常世國の邪神は、貪、瞋、痴の迷に附け入り忽ち憑依の目的を達し、進んで八王神を倒し、八頭神を失墜せしめ、蛸間山を攪亂せ

んとして居た。八頭神は始めて覺醒し天使に向つて以前の無禮を謝し、我が精神空虛にして意志强からず終に邪神の容器となり、神を無視し長上を侮蔑し天地の律法を破りたる大罪を悔い、低頭平身罪に處せられん事を願つた。大足彦命は大足彦『國魂の神ある上に重ねて再び、國魂の神を齋りたるは天使長以下の經綸を誤りたる結果なれば、其の責任は我等も同樣なり。されど仁慈深き大神は此度の事件に關しては、寛大なる大御心を以て、神直日大直日に見直し聞き直し詔り直し玉ひて、我等互の大罪を忘れさせ玉ひたり、心安く思召されよ』と滿面笑を浮べて宣り聞かせた。國玉別命は神恩の尊く忝なく涙を瀧の如きに流し、衷心より改悛の情を表し、八王神に忠實に仕へてより、天地和順し上下克く治まりて、松の神代の常永に時津風枝も鳴らさぬ聖代を招來する事となつた。

今まで天空に橋狀をなして横たはりし黑雲は、次第に散亂して拭ふが如く天明けく地清く、神人和樂の極樂淨土を現出したのである。是より二個の國魂を南北に分ち祭られ國土を二分して、北方は八王神吾妻別命之を主管し、南方は八頭神國玉別命之を主管する事となつた。君主的神政の神界の經綸もこゝに彌々民主的神政の端が啓かれたのである。

（大正一〇・一一・二〇　舊一〇・二一・午後八時東の天より西の天に向つて一條の怪しき黑雲横たはり、天を南北に區劃し、天地晻憺たる時、龍宮館に於て、加藤明子錄）

軒ゆがみ壁の落ちたる人の家に　　瑞月

産聲あげし瑞御魂かも。

第二五章　邪神の滅亡（一二五）

吾妻別命、吾妻姫命二神の間に、月世姫、月照姫、五月姫の三姫神があつた。長女の月世姫は、其の性質粗暴にして常に邪神の群に出入し、邪神と結託して、蛸間山を混亂紛擾せしむる事にのみ全力を集注して居た。

吾妻別命の重神たる日出彦は、平素月世姫の行動益々暴逆の度を加へ、非事醜行止まざるを歎き、涙を振つて屢々之を諫めたれども、月世姫は一言半句も耳を籍さず、終には日出彦を讒訴して之を排除せんと企て、百方手段を盡して蛸間山城の神々を籠絡し市守姫、畑野彦、田長彦、國平別、竹代彦等を股肱の臣となし、晝夜謀計を廻らし、日出彦に失敗を來さしめんとし、茲に芳香姫と云ふ美はしき女神に策を授けて、日出彦を陷れんとした。

日出彦は八王神の命を奉じて、龍宮城に使せんとする時、芳香姫は門に立塞がり日出彦の袖を曳きて之を止め、且つその顏色を熟視して曰ふ。

芳香姫『貴神は何故に妾を平素詐り玉ひしや、殘念々々』

と身を震はし、聲を曇らせ涕泣する。日出彦は芳香姫の言、少しも合點行かず、只呆然として芳香姫の樣子を怪しみ眺めて居た。

芳香姫は忽ち日出彦に抱き付き、

芳香姫『無情非道の我夫神よ。白々しき貴神の御樣子。ア、妾は今迄貴神の玩弄物とされ居たるか。死なば諸共死出の山、三途の川も共々に渡らむものと誓ひし仲をも顧みず、龍宮城に御使の旅出に、只一言の御相談もなく妾を捨て遙々と出行き玉ふは餘り

の無情。ア、殘念や、口惜や』

と齒を喰ひしばり、大地にドッと打ち倒れ、聲を限りに泣き叫んだ。

日出彦は癪から棒の出來事に、月世姫一派の奸計とは知らず、

日出彦『芳香姫は發狂せしか、不憫の者よ』

と云ひつゝも、直に手を執り抱き起し勞はり介抱せむとする折しも、時を待ちて居たる月世姫は、市守姫、畑野彦、田長彦、國平別、竹代彦等の一味と共に其場に現はれ

月世姫『天地の律法を破れる不義もの日出彦を縛れよ』

と下知の聲と共に、田長彦等は何の容赦もなく荒繩おつとり、手足を縛りて八王神の御前に罷出で

田長彦『天地の律法を破り、芳香姫を玩弄せし曲者捕へたり。かゝる邪神を城内に止め置くは、風儀を亂し秩序を破るの恐れうるのみならず、八王神の御名の汚れなり。速に嚴罰に處し、當城を追放し禍根を絶ち玉へ。證據は我等數名の實地目擊せる所なり』

と言辭巧に無實の奏上を成した。日出彦は、神色自若として恐るゝ心なく

日出彦『只々賢明なる八王神の御裁斷を請ひ奉る』

と言つたまゝ、一言も發せなかつた。

八王神は、默然として此の訴へを聞きつゝありしが、何の言葉も無く、ツト立ちて宮殿奥深く入り給ひ、直に神前に端坐して神敎を請ひ給ひ、日出彦、月世姫その他一同を召し出し列を作らしめ、日出彦に向つて、叮嚀に言葉をかけ、我長女神月世姫の不都合極まる行動を謝し、且つ懇ろに之を慰撫し給ひ、月世姫に向つて今後を戒め、其他の神

々にも嚴しく訓戒し給ひ、茲にいよ〳〵神示に由りて日出彦の疑ひは氷解され、正邪の判斷は、日月の如く明かに成つた。

日出彦は無實の疑ひ、全く神の明白なる教示に由りて晴渡りたれば、天地に向つて拜謝し、急ぎ龍宮城さして出發した。

月世姫は謀計のガラリ外れたるに失望し、如何にもして初志を遂せむと、蛸間の瀧に芳香姫を伴ひ、惡龍の神に七日七夜祈願を籠めた。芳香姫は忽然として六面八臂の邪鬼と變じ、中空に騙け登るよと見る間に、東北の天に怪しき雲塊顯はれ、忽ち西北の空に向つて延長し、晝夜を辨ぜざる常暗の空となつた。數多の黑龍は、月世姫命の頭上目がけて降り來り、盛んに毒氣を吹きかけ、火炎の舌を出して月世姫を喰ひ殺さむとす。此時月世姫は聲を揚げて曰ふ

月世姫『汝は芳香姫の變化にあらずや。妾の汝に命ずる所は、妾を苦しめよとには非ず日出彦を惱ませ滅亡せしめむが爲なり。何を間違へて斯かる反對的行動をとるや』

と絶叫した。

その時黑雲の間より聲あつて

『汝は實に惡逆無道なり。芳香姫は今や惡龍となりて汝を滅さんとす。他を咀はゞ穴二つ、自己に出るものは自己に還る。天の賞罰は、寸毫もたがふことなし、思ひ知れや』

と言葉の下より鎗の穂尖は雨の降るが如く、危險身に迫りて寸毫も免るゝの餘地はなかつた。辛うじて我居室に逃げ入りホット一息繼ぐ間も無く、家の四隅より毒龍數多出現して瞬く内に火炎と化し、烟は身邊を包み、猛火炎々として天に冲し、月世姫は黑焦と

なつて亡び、今迄稍さねたる月世姫も、神の懲罰に由りて暗路を辿り幽界の再び刑罰を受くるの破目に陥つたのである。ア、天地に依估なし、善を助け惡を亡ぼし、世界の神人を戒め給ふこと、實に明鏡の物を寫して餘蘊なきが如し。實に愼むべきは惡事にして恐るべきは天地神明の大道である。神は斯かる暗黑無道の世に出現して、神、幽、現の三界の立替立直しの神業を開始し、眞善美の天國を地上に樹立し給はんとす。神の國に生れ、神の國の粟を食む神の子孫たる吾人は、愼みて神業に奉仕し、神恩に報い奉るべき責任の重大なるを感ずる次第である。

（大正一〇・一一・二〇　舊一〇・二一　外山豊二錄）

第二六章　大蛇の長橋（一二六）

モスコーには、黑色の玉を安置し、之を烏羽玉の宮と云ふ。道貫彦命を八王神となし、道貫姫命を妻神として神務を輔佐せしめ、夕日別命を八頭神とし、夕照姫命を妻神として神政を輔翼せしめた。

夕照姫命は常に氣の勝たる神にして、從つて肉體甚だ弱く、常に病魔の襲ふところとなつて居た。其病魔は八頭八尾の大蛇の眷族、大蛇姫と云ふ邪靈であつて、それが憑依して身體を苦しめて居た。これがために夕照姫命は終に重態に陷り、危篤に瀕した夕日別命は枕頭を離れず親しく看護に手を盡した。夫婦の仲は極めて親密であつた。夕照姫命は臨終に際し、夕日別命に

夕照姫『我が死後は必ず後妻を納れたまふなかれ』
と遺言せんとし、言ひ出し兼て煩悶し、連日連夜夫神の顔を凝視て居た。夕照姫命は、我が死後夫神の後妻を娶らるゝを嫉ましきことに思ひ、その一念の執着のため、臨終の息を引き取りかねて居たのである。夕日別命は遂に其心中を察知し、妻神に向つて
夕日別『汝は我に心を殘す事なく神界に到るべし。汝の昇天後、我は斷じて後妻を納れじ、安心せよ』
と約した。妻神は滿面笑を含み眠るが如く絶息した。
かくて夕日別命は多くの年を經た。老年に及び淋しくなつて、後妻を娶らんとするのが起つた。部下の神々は、命の老て寂寥を嘆きたまふを氣の毒に思ひ、後妻を娶りすすめた。命たまふべくは大に喜び、夕照姫命との約束を無視して、八王神、道貫彦命の娘神なる夕凪姫命を娶つた。
夕日別命は夫より元氣頓に回復し、領内の巡視に、數多の從神を從へ出張さるゝ事が屢あつた。夕凪姫命はいつも奥殿に居住された。或時、忽ち天上より黒雲に乘りて降り來る容貌醜惡なる鬼女神薙刀を提げ、夕凪姫命の前に現はれて
『我は夕照姫命である。夫神は、我が臨終の時の堅き約束を破り、汝を納れて後妻としたり。我は夫神に對して恨を晴らさんと日夜つけ狙へども、神力强盛にして如何ともする事能はず。よつて、其片割なる汝と雌雄を決せん、尋常に勝負あれ』
と呼ばはつた。夕凪姫命も元來勝氣の女神なれば、少しも怖れず、直に立つて長押に懸けし薙刀を取るより早く立ち向ふた。かくして互に火花を散らし、秘術を盡して戰

ふた。されど容易に勝負はつかず、鶏鳴と共に夕照姫命は、再び黒雲に乗り中空に影を沒した。夫神の不在中は、毎夜時刻を定めて現はれ來り、互に薙刀をもつて勝負を爭うて居た。一間の中は天井裏、柱、疊、襖の區別なく、薙刀の創痕ばかりとなつた。されども夕凪姫命は深く之を秘して何神にも漏らさなかつた。

夫神は領内の巡視を終へ、歸城して夕凪姫命の奥殿に入り、居室の刀痕を見て大に怪しみ、其理由を尋ねた。夕凪姫命はやむを得ず有りし次第を漏れなく物語つた。夫神は之を聞きて大に驚き、直に烏羽玉宮に到り、祈願を凝らした。宮司高國別は神勅を奏請した。

時に巫子あり、俄に身體震動し、大地にバッタと倒れた。起き上りてはまた倒れ、大聲を放つて泣き叫び、夕日別命の面上を穴のあくばかりに、怨恨に燃ゆる、嫌らしき目をもつて睨みつけ

巫女「汝、夕日別命は、我との約束を破り、夕凪姫命を後妻にいれたり。只今、目に物見せん」

と矢庭に飛びかゝり、命の首に手を掛け、生首を引き扳かんと獨り狂ふ其有樣は、身の毛もよだつばかりであつた。

夕日別命は如何ともするよしなく、只違約の罪を謝し、且つ

夕日別「夕凪姫命を離緣して汝の靈を慰め、冥福を祈るべければ、今回は許せよ」

と云つた。巫女は再び口を切つて

巫女「然らば妾が要求すべき事あり、第一にその要求を容れたまふか」

と念を押した。夕日別命は震慄しながら

夕日別『何事にても我が力の及ぶ範圍の事ならば汝の要求に應ずべし』と言葉も切れ〳〵に息をはづませて答へた。巫女は稍顏色を柔げ

巫女『然らばモスコーの長橋の袂に、今宵丑滿の時を期して、三萬匹の蛙を捕へ、笊籠に納めて汝自ら持ち來れ』

と云つた。夕日別命は一も二もなく之を承諾して館に歸り、卽時に數多の神卒に命じ山野に出て蛙を捕獲せしめた。されど蛙は三百匹より集まらず、夕照姫命の要求の百分の一を得たに過ぎなかつた。止むを得ず數多のないくじを捕へて之を底積となし、蛙をもつて上側を包み、侍神をして丑滿の刻、長橋の袂に持ち運ばしめた。

忽ち天上より黑雲に乘りて來る鬼女があつた。侍神は驚き其場に打ち倒れんとする時鬼女は之を助け起し侍神に向かつて、

鬼女『夕日別命は何故來り給はざりしや』

と訊問した。侍神は答へて

侍神『命は數十万のないくじを室の四周に集め、其中に安座して出で給はず、夕凪姫命と相擁して樂しみ居たまへり』

と答へた。鬼女は忽ち忿怒の色を現はし、見る〳〵黑き大蛇の姿となり、蛙の入れある笊に頭を投げ入れ、一口に喰ひ盡した。忽ちないくじの毒に當られ、大蛇の身體は見る間に溶解消滅して跡には骨のみを殘し、夕照姫命の怨靈は茲に全く滅盡した。

夕凪姫命は、それより先妻同樣の病を發し、歸幽して其靈魂は大蛇と化し、長橋の守護神となつた。此を『大蛇の長橋』と稱ふ。

（大正一〇・一一・二八　舊一〇・二九　加藤明子錄）

二代様今朝の夢に天空より大なる鳥下り來り、羽一枚前に落して又天に歸りたりと見たまひしと聞きければ

隈もなく澄渡りたる御空より　輕く下れる鳥の一羽根　明子

反きたる人も我子の如くして

恵みに活かす神ぞ畏こき。　瑞月

第八篇　神界の變動

第二七章　不意の昇天（一二七）

天地の律法御制定と共に各山各地の守護神は、何れも更迭を命ぜられた。中には高白山や長高山の如く以前のまゝに守護神として止まり、神務を奉仕する神々もあつた。只重要なる地域に限り十二柱の八王神と八頭神等を配置し玉ふた。ローマは神界經綸上最も大切なる地域であるから、神界にても殊に有力なる神々をして守護せしめられた。ローマの都には白色の國魂を祭り之を白玉の宮と名づけ、又白波の宮とも稱へられた。元照別命を八王神に任じ元照姫命は妻神として神務を輔佐し、朝照彦命は八頭神を命ぜられ朝照姫命を妻神として神政を補助せしめ、水口別、大依別を部神とし盛んに經綸を行ひ、神德隆々として旭日昇天の勢であつた。

この時山口別と云ふ邪神がありて、ローマを占領せん事を企てた。そして鬼雲別、蚊取別等の魔神を奉じて羅馬城を顚覆し茲に大根據を構へ、漸次に進んで龍宮城を奪取し終に地の高天原をも占領せんと企て、常世の國の八王大神なる常世彦命を首領として數多の邪神と共に四方八方より全力を盡してローマに攻め寄せた。元照別命は朝照彦命と共に地の高天原に急使を馳せて救援軍を送られむ事を請ひ來つた。

地の高天原に於ては國姫命、大八洲彦命、眞澄姫命協議の結果、大足彦命に道貴彦命を副へてローマの救援に向はしめた。然るにローマは地の高天原及び萬壽山と相並んで、神界の經綸は、その大半は此處に根據を据ゑてかゝらねばならぬことになつてゐる。

大足彦命は八王神に照別命、八頭神朝照彦命、各地に配置されたる十一柱の八王神を此處に集め、十二の八頭神に國魂の守護を一時委任することゝ定めた。十一の八王神は數多の神將神卒を引つれローマに集まり、八王大神の魔軍に向つて、或は攻め或は防ぎ全力を傾注した。一時は非常な勢力を持して流石の八王大神の全力を盡した攻撃軍も敵しかね、旗色俄に淋しくなつて來た。稍小康を得たるローマの聖都は、八王神各心をゆるめ、難を避け安きに移らんとする萠しが出て來た。

こゝに十二の八王神は互に嫉視反目して同志討ちを始めた。この虚に乘じて常世彦の魔軍は、醜女、探女を深く城内に入らしめ、内部より土崩瓦潰せしめんと全力を傾注した。八王神各自の嫉視反目は追々激しく、恰も洪水の堤を崩す如く流石の大足彦命、道貴彦命も、之を鎭定するの手段盡きたのである。

かくして八王神はローマに集まり、爭鬪につぐに爭鬪を以てし、許多の年月を經過し

たのである。七王も八王も協心戮力以て敵を亡ぼさんとした計畫は、却て失敗の大原因となり、その間に大國彦命、常世彦命の兩派の魔軍は、八頭神を使嗾して八王神に對し反旗を揚げしめ、獨立を計ることゝなつた。これが世界の國々の分立割據する端緒となつた。

ローマ城は内部の暗鬪と探女の陰密的活躍に加へて、外部より再び常世彦命の部下の山口別等の總攻撃に會ひ、終に支へ難き狀態に陷つた。大足彦命は天の鳥船に乘り夜陰に乘じて密かに龍宮城へ歸還し、ローマの窮狀を逐一國直姫命に進言した。その時、何處より出で來りけん、常世姫命は大足彦命の前に現れ、ローマ守備の粗漏極まれる施設を口を極めて罵倒し、且つ……速かに大足彦命を排除されたし……と國直姫命に進言した。國直姫命は何故か此の解決を與へず、直に雲を起し、天へ上つて了はれた。

常世姫命は時期到來と密かに喜びつゝ、國直姫命の遺言なりと僞り、魔我彦、魔我姫をして、神務と神政を行はしめ、自ら國直姫命の地位に就かんとした。

大正一〇・一一・二八　舊一〇・二九　櫻井重雄錄）

瑞月

高天原紫微の宮より降りたる
ひとつの魂ぞ世の光なる。
千早振神の任さしに天降りたる
人の靈魂は顯幽に照る。

第二八章　苦心慘憺（一二八）

龍宮城の從神與彦、田依彦、與若、木糸姫、龍國別、三國別、高杉別等の神々は、國直姫命の上天後、その去就に迷ひつゝあつた。

其處へ常世姫命は、種々の手段をめぐらして是等の神々を自己の部下に引入れ、大八洲彦命、大足彦命、神國別命に極力反對の行動を執るに到つた。

一方ローマ城内にては、四分五裂の弱狀を曝露し、外部よりは八王大神常世彦命の強力なる魔軍に包圍され、殆んど落城せんとするの光景である。言靈別命は天の烏船に乘り、急遽ローマに向ひ直に入城した。十二の八王神は、言靈別命の不意の來城に殆んど狼狽の体であつた。こゝに言靈別命は城内の諸神將を集めて統一を圖り、再び勢力を盛返し協力一致の積極的行動をとつた。八王六神の魔軍は、その勢力に辟易して退却し遠方より之を包圍監視しつゝあつた。

却説地の高天原は、常世姫命の横暴極まる行動に、諸神は遠く四方に散亂し、常世姫命の目の上の瘤は殆ど拂はれた。常世姫命は、内は龍宮城を攪亂せしめ、魔我彦魔我姫、美山彦命、國照姫をして大國彦命に通じ、大國彦命をして外部より龍宮城及地の高天原を攻撃せしめた。大國彦命は、松代別、國代別を部將とし、數多の魔軍を熊と化し、不意に之を襲ひ遂に城内隈なく探索して大足彦命を捕へ、凱歌を奏して歸陣した。後に常世姫命は、殆んど龍宮城の主宰者となり、地の高天原をも蹂躙せんと、着々として歩を進めつゝあつた。

この時大八洲彦命、眞澄姫命、言靈姫命、廣國別命、廣宮彦命、照代姫

命の部將は、地の高天原を嚴守して、魔軍に一指をもつけさせなかつた。されど常世姫命は、執拗にも高杉別、與彦、與若、魔我彦、魔我姫などを煽動して地の高天原の一角を崩壞せんとし略その目的を達せんとした。

○

この時ローマに破れ、一時退却したる常世彦命は、到底ローマの容易に陷落せざるを知り鬼雲別、蚊取別等をして、大國彦命の力を借り、之を鏖滅せんと圖つた。大國彦命は、直に承諾し數多の魔軍を二神に與へ、二神は常世彦命と共に三方よりローマ城を包圍攻擊した。

この時萬壽山城を除く十一の八王神は殆んど遁走し、以下の神卒は四方に散亂した。言靈別命は敵の猛烈なる攻擊に毫もひるむ色なく力戰奮鬪を續けた。然るに火彈は空しく、弓は折れ、矢は盡き、終に敵の爲めに捕はれ俘虜となつて、常世の國に送られた。

言靈姫命は、言靈別命の常世城に囚はれしを憂ひ、大神に祈願されつゝあつた。折しも常世姫命は、魔我彦、魔我姫を伴ひ、言靈姫命の祈れる前に、意氣揚々として現はれ來り、稍輕侮の色を面色に現はして言ふ。

常世姫『汝は言靈別命を救はんとする心無きや。汝の決心次第にて、夫神の難を救はん』

言靈姫『如何にせば夫神を救ふ途ありや』

と心あり氣に口を切つた。言靈姫命は喜んで

と反問した。

魔我姫はこゝぞと言はんばかりの顔付きにて、肩をいからせ乍ら

魔我姫『汝は龍宮城を明け渡し、大島彦命以下の神々を率ゐて、萬壽山に轉居すべし然らば妾はその改心を賞として、常世城に坐す八王大神常世彦命に歎願し、言靈別命を救ひ與へん』

と言つた。

こゝに言靈姫命はその去就に迷はざるを得なかつた。魔我彦、魔我姫は、口を揃へて言靈姫命の決心を促すべく、辯に任せて說きつけた。憂ひに沈みたる言靈姫命は終に魔我姫の言に從ひ、龍宮城を開放し萬壽山に遁れんと決心を定め、數多の從神に其の意を傳へんとした。

この時國若姫、廣國別等の神將は、極力之を諫止し、且つ大神に祈り神力を得て、遂に常世姫命一派の鬼神を漸く退場せしめた。常世姫命は、直に常世の國に馳歸り、戰備を整へ再び捲土重來の期を待ちつゝあつた。

（大正一〇・一一・二八　舊一〇・二九　外山豊二錄）

瑞月

月の宮造り上げたる人の子は
　常世の暗の光なりけり。
手と背に貴の聖痕しるしたる
　人の言靈天地動かす。

第二九章　男波女波（一二九）

モスコーの八王神道貫彦命は、ローマに召集されて多年の間不在であつた。妻神道貫姫命は子に甘き神であつた爲め、其長女神春日姫は父神の不在に心を緩め放縱墮落益々激しく、神々の指彈する行動を常に平氣で演じて居た。されど母神は、子の愛に眼眩みて春日姫のあらぬ日々の行動如何を少しも氣付かなかつた。春日姫は眉長く眼涼しく、口許しまりて色白く、膚柔かく恰も櫻花の時を得て咲初めたる容姿であつた。

八王大神の從神に竹倉別と云ふ若き神があつた。竹倉別は水色の烏帽子狩衣を着し、烏羽玉の宮に參拜した。此時春日姫は盛裝を凝らし侍女神の春姫と共に、神前の參拜を終り階段を下らんとする時、自ら我衣の裳を踏み階段より眞逆樣に顚倒せんとした。此時階段を上り來る竹倉別は、春日姫の體を支へ厄難を救ふた。春日姫の感謝は一通りの歡びでなかつた。何か深い印象を胸底に止めた。春日姫は春姫に手を引かれて階段を下り、後振返りつゝ竹倉別の階段を上り行くを流目に見惚れて居た。是れより春日姫は何故か、直に病の床に呻吟する身となつた。

諸神は之を憂ひて大神に祈り、醫藥を與へなど色々と手を盡せども、春日姫の病に對しては何の効果もなかつた。母神道貫姫命は、姫神の日夜に嬲り行く姿をながめて、夜も日も、たまらず煩悶苦惱しつゝ、恰も掌中の玉を失ひし如く、落膽失望の極に達した。

道貫姫命は春姫を密かに招き

道貫姫『汝は常に春日姫の側近く仕ふる神なれば、姫の意中を能く察し居るならん。姫

の此度の重病に就きては、何か思ひ當る事なきや」

と耳に口寄せ密かに問かけた。春姫は春日姫の病因は略察知して居た。されど恐れて口外する事を憚り

春姫　『精しく探りて後日申し上げん』

と漸く其場を立去り、春日姫に向ひ

春姫　『烏羽玉の宮に參拜の折、竹倉別に危難を救はれ夫より發病し給ひしは、神も藥もきかぬ御病氣には非ずや』

と恐る〳〵尋ね見た。春日姫は袖にて顏被ひながら頭を傾け、稍面を横に覺束なき聲にて只一言

春日姫　『然り』

と答へ、其儘夜具を引被り息を喘ませ病体を左右に搖つてもがき、且つ啜り泣さへ聞ゆるのであつた。春姫は春日姫に向ひ

春姫　『主神の爲めならば、假令我身は天律を破るとも、妾は律法の犠牲となりて主神の目的願望を達し參らせん』

と決心の色を示し、暫時の暇を乞ひ此場を立去り、直に竹倉別の家を訪れた。

竹倉別は明けても暮れても、烏の鳴かぬ日はあつても、春姫を思はぬ間は瞬時もなきまでに、懸想して居つたが、今其當の女神に不意の訪問を受けて胸を躍らせ、肩を上げ下げして顏をあからめ、用もなきに前後左右に室内を駈廻り、晴天の霹靂頭上に激しく落下せんとする時の態度其儘であつた。春姫は落付顏に竹倉別の手を取り

春姫　『何事の出來せしか知らざれども、先づ暫く落付かせ給へ』

たと肩を撫で、胸を摩りて其場に端坐せしめた。竹倉別は恰も酔に醉ふたる如く、骨迄ぐなぐにつた樣な心地で、何となく落付かぬ風情である。春姫は耳に口寄せ、あたりを憚りながら

春　姫　『春日姫は汝に心を寄せ、爲めに病床に臥し給ふ。貴神は主神を助くる爲めに春日姫の夫となり給はずや』

と私語いた。竹倉別は狐につまゝれたる如き面持にて、只茫然として春姫の面を穴の開くほど打眺め兩眼よりは熱き涙が迸つた。春姫は竹倉別の心中を知らず、其態度に焦慮がり百方辯を盡して、春日姫の意に從はしめんと頻りに勸めて止まなかつた。竹倉別は恥かしさうに

竹倉別　『貴神のお勸めを承諾するに先立ち、一つの願ひがある』

と云ふて狩衣の袖に面を包み、息をはづませ肩まで動搖させた。春姫は

春　姫　『貴神の願とは如何なる事ぞ。纖弱き女の身に叶ふ事ならば、何事にても身命に代へて應じ奉らん』

と云つた。此時竹倉別を訪ぬて若彦と云ふ麗しき若き神、烏帽子垂衣を着用し乍ら這入つて來た。若彦は、春姫の寢ても覺めても忘れられぬ神であつた。春姫の血は燃え立つた。若彦は此場の光景を見て訝り無言の儘、直立不動の姿勢を取つて居た。

竹倉別は春姫に心奪はれ、若彦の入り來りて我前に立てる事を少しも氣づかず、顏の紐を解いて頻りに春姫に向つて思ひのたけを、ちぎれちぎれに口說きたてた。春姫は、若彦の前にて思ひも寄らぬ竹倉別に口說き立てられ、痛さ痒さの板挾みとなりて、心中悶々の情に堪へなかつた。若彦は竹倉別の家に窃に春姫の來りたるを見て、何んとなく

不快の念を起し、忽ち顔色を變じて物をも言はず立去つてしまつた。此時の春姫の胸は劍を呑むよりも苦しかつた。

春姫は我心にもなき主命に依りての訪問を若彦に認められ、若彦の顔色の只ならぬに煩悶し今は自暴自棄となつた樣である。されど主神の命は重く千言萬語を盡して竹倉別を納得させ、春日姫の夫たる事を承諾させた。

春姫は竹倉別を伴ひ、春日姫の館に導いた。夫より竹倉別は春日姫の親切にほだされて、終には春姫を一時の夢と忘るゝ事になつた。若彦は又春姫に心を深く寄せて居つた所春姫の獨り竹倉別を訪問せるを認めてより大いに竹倉別を恨み、如何にもして春日姫との間を割き、鬱憤を晴さんと日夜計畫して居た。嗚呼竹倉別、春日姫の間はどうなるであらうか。

（大正一〇・一一・二九　舊一一・一　谷村眞友錄）

瑞月

苦しみて數多の人に使はれて
　始めて人を使ふ道知る。

命まで道に捧ぐる心あらば
　如何なる事も叶はざらめや。

第三〇章　抱擁歸一（一三〇）

春日姫と竹倉別は琴瑟相和し、春の日の洋々たる如く樂き日を送つた。道貫姫命も子の可愛さに牽かれて、これを默許してゐた。若彦は鷹住別に隨ひ烏羽玉の宮に再び參拜した。

この時、春日姫は春姫を隨へて參拜を終り、階段を下つて來た。若彦と春姫との視線は稻妻の如く互に閃いた。春日姫は目ざとく之を見て稍嫉妬の念が起つた。若彦は春姫の自分に對する心情を察知し、直に春姫に對して異樣の視線を發射した。春姫は默然として若彦の面を恥かし氣に打ち守つた。この樣子を目前に立ちてながめて居たる春日姫は益々嫉妬の焰を燃やさゞるを得なかつた。

この時、神品骨柄に於て、竹倉別に倍せる鷹住別は、正裝のまゝ笑顏を作つて春日姫の前に大手を擴げて立ちふさがつた。春日姫は前後の分別もなく鷹住別に涼しき眼を向けた。二神は是より相信じ相和し水も洩らさぬ親密なる交際を始めた。

それ以後、春日姫の竹倉別に對する態度はうつて變つて冷やかになつて來た。竹倉別は鷹住別春日姫の極めて親密なる關係を探知し、大に憤り、數多の從神を引きつれ、夜陰に乘じて鷹住別の住居を襲ひ、仇を報いんとした。鷹住別は不意の襲擊に驚いて、大道別命に急使を馳せ救援を請ふた。

大道別命は仲裁の勞をとらんと唯一柱、舘を立ち出で鷹住別の住居に到り、邸外を包圍せる竹倉別に向つて速かに退散すべく嚴命した。この時、鷹住別、若彦は竹倉別の部下の神々に身邊を取りかこまれ、如何ともする道がなかつた。

竹倉別は大道別命の嚴命に少しく躊躇逡巡の體であつた。されど、逸り切つたる部下の神々は水の出ばなの勢止め難く、鬨をあげて……鷹住別、若彦を滅せ……と叫んで止まぬ。

大道別命は天に向つて、天津祝詞を言靈すゞしく奏上した。忽ち破軍星の精靈なる武滿彦命天上より降り來り、竹倉別の頭上へ猛烈なる靈劍を雨の如く投下した。竹倉別は忽ち色蒼ざめ、合掌して武滿彦命に我が行動の不穩なる罪を陳謝した。武滿彦命は直に紫雲に乘じ天へ歸り給ふた。

こゝに大道別命は兩神和睦の宴を開かんとし、大蛇の長椅の邊の廣殿に招待し、且相互に春日姫との手を斷然きることを堅く約し、歡を盡して宴席を各自思ひ〳〵に退場した。

大道別命は鷹住別、若彦と共に紅葉山の麓まで歸る折しも、鬱蒼たる森林の中より何者とも知れず、數十の黑影あらはれ來り、大道別命を始め鷹住別、若彦の手をとり足を縛り、太き綱をこれに結びて大道を引摺行くのである。これは竹倉別以下の神々である。

この時、紅葉山上より數限りなき岩石、竹倉別の群に向つて落下し、數名の從神を傷つけた。ローマにありし若彦の兄、勝彦といふ神、弟神の危急を救はんとして、竹倉別の謀計を前知し、此の山上に待ち構へてゐた。竹倉別は勝彦の勇氣に辟易し部下を捨てゝ八王大神の下に走り、部將となつた。それより鷹住別、春日姫の得意時代となつた若彦は終に春姫の夫となり烏羽玉の宮に忠實に奉仕した。

春日姫と鷹住別の間は蜜の如き關係が結ばれたのである。春姫は面白き歌を作つて之

を祝した。その歌

春　姫　『春の彌生の曉か　四方の山邊は陽炎の
きらめき渡り春風に　ほころぶ梅の香しさ
梢に來鳴く鶯の　谷の戸明けてホーホケキヨー
ホーホケキヨーと經を讀む　坊主愛すりや今朝の春
霞の衣身にまとふ　四方の山々春姫の
青きみけしをまつぶさに　とりよそひたる長閑さよ
長閑な春は君が春　春日の森の常磐木は
千年の色を染めなして　櫻は笑ひ紅葉は
若き面を赤らめつ　差招くなり君が春
春の陽氣の春日姫　松に千歳の鷹住別や
神の許せし妹と背の　中を隔つる竹倉も
今は別れて常世往く　世は烏羽玉の暗く共
光りかゞやく玉椿　八千代の春はいつ迄も
花は散らざれどこ迄も　色はあせざれ常永に
ウラルの嵐強くとも　君には神風福の神
八千代の椿優曇華の　花咲く春や春日姫
ほまれはます〳〵高殿に　登りて見晴らす天の原
ふりさけ見れば三笠山　峰より昇る望の夜の
清き月影缺くるなく　聞き涼しき家庭内

園の白梅くれないの　梅の薫りといつまでも
失せずにあれよどこまでも　五六七の代までかをれかし
一時千金花の春　老いず死らず幾千代も
操をかへぬ庭の松　松の緑の蒼々と
榮ゆる如く永遠に　變りたまふな春日姫
世は烏羽玉の暗くとも　二神のなかは紅葉の
赤きにしを結び昆布　胸の奥山鹿ぞなき
木々の木の葉は木枯に　吹き散る淋しき世ありとも
偕老同穴むつまじく　月日を送れ春日姫
四方の山々紅葉して　佐保姫錦織るとても
霞の衣常永に　紅葉山下に安々と
樂き御世を送らるゝ　その瑞祥に因みたる
陽氣目出度き春姫の　心はいつも若彦の
若き心をとこしへに　續かせ玉へ春日姫
鷹仕別といつまでも』

かくの如く春姫の祝ひし歌も春の夜の短き夢と消に失せて、春日姫は終に破鏡の悲しみを味ふ事となり、發狂して暴狂ふに立至つた。

此の春日姫は果して何ものぞ。

（大正一〇・一一・二九　舊一一・一　櫻井重雄錄）

第三一章　龍神の瀑布（一三一）

長らくローマに足を留めたる八王神道貫彦命は、ローマの沒落と共に、モスコーを氣遣ひ、數多の敵軍を突破して漸く歸城し、道貫姫命と共に、長き物語りに夜を徹した。

然るに道貫彦命はわが不在中春日姫の鷹住別と夫婦となりし事を大に怒り、かゝる一身上の大問題を父にも母にも計らず、決行したる春日姫も、春日姫なれども、第一母神たる道貫姫命の行き屆かざる行爲を不都合となし、道貫姫命は別殿を造りて之に蟄居せしめ、鷹住別と春日姫の間を生木を割く如く、無殘にも夜半の嵐の物凄く、常世國に向つて鷹住別を、神退ひに退はれた。

春日姫は、海洋万里の孤島に唯一柱取り殘されし心地して、連日連夜泣き暮した。其結果遂に心魂に異狀を呈し、狂亂となり、行き遇ふ神毎に形相を變じ眼を見はりて

春日姫「鷹住別、々々々」

と叫び狂ふ。茲に竹友別、畠照彦は、如何にもして春日姫の病を癒さんとし遠近の高山に分け入り瀑布に身を浸し、或は斷食をなして祈願を籠めた。されども病氣は追々重なるばかりであつた。

或時畠照彦、竹友別は偶然くも天道山に分け入つた。此處は「龍神の瀧」と云ふのである。山頂より落下する水勢は、百雷の一度に轟くが如く、水煙は濛々として立ち上り實に凄じき深山幽谷である。

茲に二神は、七日七夜精神を籠めて祈願した。其時馬の蹄の音嘶々と山上より聞ゑ

て、六面八臂の鬼神顯はれ來り、二神に向ひ

鬼神『春日姫の病氣は、此瀑布に一ケ月打たれなば全快せん』

と告げ、其儘姿は煙雲の如くに消え失せた。二神は天にも上る心地して急ぎモスコーに歸り、平玉彦と計り春日姫を窃に誘ひ、天道山の瀑布に連れ行かんとした。大道別命は之を探知し、直に之を嚴禁した。畠照彦、竹友別は顏色を變へ大道別命に向つて

『心得ぬ貴神の仰せなるかな。貴神は八王神に仕へ奉る待從長の顯職に在りながら、毫末も忠良の志なし。我は身命を捨て、八王神夫婦の心痛を助けまつらん忠義の心より出でたるなり。數月の間、食を斷ち、或は深山に分け入り、瀑布に投じあらゆる艱難辛苦を嘗め、其報いによつて神の命受け、春日姫を救ひまつらんとす。然るに嚴禁すとは何事ぞ。如何に長上神の言なればとて、かゝる不忠不義の言に服從する

こと能はず』

と云ひ放ち、窃に春日姫を鶴舞姫と假名して、三柱神は天道山の大瀑布の下に進み入つた。

道貫彦命は、平玉彦以下二神の赤誠を非常に感謝されつゝあつた。茲に大道別命は守高彦を瀑布に遣はし、速に春日姫を伴ひ歸るべく命令を傳へしめた。守高彦は、天道山の瀑布に到り見れば、平玉彦以下の神々は春日姫の鶴舞姫を、傍の石の上に横臥せしめ、代る〳〵瀑布に打たれ、眞裸のまゝ春日姫の身體に向つて指を組み、鎭魂の姿勢を取り汗を瀧水と流して、うゝうんと呻つて居た。守高彦は此體を見て呆れ果て、遂には抱腹絶倒のあまり、自分も氣が變になつて來た。其時鶴舞姫は

鶴舞姫『竹友別、々々々』

と連呼する。竹友別は唯々諾々として、瀧壺より這ひ上り、鶴舞姫の前に畏る〳〵跪坐した。鶴舞姫は嫌らしき笑を泛べて

鶴舞姫『貴神は戀しき鷹住別に非ずや』

と力のかぎり手首を握つた。強力の鶴舞姫に手首を握られたる竹友別は見る〳〵顏色青褪め、其場に打ち倒れて仕舞つた。畠照彦は驚いて瀧壺より這ひ上り瀧水を口に含み、竹友別の面上を目蒐けて息吹き放つた。竹友別　漸く正氣づいた。されど鶴舞姫は、堅く手を握つて放さぬ。竹友別は耳菟の如き眼い目を白黑とむき出し、一言も發し得ず悶わ苦むのであつた。此時守高彦は、矢庭に鶴舞姫の横面目蒐けて拳固を加へた。其はずみに鶴舞姫は、瀧壺へ落ち込んだ。三柱は驚いて鶴舞姫を瀧壺より救ひ上げ、守高彦の手足に搦み付き

『汝不忠不義の惡神よ。主神に對して無禮の段其罪最も重し、目に物見せて呉れん』

と、三柱一度に有り合ふ岩を手に持ち、守高彦の身體を處構はず打ち据ゑた。守高彦は四つ這となり、笑ひながら

守高彦『もうそれでよい』

と云つた。三柱は益々怒り、岩を持つて打てども擲れども、不死身の守高彦は平然たるものであつた。何は兎もあれ、一時も早く此樣子を大道別命に報告し、數多の神々を引き連れ來りて三柱を縛り、春日姫を連れ歸らんと心を定め、守高彦は一目散にモスコーに走り歸り、此次第を大道別命に奏上した。

大道別命は大石別を守高彦に添へ、數多の神々を率ゐて天道山の瀑布に向かひ大道別『鶴舞姫以下諸神將を殘らず打ち殺し歸るべし』

と命令した。大石別、守高彦は案に相違の顏色にて

『畏れ多くも主神の姫神を、從神の分際として、打ち殺し歸れとは其意を得ず。貴神も常世國の邪神に憑依されて斯の如き暴言を吐かるゝならん。決して〳〵貴神の本心より出し言には非ざるべし』

と言ひつゝ、大石別、守高彦は前後より手を組み合せ、うゝうゝと一生懸命に靈力を籠め、鎭魂の姿勢を取つた。大道別命は吹き出し、腹を抱へて其場に打ち倒れ

大道別『大石別腰を揉め、守高彦足を撫でよ。餘りの可笑しさに腹も腰もだるくして置き處なし』

と云つた。二神は烈火の如く憤り

『不忠不義の惡神の張本、天に代りて誅戮せん。思ひ知れよ』

と力自慢の守高彦は、蠑螺の如き拳固を固めて大道別命を打たんとした。其刹那守高彦の腕は銅像の如く手を振り上げしまゝ些しも動かなくなつた。大道別命は二神に向かひ

大道別『我は臣下の分として忠義の道を辨へざるに非ず。春日姫は既に鷹住別と手を携へて常世國に在り。然るに二柱春日姫の在すは合點行かずと、毎夜窃かに烏羽玉の宮に詣で、神勅を請ひ居る折しも大神現はれ給ひ、彼春日姫は銀毛八尾の惡狐の變身なり。其證據は彼の足の裏に狐の形したる斑紋ありとの神示なりしかば、我は常に注意しつゝありしに、或機會に其斑紋を見屆けたり。故に僞りもなき惡狐の變化なれば、汝は速に天道山の瀑布に到り、姫諸共に一度に打ち取るか、左なくば之を生擒りにして歸り來るべし』

と初めて心中を打ち明けた。守高彦は何れが眞の狐やら合點行かず、兎も角も春日姫の足の裏を見屆けての上決せんと、大石別諸共急ぎ龍神の瀑布に進み入つた。

（大正一〇・一一・二九　舊一一・一　加藤明子錄）

天津神依さし給ひし眞心も
省みせずば曲津日となる。

瑞月

第三二章　破軍の劍（一三二）

大石別、守高彦は、大道別命の言葉の實否を試さんと、急ぎ天道山の大瀑布に諸神卒と共に駈つけた。到り見れば春日姫は容姿がらりと變じ、莞爾に微笑し乍ら二神に向ひ遠路の所御迎ひ大儀と、すました顏付である。平玉彦は得意らしく鼻をぴくつかせ右の手の甲にて上下の唇を左から右へ斜にこすり乍ら、

平玉彦『大石別、守高彦』

と言葉鋭く呼びかけた。

二神はその態度に勃然として面をふくらせ、

『銀毛八尾の惡狐に隨ふ平玉彦の盲目神、平玉蜘蛛となつて、我前に正体を露はせ』

と叫んだ。平玉彦は怒つて、大石別に打つてかゝらんとした。されど仁王の如き强力の守高彦の兩手に拳骨を握り居る其の形相の凄じさに稍躊躇の色が見えた。

この時春日姫は言葉優しく、

春日姫「大石別、守高彦、妾は既に病氣全快なしたれば、最早此所に長座するの必要なし。わが本復の祝ひに替へ、平玉彦を許せよ」

と言葉を添へた。大石別は守高彦と目と目に何事か物言せ乍ら、この場を無事に引返すことになつた。春日姫は神々に送られて賑々しく歸城した。

道貫彦命は、春日姫の無事歸城せることを悅び、春日姫の賴みを容れて烏羽玉の宮の宮司に任じた。平玉彦、大石別以下の神々は、之を見て欣喜の餘り落涙し乍ら、大道別命の前に進み出で、

「貴神は、畏れ多くも八王神の御娘春日姫を、銀毛八尾の惡狐と云ひ、且つ御足の裏に狐の斑紋ありと言はれたり。されど斯の如く病氣全快し給ひ、神聖なる烏羽玉の宮の司とならせ給ひ、精神こゝに一變して至善至美なる神とならせ給ひしに非ずや。貴神は八王神に對し速に切腹せらるべし。卑怯未練に躊躇せば、われ天に代つて貴神を誅戮せん」

と息卷き詰め寄つた。

時しも道貫彦命の御召なりとて、春姫は言葉嚴かに大道別命を差招いた。大道別命は春姫と共に奥殿に進み入つた。奥殿には道貫彦命春日姫が正座に控へ、言葉も荒く、

道貫彦「汝は春日姫に對する無禮の罪に依り、天地の律法に照し自殺を申付くる」

と嚴かに言渡した。大道別命は驚くかと思ひの外、大口開けて打笑ひその場に倒れ伏し大道別「あゝ暗い〳〵」

と呟き乍ら、腰の一刀を拔くより早く電光石火春日姫の首は、胴を離れて了つた。

この時道貫彦命は、大聲に大道別命を引捕へよと怒號された。この聲に驚いて平玉彦、大石別、畠照彦、竹友別其他の神々は奥殿目がけて走り入り、前後左右より大道別命を取り押へ、高手小手に縛り上げた。大道別命は心中に天の破軍星を祈り、國治立命の救助を祈つた。忽ち百雷の一時に轟く如き音響と共に、破軍星の精魂たる武滿彦命降り來り、破軍の劍を以て空中を切り捲つた。今迄春日姫と思ひし女神は、銀毛八尾の惡狐と化し、其處に斃死して居た。

全く大道別命の無辜は晴れ、且つ道貫彦命は非常に口を極めて大道別命の天眼力を感賞された。然るに大道別命は春日姫の惡狐の首を斬り捨てたる際その迸る血の一滴を口に呑み、その血は身体一面に擴がり、さしも明察にして勇猛なりし大道別命も精神に異狀を來し、發狂神となつて了つた。

これよりモスコーの城は、常世姫命の騙使せる金毛九尾の惡狐の眷族神のために、蹂躙され、道貫彦命、夕日別命の夫妻は、終に城を捨てゝ萬壽山に難を避くることになつた。

大道別命はそれより世界の各地を漂浪し、或る不可思議の出來事より、病氣全く癒ゐた。されど命は依然として發狂者を裝ひ、且つ聾者となり、馬鹿者となりて敵狀を視察し、最後に神政成就の神業に對して偉勳を立てた神である。神機發揚の神として五六七神政の基礎となり、國祖再出現に際し突然地の高天原に顯現するのである。大道別命

の正体は果して如何なる神であつたで在らうか。

（大正一〇・一一・二九舊一一・一　外山豊二錄）

瑞　月

年若き時より神と呼ばれたる
人の世に立つ五六七の神代かな。
何もかも知りつくしたる人の子の
出づる五六七の御代ぞ戀しき。

第九篇　隱神の活動

第三三章　巴形の斑紋（一三三）

大道別命は、常世の國の邪神の變化たる春日姫を亡ぼし、偉勳を建てたる際、邪神の血液一滴、口中に飛び入り、爲めに全身の血液汚れて聾啞となり痴呆となり、且發狂者となりて、モスコーを立出で、地上の各山各川を漂浪し、長年月を經て、南高山の深き谷間に迷ひ入つた。

この時何處ともなく、巨大なる呻き聲が起つたと思ふ瞬間、幾万とも限りなき猛虎現はれ來り、大道別命に前後左右より嚙みついて來た。聾者となりし大道別命もこの時の呻り聲は、透きとほる如く耳に入つた。大道別命は嚙付來る猛虎の首筋を引摑み谷間の岩角に打ちつけ、之を亡ぼすこと數ふるに遑なき程であつた。猛虎の群は益々怒

り猛り狂ひ、命を目がけて飛びついて來る。命は縱横無盡に戰つた。遂に心身共に大に疲勞を感じ、千仞の谷間へ眞逆樣に轉倒し、頭部に大負傷を爲し、多量に出血して、谷間に失心の儘横たはつた。

數萬の猛虎は夫と同時に搔き消す如く姿を隱し、後には南高山の松風と、谷川の激流の音ばかりであつた。

南高山の山つゞきなる此方の高山の奥に、荒河の宮といふ社殿が建つてゐる。この神は荒河明神と稱へ、年々地方の神々をして犧牲を供せしむるのが、慣例のやうになつて居る。毎年冬の始めに、南高山一帶の神々は犧牲を献げて盛大なる祭典を執行することとなつて居る。萬一、一回にてもこの祭典を怠りし時には、南高山一帶は暴風吹き起り猛雨降り注ぎ、忽ち大洪水を起して、神人樹草その他の生物を苦しめる暴惡無比の神である。

南高山の守神大島別命は、一切の危難を免れしめんが爲めに、毎年犧牲の祭祀を怠らず執行されて居たのである。大島別命の子に入島彦、入島姫といふ二神があつた。入島姫の額に、忽ち巴形の黑き斑點が現はれた。上下貴賤の區別なく、この斑點の現はれたる者は、その年の祭典の犧牲者たるべき運命の定まつたものとせられて居た。

大島別命大島姫命を始め數多の神々は、入島姫の額の斑點を見て、悲歎遣る方なく、部下の神々を集め種々協議の結果、その身代りを立てんと、地方一般に神々を派して、他に巴形の斑紋ある神はなきやと、晝夜間斷なく山野河川を搜索しつゝあつた。

時しも、南高山の谷川を渡る時、平素清けき川水は、血液の色を帶びて居るのを認めた玉純彦、高山彦は、流れの變りたるを訝かり、數多の神々と共に溪流をつたひ、岩の

根、木の根踏みさくみ上り行く。谷川の底にあたつて、何とも知れぬ呻聲が聞ゐた。巖壁をつたひ、辛うじて谷底に下り見れば、仁王の如き容貌骨格の逞しき一柱の神が、岩角に頭を打ち出血して、殆んど虫の息となつて呻いて居る。

玉純彦は、直ちに谷水を掬ひ來つて、口に飲ませ、且伊吹きの狹霧を吹きかけなど種々介抱に手を盡した、その結果幸に蘇生し、目をギロ〳〵とみはり、ものをも云はず茫然として神々の顏を眺めて居る。

高山彦は、この神の額に巴形の斑紋歴然として現はれ居る事を目擊し、欣喜雀躍しながら、玉純彦の耳に口を寄せ、何事をか私語いた。數多の從神の顏にも何となく晴やかなる氣分の漂ひが見ゐた。

大道別命は神々に誘はれ、南高山の城寨に連れゆかれ、その夜は鄭重なる饗應を受け、且再生の恩を謝した。この時既に大道別命の精神狀態は、出血の爲め改まり耳は漸次聞え出し、口はものをいふ事を得、視力は益々正確になつて居つた。

大道別命は、モスコーを出しより、無我夢中に幾千里を跋渉しつゝありしが、今この南高山に於て病氣恢復したれば、今の吾身は、その身の何れの地に在るやも分らなかつた。

大道別命は、玉純彦に向ひ

大道別「こゝの地名は何といふや、吾れは永らく病氣の爲め夢中の旅行を爲し、突然精神狀態の正氣に還りたる際なれば、始めて生れ出たる如く、何事も分明せず」

といつた。玉純彦は

玉純彦「此處は南高山の城寨なり」

と答へた。大道別命はその長途の旅行に、自ら愁いた。

（大正一〇・一二・六　舊一一・八　栗原七藏錄）

瑞月

和妙の綾の聖地に召されたる
人は伊都能賣みたまなりけり。
奴婆玉の闇に御魂を汚したる
ひと清めんと伊都能賣の神。

第三四章　旭日昇天（一三四）

茲に大道別命は、大島別命の奥殿に導かれ、山野海河の珍味の饗應を再び受け、終日終夜麗しき女神の舞曲を見せられ、絲竹管絃の音に精神恍惚として、鼻唄氣分になつて來た。さうして八島姫と云ふ女神の巴形の斑紋は拭ふが如く消え去り、大道別命の斑紋は追々濃厚となつて來た。

茲に大島別命は威儀を正し、大道別命にむかひ

八島姫の此度の大難より、大道別命の溪間に顚倒し殆ど絶息し居たるを助け居たるに、豈圖らんや、汝の面上に巴形の斑紋現はれ、八島姫の額の斑紋は次第に薄らぎ消え失せたる次第を物語り

大島別『汝は我が娘入島姫の身代りとなつて、荒河の宮の犧牲たるべき運命のもとに置かれたるものなり』

と吐息をつきながら涙を流して物語つた。大道別命は少しも驚く色なく、涼風面を吹く如き平氣な態度にて云ふ

大道別『そは實に面白き事を承はるものかな。我はかゝる犧牲的行爲を心底より喜ぶ抑も神たるものに犧牲を奉らざれば、怒りて神人を苦しますべき理由あるべからずこれ全く邪神の所爲ならん。我嘗て龍神の瀧に於て惡魔を見屆けたる事あり、よき研究材料なり。謹んで貴意に應ぜん』

と、事も無げに云ひ放ち平然として酒を呑んで居た。大島別命以下の神々は、大に喜び感謝の意を表し、直にその準備に着手した。

いよ〳〵期日は、今宵に迫つて來た。神々は種々の供へ物と共に、大道別命を柩に入れ納め、山深く分け入りて、黄昏頃漸く荒河の宮に到着し、社前に柩並に供へ物を安置し、一目散に逃げ歸つた。

夜は森々と更け渡る。四邊靜かにして、水さへ音なく、靜かに睡る深更の丑滿時となつた。忽ち社殿は鳴動し始めた。數萬の虎狼が一度に咆哮するが如き、凄じき音響が聞ゐ出した。

大道別命は何の恐るゝ色も無く、柩の中に安坐して、天津祝詞を幾回ともなく繰返し奏上した。忽ち神前の扉はぎいぐ〳〵と響いて、眼は鏡の如く、口は耳迄引き裂け不恰好の曲んだ鼻は、菊目石をくつゝけた如く、牙は劍の如く、白髮背後に垂れ、薄蠟色の角、額の左右に突出した異樣の怪物、金棒を提げて柩の前に現はれ、どんと一

突き地上を突いた。其響きに柩は、二三尺も地上を離れ飛び上つた。流石の大道別命も、些しは案に相違の面持であつた。

大道別命は天津祝詞を一生懸命に、汗みどろになつて聲を限りに奏上した。其言靈の響きによつて、柩は自然に四方に解體した。大道別命はスツクと立ち上つた。怪物は其勢に辟易して二三歩後方に退いた。其隙間を見すまし、怪物の胸部を目蒐けて長刀を突き刺した。怪物はキャツと一聲、大地に堂と倒れ伏し、脆くも息は絶た。大道別命は其儘其處に端坐して、神前の神酒神饌其他の供へ物を仁王の如き手をもつて之を掴みむしや〳〵と片端から殘らず平げて仕舞つた。

暫くあつて天上より微妙の音樂が聞ゑて來た。命は其音樂を酒の肴のやうな氣になつて、神前の冷酒の殘りを、がぶ〳〵と呑み始めた。忽ち容色端麗にして莊嚴無比なる女神が數多の侍神と共に現はれ、命に向つて言葉靜かに、

女神　「我は天の高砂の宮に鎭まる國直姫命である。汝は之より我命を遵奉し、神界經綸の大業を完成する迄、地上の各地を巡り惡神の陰謀を探り逐一之を國治立命に奏上すべし。それ迄は汝は假に道彦と名乘り且つ聾啞となり、痴呆と變じて神業に從事せよ。汝には、高倉、旭二柱の白狐をもつて之を保護せしめん。使命を遂行したる上は、汝は琴平別命と名を賜ひ、龍宮の乙米姫命を娶し、神政成就の殊勳者として四魂の神の中に加へん。夢疑ふなかれ」

と言葉終ると共に、國直姫命以下の神々の姿は消え失せ、東方の山の谷間よりは紫の雲を分けて天津日の神の豐坂昇りに昇りたまふた。傍を見れば象の如き怪物が血に塗れて横たはつて居た。之は六面八臂の邪鬼の眷族なる大狸であつた。

其以後荒河の宮は燒き捨てられ、南高山一帶の地方の禍は、跡を絶つに至つた。玉純彦以下の神々は、大島別命の命に依り數多の神々を引率し、荒河の宮に到り見れば大道別命は平然として、大狸の横に安坐し、天津祝詞を奏上して居た。神々は且つ驚き且つ喜び、命と共に南高山の城内に意氣揚々として歸つて來た。大道別命は神々より親の如く尊敬され、饗待されて若干の月日を此處に過した。

（大正一〇・一二・六　舊一一・八　加藤明子錄）

根底までおちたる人を救はんと
みかへるとなり現れし伊都能賣。

瑞月

第三五章　寶の埋換（一三五）

大道別命は道彦と改名し、南高山の城内に長く留り、大島別命夫妻の非常なる信任を受け、南高山の入島姫を娶せて、我が身の後繼者たらしめんとし、大島別命自ら道彦に向つてその旨を打明し、頻りに勸めて止まなかつた。

又入島姫は生命の恩神なる上、道彦の英傑なるに、心底より心を寄せ、是非道彦の妻たらんことを祈願しつゝあつた。道彦は親子の神々の日々の親切にほだされて、之を素氣なく辭退するに苦しみつゝあつた。

或時大島姫命は、身体俄に震動し始め、兩手を組みしまゝ上下左右に振り廻し、城内隈なく駈け廻り、之を靜止することが出來なくなつて來た。大島別命は大に之を憂

慮し、地の高天原に向つて、國治立命の救助を祈願した。道彦は直に姫命の狂暴を取押へんとして後を追ひ、表の階段の上にて姫命と共に格闘を始めた。

その刹那、道彦は階段より顚落して頭部を負傷し、流血淋漓失神不省の態となつた。

大島姫命は初めて口を切り、

大島姫『われは南高山に年古く住む高倉と云ふ白狐である。道彦は我が頭神を打滅せしにより、その仇を報ゆるために、姫命の體内を借り、之を階下に擲げつけ、傷口より毒血を注ぎ入れたれば、彼は忽ち聾唖となり、痴呆となり、且つ發狂の氣味を有するに至るは火を睹るより明かなり。ア、嬉しや、喜ばしや』

と肩を前後左右に搖り、足踏みして愉快氣に哄笑する。

入島姫は大に悲しみ、道彦を抱き起し、別殿に擔ぎこみて種々介抱に手を盡した。されど道彦の容態些しも變らず、入島姫の言葉に對して何の反應もなく、唯々げら〳〵と涎を垂して笑ふのみであつた。

大島姫命は再び身体を前後左右に震動させ乍ら、大島別命に向ひ

大島姫『われは最早道彦を術中に陷れたれば、これに憑依するの必要なし。われは是より常世城に遁げ歸らん』

と云ふかと見れば、大島姫命はバッタリ殿中に倒れて了つた。諸神は右往左往に周章狼狽して水よ藥よと騒いだ。

その間に大島姫命は正氣に復し、さも恥かしき面色にて大島別命の前に平伏し、城中を騒がせし罪を拜謝した。こゝに道彦は眞正の聾唖にして、且つ痴呆に耀り、全快の望みなきものと一般に信ぜらるゝに立到つた。

道彦は白狐の高倉と旭の二柱に導かれ南高山の山頂に在る數多の珍寶を調査すべく上つて行つた。されど痴呆と思ひ詰めたる神々は、道彦の行動に毫も注意を拂はなかつたのは、道彦に取りて非常な幸福であつた。

夜陰に乘じ白狐の案内にて、山頂に登り見れば常世姫の間者なる高山彦は、山頂の土を開掘し、既に種々の珍寶を奪ひ、常世の國に歸らんとして同類の神と共に、數多の荷物を拵へて居る最中であつた。そこへ突然道彦が現はれた。

されど高山彦は、痴呆にして聾啞なる道彦と思ひ、少しも懸念せず種々の寶を掘出し且つ貴重なる物を、道彦の脊に負はせ、山を下らしめんとした。一味の神々は各寶を背負ひ、山を下り行かんとするこの時、高倉、旭の白狐は俄に千仞の谷間を平地と見せかけた。孰れも平坦の道路と思ひ誤り、殘らず谷間に陷り、岩角に傷つき、或は溪流に流され、殆んど全滅して了つた。

高山彦も大負傷を爲し、遂に滅亡した。道彦は白狐に導かれ、谷間に下つた。不思議にも、その谷間は自分の嘗て顚落したのと同じ箇所であつた。總ての寶は皆この谷底に集まつて了つた。白狐の指示すまゝにその寶を一所に集め、土を掘りて之を深く秘め藏し、その上に千引の岩を以て覆ひ、何喰はぬ顏して歸つて來た。

南高山の城内には、高山彦以下の數多の神々の姿見ざるに不審を起し、四方八方に手配りして、其の行方を探しつゝあつた。其處へ道彦が歸つて來た。道彦の衣類には、血が一面に附着して居た。大島別命は、道彦の衣類の血を見て、稍不審を抱きつゝあつた。其の所へ數多の神々は、高山彦の屍骸を擔ぎ歸つて來た。さうして以下の神々の溪流に落ちて苦しみ、殆んど全滅せることを委細に奏上した。時しも高山彦の從神なる

高彦は、危難を免れ歸り來つて、道彦の爲に、全部滅されんとしたことを、涙と共に奏上した。

大島別命は烈火の如く憤り、長刀を引抜き、眞向より道彦に斬りつけた。道彦はヒラリと体をかはし、手を拍て笑ひ乍ら後退りしつゝ

道彦　「こゝまで御座れ、甘酒呑まそ」

と踊りつゝ、城門を遁げ出した。入島姫は血相變へて道彦の後を追ひつゝ、門外に出づるや忽ち暗に紛れて行方をくらまして了つた。

（大正一〇・一二・六　舊一一・八　外山豊二錄）

第三六章　啞者の叫び（一三六）

道彦は南高山の城塞を脱出し、白狐の高倉に守られて何處ともなく、足にまかして漂泊の旅を續けた。高倉は道彦の先に立つて、何時も道彦を導いた。

入嶋姫は道彦の後を慕ふて、見へつ隱れつ從いて來た。されど道彦は入嶋姫の後より呼び止める聲を、聾者の眞似をして少しも聞かぬふりに、ドン〳〵と進んで行つた。無論僞啞者となりし身は、一言も發せなかつた。入嶋姫はかよわき足にて、嶮しき山坂を幾つとなく、晝夜を分たず跋渉せし疲勞によつて、殆んど息も絶へ〴〵になつた。漸くにして長高山の麓を流るゝ深き谷川の邊に着いた。道彦は白狐の跡を渡り、淺瀬を選んで谷川の向ふにやつと到着し、後を振りかへつて息を休めてゐた。

この時、八嶋姫は命からゞ〳〵對岸まで追ひかけ來たり、この谷川の絶壁に立ち、如何にして渡らんやと途方に暮れた。八嶋姫は聲を限りに道彦を呼び止めた。道彦は表面素知らぬ顔はしてゐるもの丶、心の中には八嶋姫の心情を察知し、萬斛の涙に咽んだ。

されど、神命もだし難く聾啞を裝ひし身は、一言の慰安も與へることは出來なかつた。對岸の八嶋姫は、天を拜し地に伏し、慟哭稍久しうし、茲に決心の色を浮べて忽ち懷中より短刀を取り出し、天に向つて合掌し我と我が咽喉を突かんとする一刹那、道彦は思はず

道彦「暫く待たれよ」

と聲をかけた。姫は聲を絞つて、

八嶋姫「妾が一旦夫と定めたる神は、天地の間に貴神を措いて他になし。生て戀路の闇に苦しみ迷はんよりは、いつそ貴神の御目の前にて自殺を遂ぐるは、せめてもの心の慰めなり。必ず止め給ふな」

と既に咽喉を突かんとするや、白狐は忽ち姿を現はし、八嶋姫の持てる短刀を力限りに打ち落した。姫はその場にドッと倒れて失心の態であつた。道彦は此慘狀を見るに忍びず、再び谷川を渡り來つて、谷水を口にふくませ種々介抱の結果、姫は漸く蘇生するに至つた。

姫は漸々顔を上げ、涙を拭ひながら道彦の手を固く握り締め、顔を赤らめ胸肩共に波をうたせ、只さめ〳〵と泣くばかりであつた。道彦は親切に之をいたはり、且つ我が身の大神より一大使命を拜し僞つて聾啞となり痴呆となり、發狂者を裝ひゐる其の苦痛を

逐一述べ立てた。入嶋姫は初て悟り、我が身の不覺と無智を悔い、今までの怪しき心を改め、何とぞ貴神と共に神業に參加せしめよと、赤誠をこめて嘆願した。

道彦は直に天に向つて天津祝詞を奏上した。忽ち天上より二柱の天使降り來つて、一柱は道彦に向ひ、一柱は入嶋姫に向ひ、各自に特種の使命を傳へ、固く口外することを禁じた。この天使は天の高砂の宮に坐す國直姫命の使神であつた。故に道彦は入嶋姫の使命を知らず、入嶋姫は又道彦の使命の如何なるかを知らなかつた。そして道彦には白狐高倉をして之を守護せしめ、入嶋姫には白狐旭をして之を守護せしめられた。

それより入嶋姫は、自己の美貌を楯に惡魔の巣窟に入りて凡ての計略を探知し、道彦は力强の馬鹿となりすまして、惡神等の巣窟を探り、種々の陰謀を覺知して、之を國直姫命に後日奏上することに努めた。

道彦、入嶋姫は、個々別々に身を窶して長高山の城下に進み入つた。長高山は忠孝兩全の譽高かりし清照彦、末世姫の二神が主神として守つてゐた。

然るに、美しき花は風に散り易く、良果は虫に侵され易きが如く、長高山は一時天國淨土の現出せし如く天下泰平に治まり、風雨和順して神人鼓腹の樂みに馴れ、數多の神々は少しも治世の苦しみを知らなかつた。常世姫命の間者土熊別、鬼丸は善の假面を被り長高山に現はれ、城内の神々を絲竹管絃の樂みを以て籠絡し、日夜茗醼に耽らしめた。長高山は天下泰平の波に漂ひ、神々は下の苦しみを知らず、互に自己の逸樂榮達のみに耽り、難を避け安きに就き、天職責任を解せず、顧を以て下神々を使役し、日を追ふて驕慢心を增ばかりであつた。上は日夜絲竹管絃の響きに心魂をとろかし、酒池肉林

の驕奢に魂を腐らし、實を湯水の如く濫費し、下級神人の慘苦を少しも思はなかつたこれは常世姫の間者土熊別、鬼丸等の術中に陷り、長高山を內部より崩潰せしめんとの奸策に乘つて了つた。神々は常に美女を座に侍らせ、長夜の遊樂に耽つてゐた。或時、土熊別は酒の醉をさますべく、城外に出て散歩した。忽ち前方に容色並ぶものなき美神が現はれた。この美神は前述の入嶋姫であつた。

入嶋姫は、醉眼朦朧として唄を歌ひつゝ進み來る土熊別の前に到り、俄に地上に俯伏して泣き苦しみ始めた。土熊別は之を見て直に抱き起し、

土熊別『貴神は何れの神にましますや。又何用ありて此城下へ來たられしや』

と舌もまはらぬ言靈にて問ひかけた。姫は只うつむいて泣くばかりである。土熊別は、もどかしがり頻りに神命を尋ねた。姫は直に顏を上げ、涙を拭ひながら

入嶋姫『我は天より降りたる旭姫といふ者なり。長高山には常に絲竹管絃の音絕ゑず、日夜面白き舞曲を演ぜらるゝと聞き、雲路を分けて密かにその舞曲を見んと降り來たる折しも、烈風のために羽衣を破られて飛行自由ならず、突然地上に墜落して大腿骨を打ち痛苦に堪へず苦しみ居れるなり』

と眞しやかに物語つた。

土熊別は稍右の肩をそば立て、首を左右に傾けながら、旭姫の顏を熟視し暫くは無言のまゝ突つ立つてゐた。この時、旭姫はニタ〳〵と笑ひ始めた。そして

旭姫『あゝ有りがたし、妾の苦痛は全く癒えたり』

と言つて、すつくと立上がり數十步圓を描いて輕々しく步行して見せた。土熊別は手を拍つて喜び、直に姫の手を携へ城內の酒宴の場に導き入れた。數多の美神は宴席にあれ

ども、旭姫の容色端麗にして其の風采の優雅なるに及ぶ者はなかつた。殆んど姫は萬綠叢中紅一點の觀があつた。神々は手を拍つて喜んだ。

茲に旭姫は神々の請ひを容れ、天女の舞ひを演ずることゝなつた。拍手喝采の聲は城の内外に轟き渡つた。

（大正一〇・一二・六　舊一一・八　櫻井重雄錄）

瑞月

腹借りて賤ヶ伏家に產聲を
あげたるひとの神の子珍らし。

第三七章　天女の舞曲（一三七）

八咫の大廣間の大酒宴の中に立ちて、旭姫は長袖いとしとやかに舞ひ始め、口づから歌ひ始めた。その歌

旭姫『朝日は豐榮昇りして　神の光もいと清く
清照彥のうしはげる　世は永遠に長高の
山の草木もかんばしく　花は咲けども百鳥の
聲も長閑に謳へども　月に叢雲花に風
常世の國より吹き送る　冷たき嵐にさそはれて
山のふもとや谷の底　木草は倒れ花は散り

神人一度に泣き叫ぶ　　その聲今に長高の
山の尾の上を轟かし　　常世の暗の世とならん
心きよてる彦の神　　その身の側に氣を附けて
角の生えたる牛熊や　　鬼丸さん等がたはむれを
眞寸美の鏡に照し見よ　　あらしはやがて吹き荒み
炎は今に燃ゑ上がる　　清照彦よ氣を附けよ
常世の暗となるなれば　　長高山も末世姫
末世澆季の世を照す　　國直姫の御使ひ
旭の明神之にあり　　太刀拔き拂ふは今の內
角折りこらすは此の砌　　大道別や八嶋姫

後にひかへ奉る　　いそげよいそげいざ急げ
一時の猶豫は千歲の　　悔を殘さむさゝ早く」

清照彦は旭姫の諷歌を聞くや侍神に命じてその場に牛熊別を縛せしめんとした。流石の牛熊別も大酒を過せし爲身体自由ならず、易々と部下の神々の爲に前後左右より取り圍まれ縛に就いた。この時山下に聞ゆる鬨の聲。清照彦は突つ立ち上り清照彦『反逆神の襲來ならん。神々は武裝を整へ防戰に向へ』と下知した。

されど酒に醉ひ潰れて正体なく、只々寢耳に水の驚怖心に驅られ、右往左往に城內を奔り廻るのみ。一柱として戰場に向ふ勇神は無かつた。

時しも鬼丸は、陣頭に立ち數多の神軍を引率し、城內に侵入し來り

鬼丸『鬼丸是にあり、清照彦命に見參せん。我こそは常世國の重神にして、鬼丸とは世を忍ぶ假の名、實の名は八王神の密偵、鷹虎別なるぞ。長高山を占領せんと身をやつし牛熊別としめし合せ、本城を根底より覆へさんとの我計略、天運茲に循環して、日頃の大望成就の曉は來れり。最早叶はぬ清照彦は、本城を開け渡し、常世の國に從ふか、但は此場で切腹あるか。返答如何に』

と阿修羅王の荒れたる如く、奥殿目掛て攻め來る。

清照彦、末世姫は、强弓に矢を番へ、立ち出で、鷹虎別に對ひ、一矢を發たんとする時しも、如何はしけん、弓弦はブツリと斷ち切れて双方とも用を爲さず、進退谷まり二神は最早切腹の餘儀なき折しも旭姫は牛熊別を縛の儘、その前に曳出し來り、短刀を牛熊別の胸に擬し、鬼丸に對ひ

旭姫『汝我主神に對つて危害を加へんとせば、妾は今汝の主神を刺殺さむ』

と睨め付けた。鬼丸の鷹虎別は仁王立ちと成りしま、齒がみを爲し、手を下すに由なく溜息吐く折しも、表の方より俄に聞ゆる數多の足音。鬼丸は不圖後を振返る一刹那、旭姫は短刀の鞘を拂ふが早く、鬼丸の胸につき立てた。鬼丸はアッと一聲、その場に倒れて絶絶れて了つた。

山麓に押し寄せたる鬼丸の部下を散々に打ち惱ませ、敵を四方に散亂せしめ勝に乘じて山上に登り、城内の危急を救はむとして入り來れる大道別命の雄姿は、今この場に現はれ、鐘の如き大聲を放ちて、神助の次第を報知した。

旭姫の八嶋姫は大に悅び、奥に進み入りて清照彦、末世姫に戰捷の次第を物語り、且つ大道別命の功績を逐一物語つた。清照彦命は直に大道別命を引見し、その勳功

を感謝し、直に我地位を捨て、大道別命、八嶋姫に讓り、且つ清照彦『吾等夫妻は、貴神の從神として永く奉仕せん』と赤心を面に表はして頻りに慫慂した。

案に相違の大道別命は、大に迷惑を感じ、直に僞の聾啞を裝ひ、痴呆を眞似て清照彦の言を馬耳東風と葬り去つた。旭姫は口を極めて道彦の力量のみ徒に強くして、治世の能力なき痴呆者たる事を宣明した。清照彦は止むを得ず之を斷念した。

是より清照彦命は、領内の正しき神々を下級より選拔し、重任に就かしめた。其後は一回の紛擾も起らず、長高山は其名の如く、世は長く榮へ神德は高く四方に輝き渡り常世の邪神は終にその影を沒した。

大道別命は長高山を煙の如く消え失せ、八嶋姫も亦何時の間にか、姿を隱したのである。雲の如く現はれ霞の如く消え去りし二神の神變不可測の行動、高倉、旭、二白狐の變現出沒の神妙奇蹟は、今後の物語りに依つて判明すること、思ふ。

（大正一〇・一二・七　舊一一・九　近藤貞二錄）

瑞月

王仁といふ韓の物識皇國に
そぐはぬ敎傳へけるかな。

同じ名の出口の王仁は日の本の
本つ敎を開き初めけり。

第三八章　四十八瀧（一三八）

長高山の城塞より煙の如く消え失せたる道彦は、高倉の跡を追ふて、遠く東北に進み氷の張詰めたる海峡を渡りて、アラスカの高白山の谷間に進んだ。少しく谷川の上流に當つて喧騒の聲が聞えた。道彦はその聲をしるべに谷川をぐん〳〵上つて行つた。見れば谷の兩側は、恰も鏡を立てたる如く、斷巖絶壁の一方に、數多の神々寄り集まつて右往左往に聲を放つて騒いで居た。

見れば、高白山の主神荒熊彦は、谷間に顚落して大負傷を爲し、谷水を鮮血に染め苦しみつゝあつた。

神々は之を救はんとすれども、名に負ふ斷巖絶壁、如何ともする事が出來なかつた。

此時白狐の高倉は、金色の槌と變化し、絶壁を打碎き、足の掛るべき穴を穿ちつゝ、谷底に下つた。道彦は傍なる山林に生茂れる藤葛を長く結び、谷川の邊の老木の根にその一端を結び附け、自らその蔓を谷底に垂れ、高倉の穿ち置きたる巖壁の穴に足を掛け漸く谷底に下り着き、荒熊彦の傍に寄り添ひ、水を口に銜みて面上に吹きかけ、且つ天津祝詞を奏上し、鎭魂の神術を施し、漸くの事で正氣づき、出血も直に止りたれば、右の脇に引抱へ、藤葛を左の手に持ち、巖壁の穴に足を掛けて上つて來た。神々の喜びの聲、感歎の聲は天地も崩るゝ許りであつた。荒熊彦は道彦を命の親として尊敬し城内に伴ひ歸り、山海の珍味を出して饗應し、救命の恩を感謝した。

扨て荒熊彦は衆神と共に、この谷間の絶景を眺めて酒宴を催し、興に乘じて躍り狂ひ眼眩んで、この千仞の谷間に顚落したのであつた。この谷川は、四十八瀧と稱し、到る

所に奇岩、怪石散在して、大小四十八個の莊嚴なる瀑布が出現し、風光絶佳の遊覽所となつて居た。

道彦は荒熊彦の信任を得、聾啞痴呆の强力神として侍神の中に加へられ、遂には炊事の用務を命ぜられ、まめ〳〵しく奉仕して居た。

高白山の城内の宰相神に、八十熊別といふ德望高き神があつた。此神は常世姫命の間諜にして、古くより高白山に謀計を以て忍び入り、時を見て高白山を顚覆せんと企てて居たのであつた。

茲にローマの戰に敗れ、常世の國に送られたる言霊別命は、中途にて、言代別の爲に救はれ、身を變じて高白山にのがれ、賓客として、莊嚴なる別殿に迎へられ、時機を待ちつゝあつた。八十熊別は、言霊別命の素性を探知せんと、探女を使役して常にその行動を注視しつゝあつた。探女の名を月の姫といふ。月の姫は常に八十熊別の命により、言霊別命の侍女として、表面まめ〳〵しく仕へて居た。

或夜、荒熊彦、言霊別命の密談を立聽して居り、窃にその詳細を八十熊別に報告した。八十熊別は月の姫に耳語して何事か命令を下した。

時に八十熊別は、茶の湯の饗應に言寄せて荒熊彦夫妻を招待し、且つ賓客なる玉照彦を招待した。玉照彦は言霊別命の假名である。道彦は荒熊彦の侍神として宴席に現はれた。彼は直に炊事場に到り、水をくみ茶を沸かすなど、まめ〳〵しく立働いた。

八十熊別の侍神は、道彦の聾啞と痴呆とに心を放し、歡んで炊事一切を打ち任せてゐた。月の姫は客神に茶をたて、之を進めんとする時、懷中より窃に毒藥を取り出し、茶の湯に投じた。道彦は素知らぬ顔に之を眺めて居た。月の姫は恭しく茶の湯を兩手に

捧げ、玉照彦、荒熊彦等の前に据ゑ、一禮して座を立つた。

道彦は直に月の姫を強力に任して引攫み、茶席の前に現はれ出で、仰向に押し倒し、その茶を取るより早く、月の姫の口に無理遣りに飲ませた。

月の姫は忽ち手足を藻掻き、黒血を吐き絶絶となつた。

八十熊別は謀計の暴露せんことを恐れ、合圖の磬盤を打つや否や、何處ともなく數多の邪神現はれ、玉照彦、荒熊彦等を目がけて前後左右より、長刀を振き放つて切り込んだ。此時道彦は、高倉の妙術により、數百の道彦となつて現はれた。

八十熊別の味方の邪神は、縱横無盡に、道彦を目がけて切り込めども、何れも皆空を斬り、影を追ひ、勢餘つて階上より地上に顚落し、散々に敗北した。

八十熊別は此の態を見て、裏門より遁れ出んとした。裏門を開くや否や、幾千丈とも限りなき深き廣き池沼俄に現出して、遁るゝことは出來なかつた。之は高倉白狐の謀計であつた。

八十熊別は止むを得ず、あとへ引返す途端に、眞正の道彦の爲めに、八つ割にされ、こゝに高白山の妖雲は全く晴れ渡り、眞如の明月は、高く中天に輝き始めた。

言靈別命は、高白山の主將となり、暫く地の高天原の神々にも行衛を秘密にして居た。

荒熊彦、荒熊姫、は言靈別命に一切を讓り、自ら從神となり忠實に奉仕した。道彦の姿はまたもや煙と消ねてしまつた。

（大五一〇・一二・七　舊一一・九　栗原七藏錄）

第三九章　乘合舟（一三九）

道彥は高白山を出でしより、諸方を遍歷し艱難辛苦を重ねて、漸く常世國スベリオル湖の北岸に出た。そして船を傭ひ、ロッキー山に向はんとした。船中には澤山の神々が乘つて居た。八嶋姫もいつの間にか、此船の客となつて居た。道彥は態と空惚けて、素知らぬ顏をしてゐた。八嶋姫は道彥の變り果たる姿を見て、少しも氣付かなかつた。

此時船の舳先よりすつくと立ちて、八嶋姫の傍に近づき來る神があつた。之は南高山の從神玉純彥である。南高山は八嶋姫の出城以來、四方八方に神々を派遣して姫命の行方を探して居た、玉純彥は八嶋姫に向ひ、飛つくばかりの聲を發し、

玉純彥『貴神は八嶋姫にましまさずや』

と云つた。八嶋姫も風采容貌共に激變して、殆んど眞僞を判別するに苦む位であつた。

八嶋姫は首を左右に振り、

八嶋姫『我は旭姫といふ常世城の從神にして、南高山のものに非ず、見違へ給ふな』

と、つんとして背を向けた。玉純彥は、どことなく八嶋姫の容貌に似たるを訝かり、姫の前方に廻りて首を左右に傾け、穴のあく許り千鳥の如き鋭き目を見張り

玉純彥『如何にかくしたまふとも、貴神の額には巴形の斑點今尙微に殘れり。我は主命に依り貴神を尋ねんとして、櫛風沐雨、東奔西走所在艱難を嘗め盡し、今茲に拜顏し得たるは、天の授くる時運の到來せしならん。袖振り合ふも他生の緣と云ふ。況んや天地の間に二柱と無き主神の御子に於てをや。今この寒き湖の中に一蓮托生の船客と

なるも、必ず國治立命の御引き合せならん、是非々々、名乘らせたまへ」

と、涙を流して男泣きに泣く。

入嶋姫は名乘り度きは山々なれども、天使國直姫命の神命を遂行し、地の高天原に復命を終るまで、なまじひに名乘りをあげ、神業の妨害とならん事を恐れ、斷乎として其實を告げなかつた。入嶋姫の胸中は實に熱鐵を呑む心地であつた。玉純彦は尙も言葉をついで

玉純彦「貴神は如何に隱させたまふとも、我は正しく入嶋姫と拜察し奉る。貴神の出城されしより、御父神は煩悶の餘り、重き病の床に就かさせたまひ、母神また逆神豐彦のために弑せられ、父神大嶋別命は老ひ行くと共に世を果敢なみ、是非一度入嶋姫に面會せざれば死する事能はずと、日夜悲嘆の涙に暮たまふのみならず、御兄入嶋彦は、漂然として出城されしまゝ、行方不明とならせたまふ。海山の大恩ある父神の難儀を振り捨て、我意中の道彦の後を追はせたまふは、實に破倫の行爲にして天則に違反するものに非ずや」

と言葉を盡して述べ立てた。

姫の胸中は暗黑無明の雲に鎖された。ほどなく船は南の岸に近づいた。此對話を聞いて居た道彦は、初めて樣子を知り、いよ〳〵入嶋姫なる事を悟り、つく〴〵其面を見れば、かすかに巴形の斑點を認むる事を得た。

船は漸く岸に着き、神々は先を爭ふて上陸した。道彦は入嶋姫に悟られじと直に其姿を物蔭に隱した。玉純彦はどうしても姫の手を取つて離さなかつた。

入嶋姫は進退谷まつて、國治立命の神靈に向かつて、此場を無事に逃れん事を祈願

した。忽ち白色の玉天より下り、二神の前に落下し白煙濛々として立昇り、四邊を包んで仕舞つた。玉純彦は驚いて、姫の手を離した。姫は白煙の中を一目散に南方指して逃げ去つた。

やゝありて、白煙は四方に散り、後には入嶋姫地に伏して泣き倒れて居た。之は白狐旭の變化である。玉純彦は再び傍に寄り、千言萬語を盡して歸城を勸めた。姫は漸く納得して、玉純彦と共に歸城の途についた。

數多の山河を跋渉し、漸く南高山の城内に立歸り、入嶋姫は久しぶりにて父神に面會し、無斷出城の罪を謝した。父神は大に喜び、且玉純彦の功績を賞揚し、城内俄に春陽の氣滿ち神々は祝宴を開いて萬歳を唱へ、大島別命は茲に元氣回復して、後日神政成就の神業に參加する事になつた。

道彦は入嶋姫の目を免がれ、常世城に入り、從僕の神となり遂に抜擢せられて、八王大神の給仕役となり、總ての計畫を探知した。又白狐の變化ならざる入嶋姫も同じく常世城に入り、常世姫の侍女神となり、一切の邪神の計畫を探り、地の高天原に復命し、偉勳を樹つる次第は後日に述べる考へである。

（大正一〇・一二・七　舊一一・九　加藤明子錄）

瑞月

足曳の山路を夜半に辿る身は
月の神こそ力なりけり。

醜神の活動

石の上古事記は神つ代の
神のいさをのしるべなりけり。
素盞嗚の神の命の作らしゝ
三十一文字は言靈の本。
敷島の歌の調べは知らねども
世人の爲に作りそめけり。

第一〇篇　神政の破壞

第四〇章　國の廣宮（一四〇）

國直姫命の上天されしより、地の高天原も、龍宮城も綱紀紊亂して、諸神は日夜に暗鬪を續け、殆んど收拾すべからざるに立至つた。こゝに大八洲彦命、神國別命は國直姫命の神靈を奉安し、神助を得て地の高天原を統治せんことを企てた。

この時龍山別、廣若、船木姫等の一派は神殿造營に極力反抗した。龍山別は大八洲彦命に向ひ、

龍山別「國直姫命は、既に上天し給ひたれば、肉神の神に非ず。神は總て靈にして、形体無し。徒に土木を起し、神殿を造營するは、却て天地の神慮に反くものなり、神は金石木草を以て造りたる社殿には住み給はざるべし。靈を拜するには靈を以てせ

ざるべからず。神殿を造りて、これに拜跪する如きは、所謂偶像を拜する惡逆無道の行爲にして神慮を傷つくるものなり」

と强辯した。廣若、船木姫等も手を拍て、その說に贊成の意を表した。

大八洲彥命は憤然として、立上り

大八洲彥「貴神の言一應は道理の如く聞ゆれども、神は靈なりとして之を放任し、徒に天を拜するは、顯幽一致の神術に相反するの甚だしきものなり。神は絕對無限の神靈にして且つ無形無聲に坐しますは眞理なれども、そは宇宙の大元靈たる天之御中主大神の御事にして、一旦肉身を以て地上に顯現されし國直姫命の如きは幽神に非ず今日は顯の幽神として上天し給へば、必ず莊嚴なる宮殿を造り、神靈を祭祀し神助を仰がざるべからず」

と宣言した。

神國別命は、一も二も無く天使長大八洲彥命の說に贊成し、愈天の原と云ふ聖淨の地を選み、宮殿を造營する事となつた。之を國の廣宮と稱へられた。

國の廣宮には、宮司として武直彥、玉國彥が奉仕すること、なつた。大八洲彥命は數多の神々と共に、神靈鎭祭の祭典を執行された。その場に美山彥、國照姫、龍山別廣若、船木姫、田糸姫等の神々も、不承不承に參列して居た。

神靈鎭祭の儀式終るや、忽ち神殿鳴動して扉は自然に開かれ、殿內よりは强烈なる光線矢を射る如く、美山彥、國照姫、廣若、船木姫、田糸姫等の面上を射照した。神威に怖れて美山彥以下の神々は、其の場に顚倒し、再び起上り手を振り、身體を動搖させ、怪しき聲を立てゝ庭前を狂氣の如く飛び廻る。

さうして美山彦以下の身体よりは、銀毛八尾の白狐、古狸等數限りも無く現はれ、忽ち妖雲を捲起し、雲に隱れて何處ともなく散亂したのである。國の廣宮は、天神地祇の神々の審神を爲す聖場と定まつた。後には美山彦、國照姫、龍山別呆然として氣抜せし如く、神々の前を耻し氣に悄々として龍宮城に立到り、第二の計畫を廻らした。

（大正一〇・一二・七　一一・九　外山豊二錄）

瑞月

知らずして知り顔なすは曲靈の
神に魅れし人にぞありける。

我こそは神の靈の宮居ぞと
世人思く曲津靈の神。

第四一章　二神の歸城（一四一）

美山彦、國照姫は、天の原なる國の廣宮の建設されしより、邪鬼、惡狐の憑靈現はれ八百萬の神々の手前面目を失し、龍山別、廣若、船木姫、田糸姫、猿若姫等と窃に廣若の館に集まり、地の高天原を始め龍宮城を占領せん事を企てたるが、到底其の力の及ばざるを悟りて、大國彦命、常世彦命の助力を求め、第一に國の廣宮を破壞し、嚴肅なる神の審判を廢止せしめ、其上當初の目的たる地の高天原を占領せむとし、四方の魔軍を募り、且つ大自在天大國彦命の部下、醜原彦、大鷹彦、中依別、藤高、鷹取、遠山その他の暴惡非道の神々の率ゆる數萬の魔軍を、天の原に向つて攻め寄せしめた。

宮司の武直彦、玉國彦を始め、龍宮城の從神佐倉彦命、白峰別命は、天使長大入

洲彥命の命によりて極力防戰した。されど暴惡なる魔軍は、何の容赦もなく、多數の權威を賴みて忽ち之を破壞し、凱歌をあげて悠々と引揚げたのである。然るに美山彥、國照姫の一派は、此の殘虐を自己の關知せざる態に裝ひ、猶も依然として龍宮城内に留まり眞澄姫命、言靈姫命、杉生彥を甘言を以て說き付け、地の高天原の主宰神なる大八洲彥命を初め、神國別命その他の重職にある神々を排除し、龍山別をして天使長の職に代らしめむとした。

されど强直無比の曙姫、梅ケ香姫、玉若彥、豐日別の若き神々の爲に遮られて、折角の計畫も九分九厘の處にて一頓挫を來した。飽くまで執拗なる美山彥、國照姫、船木姫、杵築姫等は、辯舌巧みに眞澄姫命、言靈姫命を利害得失を以て說き付け

『萬々一我等の進言を用ゐ玉はざるに於ては、大自在天大國彥命の軍勢は、直に龍宮城へ押寄せ來たりて、國の廣宮の如く一擧に地の高天原諸共破壞さるゝのみならず大八洲彥命以下の神々は一神も殘らず滅されん。我等の言を採用し常世姫を迎へ奉り、且つ龍山別をして天使長の職に就かしめなば、地の高天原も龍宮城も安全無事なるのみならず、言靈別命、大足彥命は常世國より解放の歡びに逢ふは必然なり。眞澄姫命、言靈姫命にして、夫神の危難を救ひ本城を永遠に保ち、神德を四方に發揮せんと欲し玉はゞ速かに我等の忠言を容れられよ。夢にも我等の言を否み玉ふに於ては後日の爲め面白からぬ結果を招き、終には貴神等の御身の上にも大事の發生せむ事火を睹るよりも明白なり』

と脅喝した。

眞澄姫命、言靈姫命は、その贊否に迷はざるを得なかつた。曙姫、梅ケ香姫、

佐倉姫等の女神は、至つて强剛の態度を執り、眞澄姫命、言靈姫命に向つて

「斷じて美山彦一派の言に耳を傾け玉ふべからず」

と進言した。二神は稍思案に暮れつゝあつた。そこへまたもや國照姫、杵築姫、船木姫、廣若等の神々現はれ來たり、二神に向かつて

「如何にしても我等の忠言を容れて諸神を放逐し龍山別以下の神々を採用せざる時は災禍忽ち到りて本城は大國彦命の部下に亡ぼされ、言靈別命、大足彦命は常世國の刑に處せられ、末代歸還さるべき機會なし。一時も早く我等の言を容れて大改革を斷行されよ」

と前後左右より攻め寄する折しも、龍宮城の門外俄に騷がしく、諸神の歡呼の聲、鬨の聲、百雷の一時に轟く如くであつた。是は言靈別命が神助の下に常世國に送らるゝ中途に於て、從神言代別に救はれ一旦高白山の城主となり各地を窃に巡視し、詳細なる偵察を了へて綠毛の大龜に打乘り大足彦命と共に突然歸還したのである。

斯くと知つたる美山彦、國照姫、杵築姫等の邪神は、忽ち周章狼狽して色を失ひ、逃ぐるにも逃げ途なく、梟の夜食に外れし時の如く面ふくらし乍ら、二神を迎へて いやさうな、氣乘のせぬ聲で

「能くもお歸りありしぞ、マア〳〵御芽出度し」

と義理一遍の冷淡極まる挨拶を陳べ、早々我居室に立ち去つた。

數多の神々は、二神の無事に歸還せられしを心底より欣喜に堪へず、或は天を拜し、或は地を拜し、枯木に花の咲きしが如く勇み立つたのである。二神は先づ天の三柱の大神に無事の歸城を感謝し、次で國治立命の神前に拜跪して神恩の深きに涙を流し、眞

澄姫命を初め留守中の諸神に、永日の勞苦を謝し終りて、蓮華臺上の聖地に登り、天神地祇、八百萬の神々に感謝の祝文を奏上し、衆神に守られて城内深く休息する事となつた。

「我等は常世城に捕はれ、獄中に呻吟し玉ふことを悲しみ、同情の涙に堪へず、因りて我等は種々の手續きを求めて大國彦命に歎願し、且つ常世彦命の許に必死的運動の結果、貴神等は今日無事に歸還するを得たるは御承知の事ならむ。神命の加護とはいひながら、其の大部分は我等が犧牲的大運動の賜なれば、今後は我等の忠言を容れて大々的改革を斷行し玉へ。此好機を逸する時は地の高天原も、龍宮城も暗黑界と變ぜん事明かなり」

と、喋々として述べ立つる。二神は國照姫以下の神々の、見ね透きたる虛言に呆れて、言語も早速に發し得なかつた。即ち二神は一旦ローマの戰ひに破れて捕はれたれど、神の祐助に依つて中途に救はれ言靈別命は一時高白山に隱れて時を待ち、夫より不思議にも途中大足彦命に會し相共に天下の諸山を歷視し、邪神の奸計を詳細に探究し還りたる事を告げ、且國照姫、杵築姫等の言葉の事實に相反し、全然虛構なる旨を素破抜いた。

國照姫以下の邪神等は、二神の言を聞きて赤面でも爲すやと思ひの外厚顏無耻なる彼等惡神は、少しの痛痒も感ぜざる如き態度をよそほひ、却て二神の言を虛言と言ひ放ちつゝ、猶も陰に陽に反抗的態度を持續し、或は大國彦命の部神に通じ、或は常世姫命と謀り、盛んに地の高天原を顚覆せむと焦慮しつゝ、表に善神の假面を被ぶり、暗々

裡に反逆的活動を續けた。

（大正一〇・一二・七　舊一一・九　櫻井重雄錄）

瑞　月

羅馬なる法の王も大本の
教を聞かば衣捨てなむ。

越國の雪より清き大道も
世に白妙のごく人もなし。

第四二章　常世會議（一四二）

美山彦、國照姫等の一派は暗々裡に大國彦命に内通し言靈別命以下を窮地に陷れ地の高天原を神退ひに退はんと、茲に玉の井の湖に一敗地にまみれ潰走したる牛雲別、蚊取別、蟹雲別を先導に八十枉彦神なる朝觸、夕觸、日觸、言觸等をして數百萬の探女を天の下四方の國々遣る隈なく配置し以て言靈別命、大足彦命の惡評を宣傳せしめ、螺螈別、播磨別等の應援を得て各山各地の八王神を籠絡せしめた。八王神、八頭神は終に彼等の奸策に陷り漸次言靈別命に反抗の態度をとり、各山各地の八王八頭を常世城に召集し十二柱の八王八頭を八王大神の部下に附屬せしめんとし、一大團結力を造つて地の高天原なる大八洲彦命を排除せん事を鳩首謀議し八王八頭の贊

成を得た。大八洲彦命は此の形勢を見て事態容易ならずとし、茲に八嶋彦、加賀彦、陸奥彦を使神として常國世に遣はし、一旦神界にて定められたる天使長の管轄を放れ自由に八王八頭の聯合團体を造り、大神の制定を破るは天則違反の最も甚だしきものたる事を極力言明せしめた。

されど最早常世彦命は世界の八王八頭を殆ど惡辣なる手段を以て言向け從へたる勢に任せ、天使長大八洲彦命の宣示を馬耳東風と聞き流し、自由權利論を强張して八嶋彦、加賀彦、陸奥彦等の使神を侮蔑し、且つ全地上の國魂神の一致の決議を今更改變するは道理に於て宥すべからざる惡逆無道の所置なりと一言にはね付けた。使神は殆ど取り付く嶋も泣き寢入り波にとられた沖の舟、悄然として歸城した。

その中にも萬壽山の八王神磐樟彦命の一派と天山の八王神齋代彦命の一派の神々は、天則を重んじ苦節を守り、四面楚歌の中に卓立して上下一致能く永遠に神政を支持しつゝあつた。斯くして地の高天原に於て、神定め玉ひし十二の八王神は十王女まで八頭八尾の憑依せる常世彦命の爲に、併呑されて了つた。手撫土（艮の金神）足撫土（坤の金神）の窃に守り玉へる、十二の寶座は既に十座までも失はれた。十二個の黃金水の玉を竹熊の爲に十個まで占奪されたると同樣の慘事である。八王大神は勝に乘じて、猶もこの殘りの二王をその幕下たらしめんとして、あらゆる奸策を施した。されど此の八王と女神のみは、國大立命の爲に難を免れた。

此の次第は後日に詳しく口述する考へである。ある古書に載たる八乙女と云へるは卽ち八王と女神の意義である。

（大正一〇・一二・八　舊一一・一〇　谷村眞友錄）

第四三章　配所の月（一四三）

八王大神常世彦命は十王、十頭の神々を操縦し數多の魔軍と共に數百千の磐船に乘り天空を掠めて黄金橋の上空を襲ひ、數百千萬とも數限りなき火彈を投下し、且進んで龍宮城及びエルサレムの上に進擊し來たり、爰にも多數の火彈毒彈等を、雨霰の如くに投げ付けた。大八洲彦命、大足彦命、神國別命、八島別命は城内の神將神卒を指揮しつゝ盛んに防戰に努めた。龍宮城よりも數多の磐樟船を飛ばして大いに敵軍を惱ませた。而して一勝一敗を繰返しつゝ戰ひ久しきに亘り、龍宮城の神軍は日夜に其の數を減じ、殆ど孤城落日無援の窮地に陷つた。

大八洲彦命は最早如何に神明の加護と神智を揮ひ神算鬼謀の祕術を盡すと雖も到底勝算なきを看破し、百計茲に竭きて、遂に國祖の御前に拜跪し、天の眞澄の鏡を以て敵軍を防がん事を奏請した。然るに國祖は大に怒り玉ひ

國祖『汝等は天地の律法を以て何故に敵を言向和し悔改めしめざるや、進退維谷まりたりとて、苟くも天地の律法を制定され、世界を至善の道を以て教化すべき天使の職掌を拜し乍ら、敵の暴力に酬ゆるに暴力を以て對抗せんとするは、天使長より神聖なる律法を破るものにして、之に過ぎたる罪科は非ざる也、飽くまでも忍耐に忍耐を重ねて、至誠一貫以て極惡無道の神を心底より悔改めしめ、天則の犯すべからざるを自覺せしむべし。之れ善一筋の誠の教なれば、假令如何なる難局に立つとも斷じて眞澄の玉は使用すべからず。且つその玉は稚櫻姫命幽界に持ち行きたる淨玻璃の神鏡と成りたれば、之を戰鬪のために使用すべきものに非ず。汝等は神の力を信じ、至誠

を天地に一貫し、以て天津神の御照覽に預かるを以て主旨とし、暴惡無道の敵軍に暴力を以て戰ふを止めよ。眞の神の心は宇宙萬有一切を平等に愛護す、故に大神の眼よりは、一視同仁にして、徒に爭鬪を事とするは神慮に背反するものなり、斷じて武力に訴へなどして解決を急ぐ勿れ。何事も天命の然らしむる處にして惟神の攝理なり、唯々汝等は天使たるの聖職に省みて廣く萬物を愛し敵を憎まず、彼等の爲すがまゝに放任せよ』

との嚴命であつた。

天使長大八洲彦命は各天使を地の高天原に集めて神勅を報告し、且つ最高會議は開かれた。天空には敵の磐船雲霞の如く襲來し、頭上に火彈を雨下し、會議の席上にも火彈飛び來たりて從神を傷つけ、暗雲天地を罩めて咫尺を辨ぜざるに至る。然れど國祖の神勅は大地よりも重く、その命は儼乎として動かすべからず、然りとて神命を奉ぜんか味方の敗亡は火を睹るよりも明白なる事實である。萬一神命に背反せんか、天則破壞の罪科を犯さむ。ア、善の道ほど辛きものはなし、と諸神は思案に暮れ溜息吐息の態であつた。

龍宮城内よりは美山彦、國照姫、杵築姫、龍山別等の一派は、平素の目的を達するは今この時と、内外相應じて八王大神の魔軍に應援し、味方は四分五裂の狀勢に陷り收拾すべからず、進退愈谷まりたる天使長大八洲彦命以下の天使神將は、止むを得ず大神の禁を破つて破軍の劍を振き放ち、寄せ來る空中の敵軍目がけて打ち振るや否や、劍の尖より不思議の神光現はれ、天地四方に雷鳴電光起り、疾風吹き荒び雨の降るが如く數百千の磐船は一隻も殘らず地上に墜落し、敵軍の大半は殆ど滅亡して了つた。

さしも猛烈なる敵の魔軍も大八洲彦命以下の神々の犧牲的英斷と破軍の劍の威德を以て、もろくも潰滅して了つた。敵の逃げ去りたる跡の地の高天原及び龍宮城は恰も大洪水の引きたる跡の如く、大火の跡のごとき慘澹たる光景であつた。折しも大風吹き荒び强雨降りそゝぎて、凡ての汚穢物は惟神的に吹き散らされ、大雨洪水となりて大海に流れ去り、再び淸淨なる聖地聖城となつた。

爰に美山彦、國照姫の一派は、國治立命の御前に進み出て

「此度の大八洲彦命以下の天使神將は、嚴格なる大神の神勅を無視し、嚴禁を犯して破軍の劍を採り出し、寄せ來る數多の敵軍を散々に攻め困め、暴力のあらん限りを盡し、優勝劣敗弱肉强食の戰法を使用し、廣く萬物を愛し敵を憎まず、善一筋の誠を以て言向和さず、且『殺す勿れ』の律法を無視したる惡逆無道の罪、斷じて宥すべからず。希はくば彼れ天使長以下の職を解き、地の高天原を追放し、嚴格なる天地の律法を犯されざる樣、何分の御處置を下されん事を願ひ奉る」

と頭を揃へ律法を楯に恭くしく奏上した。

地上靈界の主權者に坐します國祖の大神も律法を守り、天地の綱紀を保持するの必要上如何に止むを得ざる情實の爲めとは言へ、天地の神の定めたる禁を犯したる以上は、之を不問に附すること能はざる破目に陷り玉ひ、呑劍斷腸の思ひを心中に秘め涙を隱して斷然意を決したまひ、大八洲彦命、言靈別命、大足彦命、神國別命の四天使を召して儼然たる態度の下に、地の高天原と龍宮城を退去すべく宣示し給ふた。この四天使等は稚櫻姫命の到りませる幽廳の神と左遷さるゝ規定であつた。然るに貞操なる眞澄姫命、言靈姫命、龍世姫命等の歎願哀訴に由り大神は其情を酌みたまひて、そ

の罪を赦し、萬壽山の城に蟄居を命ぜられ、四神は茲に配所の月をながめて、幾何かの星霜を送る事となつた。

この四神は元來國大立之命、天神の命を奉じて大海原の國を知食すべく、その精靈魂を分ちて神界の守護に當らせ玉ひしものにして

大八洲彦命は國大立命の和魂であり

言靈別命は同命の幸魂であり

また

大足彦命は同命の荒魂であり

神國別命は同命の奇魂である。

ア、天使長以下三天使の重神の退却されし後の地の高天原及び龍宮城の形勢は、如何にして治まり行くであらうか。

（大正一〇・一二・八　舊一一・一〇　近藤貞二錄）

瑞月

千早振神の敎をかしこみて
駒立てなほす元の住處へ。
言靈の幸ふ國に生れ來て
神の御聲を聞かぬ愚かさ。

瑞月

千早振神ぞあらはれきたのそら
綾の高天に教傳ふる。
烏羽玉の世を救はんとあらがねの
地の御祖は現はれにけり。

第一一篇　新規蒔直し

第四四章　呵々天下（一四四）

大八洲彦命以下天使の聖地退去の後は國治立命の奏請により、天上より高照姫命を降したまひて之を地の高天原の宰相神に任じ、天使長の聖職に就かしめ、眞澄姫命、言靈姫命、龍世姫命をして天使の聖職に就かしめ玉ふた。茲に女神四柱相並びて神務と神政に奉仕するこゝとなり、神々の心氣を新にする事を得た。

一旦常世彦命の威力に壓せられ八王聯盟に加はり居たる諸天使は、八頭神を引連れ八王大神に背きて再び高照姫命の幕下となり、前非を悔い、爰に目出度歸順することゝなり、聖地の神政は全く復活する事を得た。天使長高照姫命は國治立命の神命を奉じ、八王八頭を率ゐて、天地の律法を普く地上の世界に宣傳し、一時は飛ぶ鳥も墜つ

斗りの大勢力でもつた。世界の各山各所には天津祝詞の聲充滿し、神人動植物は悉くその堵に安じ實に天下は泰平に治まり、邪神は各影を潜め國土安穩にして、天日いよ〳〵照り輝き、月光澄渡り蒼空一點の妖氣なく、實に完全無缺の神世を現出せしめた。

世界の神人擧つて呵々天下と賞揚するの聖代となつた。

龍宮城に雲を凌いで聳立せる、三重の金殿は顯國の御玉の神靈發動して、唸りを發し、時々不可思議なる光輝を發射して邪惡神の面を照らし玉へば、地の高天原の聖地も龍宮城の聖城も、日增に神威靈德加はり金色の鶏、銀色の神鳩嬉々として中空に舞ひ遊び、天男天女は常に四邊を圍繞して太平の音樂を奏し、五風十雨順を違へず、禾穀豐穰して神人その業を樂しみ、神界理想の黄金世界を現出するに至り、遠近の邪神も靜謐歸順を裝ひ、野心を深く包みて現實的暴動を愼み、天下一點の妖雲を見ざる瑞祥の世となつた。是は萬壽山に退去されし前天使長以下の日夜の專念的祈念の力に由りて、その精靈体に活動を起し聖地聖域の靈德を發揮し玉ふたからである。然れど天使長高照姫命以下の三天使を始め神將神卒に至るまで、須佐之男大神の晝夜の御守護の賜たることを少しも覺らず、天運の循環と、新天使以下の神務と神政の完全無缺にして、天地神明の神慮に叶ひ奉れる結果ならむと、心驕りて顯國の御玉の守護と、大八洲彦命以下の專心祈念の賜たることを忘却し、遂には女神のあさはかにも驕慢心增長し、其結果は天地の律法まで輕視するに到り、神德日々に衰へ各所に不平不滿の聲起り、漸次日を追ひ月を重ぬると共に、呵々天下の神政を呪ふ神々勃發するの形勢を馴致した。

茲に一旦鉾を戢め歸順を裝ひ居たる八王大神常世彦命は、常世姫命と再擧を企て大國彦命と計り、世界各所の八王八頭に、八頭八尾の大蛇の靈魂を憑依せしめ、其

女神には金毛九尾の惡狐の靈を憑依せしめ、部下の神々には六面八臂の邪鬼や眷屬を憑依せしめて、俄に反逆心を發せしめた。世界の神々は亦もや一時に起つて、地の高天原の神政に反抗的態度を表はし、數多の神々魔軍と變じて、八王大神指揮の下に先づ諸山の神軍を降し勝に乘じて聖地に向ひ、天の磐船を數百千とも限りなく建造して天空を翔り群をなして攻め寄せ來つた。天使長高照姫命は周章狼狽の結果神勅を請ふの暇なく直に數百隻の天の鳥船を造り橄欖山より敵に向つて攻入り、蒼空高く一大激戰を開始し一勝一敗互に雌雄を爭ひ再び聖地は紛亂の巷と化して了つた。空中の戰ひは夜を日に次ぎ殆ど一年有餘を費やした。國祖國治立命はまたもや神勅を降し

『天地の律法を遵奉し決して暴力を以て戰ふ可らず、大慈大悲の親心を以て敵を言向和はせ、善一つの大道に敎へ導くべし』

と嚴命された。然れど高照姫命、眞澄姫命、言靈姫命、龍世姫命は、

『今日の場合かゝる緩漫なる方法を以て敵を改心せしめんとするは、實に無謀迂遠の策にして到底寸効なかるべし。徒に宋襄の仁を施し却て敵に乘ぜられ、噬臍の悔を後日に遺さむよりは、强暴に對するに强暴を以てし我等の實力を示して、敵を全滅せしめ、後難を絶つに如かず。如何に國祖の神命なればとて危急存亡の場合實力なき天地の律法を振りかざして、何の効をか爲さむや。神勅は、我等は努めて遵奉せざるべからずと雖も、其は時と位置とに關して行ふべきものなり。急場の用に立つべきものにあらず』

と四柱の天使は極めて强硬なる態度を持し、神勅を鼻の先にてあしらふ樣になつた。

時しも敵は倍々進んで聖地の上空に雲霞の如く飛び來たり、天の三柱宮の上に火彈を

無數に投げ付けた。忽ち黒煙濛々として立ち登り、さしも莊嚴を極めたるエルサレムの大神殿も忽ち烏有に歸した。時しも火焰の中より巨大なる神將現はれ、味方の鳥船に打ち乘り、敵の神將醜原別に向つて衝突を試みた。醜原別はもろくも打ち落され、火焰の中に包まれ苦悶の結果終に燒死して了つた。味方の神將神卒は手を打ちて喜び快哉を叫んで止まなかつた。言靈姫命は又もや破軍の劍を拔放ち、敵の神軍に向つて前後左右に空中目がけて打ち振つた。寶劍の威德直に現はれ玉ひて、敵の將卒は雨の如く地上に落下し、或は火焰の中に墜落して黒焦となり滅亡した。部下の將卒は不意を打たれて一敗地にまみれ、命からぐ〳〵西天を掠めて遠く姿を沒した。東北の强風突如として吹き起り聖地聖城を倒潰し、動植物の被害は目も當られぬ悲慘な光景となつた。眞澄姫命、龍世姫命は大に驚き

『妾等神勅違反の行動を執りたるを大神の赫怒し玉ひて、斯の如く災害の頻發するならむ』

と、天地に拜跪して謝罪し天津祝詞を一生懸命に奏上した。されど東北の風は益々强烈となり、洪水氾濫して遂には龍宮城も水中に沒せむとするに到つた。聖地聖城の神將神卒は、今更の如く一齊に天地に拜跪して救助を祈り神言を奏上した。天地の怒りは容易に解けず、祝詞を奏上すればする程風勢は刻々に猛烈の度を加へ、雨は彌々繁く降り來たり、雷鳴は天柱挫け、地維裂くるかと疑ふ斗りの大音響凄じく轟き渡り、電光ひらめき渡りて眼を開く能はず、神々の面色は土色と變じ、息をこらして地上に平伏するのであつた。

（大正一〇・一二・八　舊一一・一〇　栗原七藏錄）

第四五章　猿猴と澁柿（一四五）

天使長高照姫命以下の女神の天使は、天地の激怒に狼狽し、殆ど爲す所を知らなかつた。部下の神々は殘らず驚きの餘り右往左往に逃げ廻り、或は躓き或は失神し、とかゝげの欠伸したる如き怪しき顏して、呆れ仰天するもあり、石龜の酒壺に陷入つて溺れし時の如き面付にて實に見るも滑稽の次第であつた。

雷鳴は容易に止まざるのみならず、倍々激烈に鳴り轟き、東北の强風頻りに吹き荒み暗雲天地に閉して凄じく、常夜の暗の如く神人戰慄し、禽獸虫族に至るまで、何れも地に俯伏して息をも發せざるの慘狀を現出した。この四柱の女神は自我心最も强くして神命さへも抗拒し律法を破りたれば、天地の大神の怒りに觸れ斯る混亂狀態に陷りたるぞ是非なき次第である。

待ち設けたる常世姫命の部下、國照姫、杵築姫は平素の願望を成就するはこの時を逸すべからずとし、國治立命の奥殿に參向し、高照姫命以下の女神天使等の神勅を無視し律法に違反せる罪科を詳細に陳述し、速に四柱の女神の職を免じ、聖地聖城を追放されんことを進言した。神明に依估なし、大神は天地の律法に對し情に訴へて四神を赦す譯にも行かず遂に涙を呑んで四神の聖職を免じ、且四神に對し、改心のためとて、ヱデンの園に籠居を嚴命し玉ふた。

四神は神命と律法に對しては抗辯するの餘地なく、唯々として嚴命を拜受し命のまに〳〵ヱデンの園に籠居の憂目を味はふの止むなきに立到つた。

四神の追放と共に、さしも激烈なりし雷鳴も、凄じかりし電火も、烈風强雨も、忽ち

鎭まりて淸澄なる天地と化し、宇宙は夢の醒めたる如き光景となつて了つた。

エデンの園は、東北西の三方靑山を以て圍まれ、南方のみ廣く展開して一條の大川淸く流れ、自然の城壁が造られてある。四神は此の一定の場所に押込められ草木の實を食用に供しつゝ樂からぬ光陰を送つた。

エデンの園は嘗て邪神の棟梁竹熊の割據せし所にして、鬼熊の爲に占領せられしが、鬼熊、鬼姫の沒落後全く龍宮城の管下になつて居た所である。

因に 同照姫命は金勝要の神の和魂であり、

眞澄姫命は同神の幸魂であり、

言靈姫命は同神の荒魂であり、

龍世姫命は同神の奇魂である。

今迄四魂合一して、神業に奉仕されつゝ在つたが、自我心の强烈なりしために、聖地聖城を追放され、淋しき配所の月に心を慰め、時を待ちたまふの止むを得ざるに立到りしは實に殘念の至りである。是に就ても愼むべきは、自我心と驕慢心である。神諭の各所に

『金勝要之神も餘り自我心が强かつた故に、狹い處へ押込められなさつたぞよ』

とあるも、この消息を漏らされたのである。

然るに金勝要の神は、一旦大地神界の根神とまでなり玉ひしに、自我心の頑强なりしため、エデンの園に押こめられ、猶も自我を頑强に張りしため、遂には地底の醜めき穢なき國に墜落し、三千年の辛苦を嘗めたまふた位の自我心の强烈なる神であつた。

美山彦、國照姫の一派は、時運の到來を歡びつゝ、必ずや後繼の天使長は、常世彦

命に新任され、自分等の一派は天使の聖職を命ぜらるゝものと期待し、肩を怒らし鼻をうごめかし、得意頂點に達し、その吉報を今か〳〵と指折り數へて樂んで待つて居た。

然るに豈計らんや、後繼の神は常世彦一派に下らずして、天上より降り來たれる金神の首領なる澤田彦命の一派に降つた。澤田彦命は一名大將軍と諸神より賞揚されつつあつた英雄神である。

常世彦命の一派は、案に相違し、猿猴が澁柿を口一杯に含みし如く、頰を脹らせ澁面を造つて悄然として引下がつた。その狀見るも氣の毒なる次第であつた。

茲に國治立命は澤田彦命を天使長に任じ、妻神澤田姫命を輔佐神となし、眞心彦命を天使に任じ、妻神の事足姫命をして神務を輔佐せしめ玉ふた。

また澤田彦命の從神に、入雲彦、入雲姫の夫婦の神を採用した。眞心彦命には國比古、國比女の夫婦二神及び百照彦が從神として仕へた。

百照彦は、眞心彦命の最も寵愛深かりし神であつた。霜の朝、月の夕に無聊を晴らすため、百照彦を居室に招き、種々の面白き物語を聞きて心の勞を慰めて居た。百照彦は、如何にして主神の心勞を慰安せんかと常に焦慮して居た。然れど主神の機嫌を取るべき物語りも最早種が絶れて了つた。

如何にせば良からんやと我居間に端坐し、双手を組んで吐息を漏らし思案に沈んで居た。妻神なる春子姫は夫神の近頃の樣子を窺ひ、夫神には何か一大事の出來し、それがために朝夕苦慮を廻らしたまふかと、心も心ならず、思ひ切つて夫神に向ひ言ふやう

春子姫『近頃の夫神の樣子を伺ひ奉るに、余程御心痛の態に見受けたてまつる。天地の

間にかけがへなき水も漏らさぬ夫婦の間に、何の遠慮懸念のあるべきぞ、苦樂を共に偕老同穴の契を結びたる妻神に、心の苦衷を隱したまふは、實に冷酷無慈悲の御仕打ち、妾は之を恨み奉る」

と涙片手に口說き立てた。百照彦は漸く口を開き

百照彦「我は主神の仁慈と恩德の深きに晝夜感謝の念を斷たず。然るに主神眞心彦命は神務の繁忙に心身を疲勞し、日を追ひて身体やつれ弱らせたまふを見るに付け、從神の身として、之を對岸の火災視する能はず、如何にもして主神の御心を慰め奉らんと日々御側に侍し、神務の閑暇には面白き四方山の物語を御聞に達し、主神の御心を幾分か慰め奉り來たりしに、最早我は珍らしき物語も盡きたれば、今後は如何にして主神の御心を慰め奉らんと、とつおいつ思案に暮るゝなり」

と語つて太き吐息を吐く。春子姫は何事か期する所あるものゝ如く、夫神に向ひ笑顏を湛へて見せた。

（大正一〇・一二・九　舊一一・一一　加藤明子錄）

瑞月

言靈の天照る國の尊とさは
神の御聲を居ながらに聞く。

第四六章　探湯の神事（一四六）

百照彦は默然として春子姫の面色を打見やりつゝありしが、忽ち膝を前めて

百照彦『汝の愉快に滿ちしその容貌、慥に妙案あらん、疾く我にその妙案を物語れよ』

と顏色に光を顯はし勢よく問ひかけた。春子姫は對へて曰ふ

春子姫『妾は元來藝無し猿の不束なる神なれども、茲に一つの隱れたる藝能あり。それは天人の舞曲にして、天上に於て諸神の讃歎止まざりし妾が獨特の藝能なり。妾もし夫神の許しを得ば、夫神と共に眞心彦命の御前に於て一曲を演じ奉らば、必ず歡ばせ給はむ』

と得意滿面に溢れて勇ましさうに言つた。百照彦は大に驚きて

百照彦『ア、汝は何時の間にか斯かる藝能を覺えたるか』

と尋ねた。妻神は答へて

春子姫『妾は貴神の許に娶らるゝまで、高天原の神殿に奉仕し、日夜舞曲を奏し、神歌を歌ひ、大神の神慮を慰め奉る聖職に奉仕せしが、其技は遂に神に入り、妙に達して天上に於ける第一位の藝能神として、もてはやされしが、此度地の高天原の改革に付き貴神は眞心彦命と共に赴任さるゝに際し、大神の命に依りて、貴神の妻神と定められたり。されど、貴神は大神の御心のある所を毫も知りたまはず、只單に自ら選びて妾を妻神に娶りしごとく思召したまへども、夫婦の緣は決して獨自の意志の如くなるべきものに非ず。何れも大神の御許しありての上の神議りの事なれば夫婦の道は決して輕忽に附すべきものにあらず。何れも皆夫婦たるべき靈魂の因緣

ありて、神界より授けらるゝものなり』

と天地の因果を說き示し、夫婦の道は神聖にして犯すべからざる理由を諄々として說き立た。

百照彥は初めて妻神の素性を知り、且神律の重んずべきを深く感得した。百照彥は更に妻神に向ひ

百照彥『汝は左程の藝能を知ながら、現在夫神たる我に今日まで何故に告げざりしや』

と怪しみ問ふた。春子姬は對へて

春子姬『妾は貴神の妻神となりし上は、妻神たるの務めを全うせば足る。徒に我藝能に驕り慢心に長じ、遂には夫神を眼下に見下す如きことあつては、天地の律法を破る大罪なれば、夢にも我藝能を鼻に掛け不貞の神と笑はるゝなとの、父母兩神の固き敎訓なれば、今日まで何事も愼みて、一度も口外せざりし次第なれども、今日夫神の辛勞を傍觀するに忍びず、此時こそは妾が得意の藝能を輝かし、夫神を輔佐し奉らんと決意したる次第なり。諺にも藝は身を助くるとかや、妾の身は何れになるも問ふところにあらざれども、現在の大切なる夫神の神業を助け、猶殊恩ある主神の御神慮を慰め奉ることを得ば、妾が鍛錬したる藝能の功も、初めて光を發するものなれば、女神の差出口、夫神に對して僭越至極の所爲とは存じ乍ら、夫神を思ふ一念に驅られて、愧かし乍ら妾の隱し藝を知れる事を不圖申上げたるなり』

と言つて、夫神の前に兩手を突き、敬虔の態度を表して物語つた。

百照彥は妻神を伴ひ主神眞心彥命の舘に參向し、命に向ひ、春子姬の藝能の勝れたる事を進言した。命は忽ち顏色を柔げ、さも愉快氣に

眞心彦『天地神明の神慮を慰め、萬物を歡ばしむるの道は歌舞音樂に如くものは無し。幸ひにも春子姫藝術に妙を得たるは何よりの重寶なり、一度我の爲に一曲を演ぜよ』

と言葉もいそ〳〵として所望した。

百照彦は主神の愉快さうなる顏色を見て、やつと安堵せしもの、如く胸を撫でて笑聲を作つた。

春子姫は、會心の笑みを漏らし乍ら、舞衣に着替へ長袖しとやかに舞ひ始めた。實に春子姫の言へる如く、其技、妙に達し神に入り、天地神明の嘉賞し玉ふも當然なるべしと、眞心彦命を初め百照彦も只感に打たれて恍惚たる有樣であつた。その妙技の非凡なるを傳へ聞きて、大將軍澤田彦命まで臨席せられ、眞心彦命に向ひて

澤田彦『貴神は實に良き從神を持たせらる。我は羨望の念に堪へず』

と言つて、其の妙技を首を傾けて觀覽した。百照彦、春子姫は大に面目を施し、主神の賞詞を嬉しく拜受して厚く禮を述べ、我舘に歸り直に神前に神酒を奉獻して、感謝の祝詞を奏上した。

それより天使眞心彦命は、春子姫の舞曲の優雅なると、その神格の高尚なるとに心をとろかし、一にも春子姫の舞曲、二にも姫の音調と、事ある毎に二神を招き酒宴を催し、終には神務を捨てゝ絲竹管絃の道にのみ耽溺し、眞心彦命と春子姫の間に面白からぬ風評さへ立つに到つた。

眞心彦命は元來仁慈の念深く、且多情多感の神であつた。それ故、外部の風評を耳にするや、春子姫に對する同情の念は日を追うて昂まり、惡しき風評は益々油の浸潤するが如き勢で內外に擴まつた。

この事、忽ち國治立命の耳に入りたるより、命は直に眞心彦命を召し出して嚴しく不義の行爲の有無を詰問された。眞心彦命は首を左右に振り

眞心彦『我苟くも聖地の重神として、天使の職を忝なうし、天地の律法を宣傳すべき聖職にある、如何でか斯かる忌はしき行爲を敢てせんや。天津神國津神も、我が心身の潔白を照鑑ありて、我が着せられし濡衣を干させ玉へ』

と、一心不亂に祈願を凝らした。その時春子姫は突然身体激動して憑神狀態となつた。之は稚櫻姫命の降臨であつた。命は敎へ諭して曰く、

『宜しく探湯の神事を行ひ、その虛實を試みよ。神界にてはこの正邪と虛實は判明せり。然れど地上の諸神は、疑惑の念深くして心魂濁り居れば、容易に疑ひを晴らすの道なし。故に探湯の神事を行ひ以て身の疑ひを晴すべし。正しきものは、神德を與へて之を保護すべければ、如何なる熱湯の中に手を投ずるとも、少しの火傷をも爲さざるべし。之に反して、汚れたる行爲ありし時は、忽ちにして手に大火傷をなし、汝の手は直ちに破れたゞれて大苦痛を覺ゆべし』

と宣示された。

眞心彦命は、喜んで頓首し玉ひ、直ちに探湯の神事に取かゝつた。八百萬の神々はその虛實を試すべく探湯の齋場に垣を作り片唾を呑んで見て居たのである。沸きかへる熱湯の中に、怖ぢず臆せず、眞心彦命は天津神國津神に向つて祈願し、泰然自若として手を浸し入れた。續いて春子姫も同じく手を浸し、久しきに渉ると雖も、二神共に何の火傷もなく、茲に二神の疑ひは全く拂拭されて了つた。二神は天地に向かつて神恩の有難きを謝し、慟哭稍久しうした。八百萬の神々は一齊に手を拍つて、二神の潔白を

賞讃した。國治立命は、二神の清淨無垢の心性を賞し且種々の有難き言葉を二神に賜ひ、且今後は神祭の外斷じて舞曲に耽溺し、絲竹管絃にのみ心を奪はれ、神務を忘却する如き、不心得あるべからずと嚴しく敎へ諭し玉ひて、悠然として奥殿に入らせ玉ふた。

眞心彦命は大いに愧ぢ

眞心彦『我れは大いに過てり、我が惡しき風評の高まりたるは、我不德の致す所なり、聖地の重神として、如何で他神に臨み得んや』

と直に國治立命の御前に到り、天使の聖職を弊履を捨つるが如く辭した。

（大正一〇・一二・九　舊一一・一一　外山豐二錄）

第四七章　夫婦の大道（一四七）

眞心彦命は職を辭し、固く門戸を閉ざして他神との接見を斷ち謹愼の意を表しつゝありしが、終にはその精神に異狀を呈し、一間に入りて、窃に短刀を拔き放ち

眞心彦『惟神　靈幸倍坐世』

と神語を唱へ、自刄して歸幽した。妻神事足姫命を初め、長子廣宗彦、次子行成彦の悲歎と驚きは例ふるにもの無く、七日七夜は蚊の泣く如くであつた。八百萬の神々も涙の雨に袖を搾らぬは無かつた。同情の念は悉く清廉潔白なる眞心彦命の御魂に集まつた。八百萬の神々は命の生前の勳功を賞揚し、長子廣宗彦をして、父神の後を襲ぐべく神々は一致して、國治立命に願出でた。

茲に廣宗彦は仁慈を以て下萬神に臨んだ。神界は實に無事泰平に治まり、從つて國治立命の神世を謳歌する聲は六合に轟き渡つた。國治立命を初め地の高天原の神々の威勢は旭日昇天の如く隆々として四海を壓するに至つた。開闢以來斯の如く能く治まりし神世は空前絶後の聖代と稱せられた。要するに、清廉にして無慾、且つ仁慈深き眞心彦命の血を享け繼ぎたる、廣宗彦の經綸宜しきを得たる結果である。

茲に眞心彦命の未亡人なる事足姫は、夫神の心を察せず、數年を經て終に夫神の恩德を忘れ、春永彦と云ふ後の夫神を持ち、夫婦の間に桃上彦といふ一柱の神を生んだ。桃上彦は又仁慈深く下の神々を憐み、且上に對して忠實至誠の實を擧げ、衆神の評判も非常に好かつた。そこで兄の廣宗彦は大に歡び、自分の副役として神務を輔佐せしめた。

然るに星移り月閲するに從ひ、最初極めて善良なる性質の桃上彦も、終に常世國の魔神にその心魂を誑惑せられ、漸次惡化邪遷して体主靈從の行動をなし、上位の神の命を奉ぜず他神の迷惑も心頭に置かず、自己本位を旨とし、驕慢心日々に增長して、終には兄神の地位を奪ひ、自ら天使の位置に昇り、神政の全權を掌握せんと計り、只管下萬神の望みを一身に集中する事のみに碎心焦慮した。それ故下萬神の桃上彦に對する勢望は一時は非常なものであつた。終に桃上彦は兄神を排斥し、自ら其の地位に就き仁政を世界に布き大に神政の爲に心身を傾注した。下々の神々も最初はその仁政を口を極めて謳歌しつゝあつたが、終にはその恩に馴て餘りに有難く思はぬやうになり、放縱安逸の生活をのみ企て、天地の律法を以て無用の長物と貶するに到り、聖地の重神も侍神も漸次聖地を離れて四方に各自思ひ〳〵の方面に散亂した。桃上彦に向つて忠告を與ふる神

あらば怒つて之を排除し、且罪に陷れ、亂暴狼籍到らざる無く、瞬く内に聖地は冬の木草の如き荒涼たる有樣となつて了つた。これは常世彦命、常世姫命の邪神を使役して、神政を紊亂せしめ、國治立命を漸次排除する前程として、大樹を伐らんとせば先づその枝を伐るの戰法を用ゐたからである。國治立命は枝葉を斷られた大樹の如く手足をもぎ取られし蟹の如く、二進も三進も成らぬやうに仕向けられ、神の權威は全く地に落ちて了つた。是が体主霊從と云ふ事の大原因となり、天地の律法は根底より破壞さるゝ狀態を馴致した。

事足姫は、空閨の淋しさに忍び切れず、嬉神の最も大切なる貞節を破り、後の夫神を持ちて夫神の霊に對し、無禮を加へたる如き、体主霊從の精神より生れ出たる桃上彦であるから、最初の間は極めて身、魂ともに圓滿清朗にして、申分なき至誠の神であつたなれども、母神の天則を破り、不貞の水火の凝結したる胎内を借つて出生したる結果終にはその本性現はれ、放縱驕慢の精神崩芽せんとする、その間隙に乘じて邪神の容器と不知不識の間に化り代り、終には分外の大野心を發し、可惜大神の苦辛して、修理固成されたる天地の大經綸を根底より破滅顚覆せしめたのである。神諭に

「世の亂れる原因は、夫婦の道から始まる」

と示されてある通り、夫婦の道ぐらゐ大切なものは又と外にない。國家を亡ぼすも、一家を破るも、一身を害ふも、皆天地の律法に定められたる一夫一婦の大道を踏み謬るより來たる處の火である。神界の神々は申すも更なり、地上の人類は神に次いでの結構な身魂であるから、第一に夫婦の關係に注意せなくては成らぬ。

斯の如く事足姫の脫線的不倫の行爲より、延いてはその兒の精神に大なる影響を及ぼ

し、終には神界も混亂紛糾の極に達し、現界の人類に至るまで、この罪惡に感染し、現代の如く邪惡無道の社會を現出するに立到つた。

之を思へば神人共に、体主靈從の心行を改め、根本より身魂の立替立直しに全力を捧げ、靈主体從の天授の大精神に立歸り、神の御子たるの天職を奉仕し、毫末と雖も体主靈從に墮するが如き事なきやうに互に慎み、天地の律法を堅く守らねばならぬ事を強く深く感ずる次第である。

天地の律法を破りて、自由行動を取りたる二神の子と生れたる、桃上彦の大なる野心を起して其の目的を達せん爲、下の神々に對して、人望を買はむとし、八方美人主義を發揮したる爲に、却て下々の神々より輕侮せられ、愚弄され、綱紀は弛緩し、上の命ずる所下之を用ゐざる不規律極まる社會を現出せしめたので、神界にては桃上彦を大曲津神と呼ばるゝ樣になつて了つた。神諭に

「慢神と誤解と夫婦の道と慾ほど恐いものは無い」

と示されたる通り、桃上彦の失敗を處世上の手本として、神人共に日々の行動を慎み、天授の精魂を汚さぬやうに努力せねばならぬ。又桃上彦は八十猛彦、百猛彦を殊の外寵愛し、兩神を願使して益々野心を逞しうし、神政を持荒した結果は、現界にもその影響を波及し、持ちも降しも成らぬ澆季の世を招來した原因を作つた。

（大正一〇・一二・九　舊一一・一一　谷村眞友錄）

第四八章　常夜の闇（一四八）

眞八彥命の歸幽されし後は、その從神たる國比古の行動一變し、廣宗彥の命を奉ぜず、利己的に何事も振舞ひ、徒に權力を揮ひ、事足姫を輕蔑し、自由行動を執りて神々を籠絡し、終に神界の混亂を來たさしめたのも國比古の行爲の不正なるに基因するもの多大であつた。

この國比古と國比女夫婦の間に眞道知彥、大森雪成彥、梅ケ香彥の三柱の御子があつた。この三柱の神は、兩親に似合ぬ極めて嚴正なる神で、智仁勇兼備の至誠の神であつた。三柱の御子神は、父母兩神の不忠不義の行動を改めしめむと、交る〴〵涙を振つて道法禮節を說き幾度となく諫言した。されど、父母の二神は我子の諫言には少しも耳を傾けやうとは爲なかつた。

三柱の神は是非なく、父母二神の發菩提心の改心を待つの止むを得ざるを覺り、五六七神政の時まで善道を修め、天則を遵守し、二度目の岩戸開きの神業に奉仕し、抜群の功名手柄を顯はし、國治立命の大神業を輔翼し、以て父母二神の罪を償はんと、古き神代の昔より現今に至るまで、其の神魂は生き代り死に代り、神界に於て神政成就の爲一生懸命の大活動を今に續けて居る。

廣宗彥命は桃上彥の傍若無人の行動に妨げられて、非常に困難の地位に立ち、筆紙口舌の盡しがたき艱難辛苦を嘗めたのである。父神の眞心彥命は、淸廉潔白の心より惡評を世間に立てられ憤慨の結果職を退き、終には歸幽した。その父神の光を現はさんために、善道を行ひ律法を守り、至誠の結晶力を以て天地神明の稜威を宇内に輝かし、

森羅萬象をして各、その安住の所を得せしめ、父母二神の失敗と罪科を償ひ、その神靈を助けむとして、現代に至るまで地上の各所に放浪して、神政成就の曉に處するため、犧牲的艱苦を嘗めつゝあるのである。

廣宗彦命は至善至愛の神であつたが、元來温柔なる身魂の性質として、弟神の桃上彦の行動に對して嚴戒する事を躊躇した。その故は、桃上彦の行動を一言にても批評し訓戒する時は、繼父たる春永彦の氣色を損する事を恐れたからである。故に桃上彦の惡行を戒め、暴政を改めしむる事が出來なかつたのは、命に取つて末代の不覺にして、終生の大失敗であつた。神の道に奉仕する神人は、右の次第を能く了解し、天則を遵守し、情義にからまれて末代の悔をのこさない樣に注意せねばならぬと思ふ。

桃上彦の体主靈從天則違反の行動の結果は、上は下に押へ付けられ、下はまた世と共に惡化し、慢神の空氣は天地に漲ぎり溢れ、下は追々自己本位の波立ち騷ぎ、神々の階級までも根元より破壞せしめた。至誠一貫的に奉仕せる善良なる神々も、遂には忍び兼て追々に退職して了つたため、神界の神務は如何ともすることが出來ぬ慘澹たる形勢となつた。

そこで廣宗彦命は、弟神の行成彦と力を合せ心を一にして、天則を嚴守し、善一筋の模範を世界に示し、回天的神業を起して、地上の神界を根本より改造せんと焦慮したれども、放縱と怠慢と逸樂のみを企求するに至りたる神々は、一柱として其の神業に參加するもの無く、神界は益々混亂紛糾の度を加へ、萬妖億邪一度に突發して收拾すべからず、常夜の暗黑世界と忽ち變じて了つた。

大將軍天使長澤田彦命の妻神澤田姫命は、出雲姫と共に、神政の紛亂と律法の破

壊とを大に煩慮し、心身を傾注しつゝ、神界幽界大改造の神業の一端にも奉仕せんと、雄々しくも女神の身魂を以て、神代より今に至るまで久遠の歳月を一日の如く、筆紙口舌に悉し難き大艱苦を嘗め、必死の活動を續けて居る神である。

三千世界一度に開き、艮の金神再び表に現はれて、五六七の神業を開始し玉ふ時運の到來したる今日であるから、今度こそは、苦勞の結晶の花の咲き匂ひ、美はしき實を結ぶ神政の世に近づいたので、世界は神界現界に論なく、神人ともに必死の活動を爲し末代しほれぬ生き花を咲かして、神國の爲に十分の努力を勵まねば成らぬ時期に迫つて來た。

私の「靈界物語」も、不知不識の間に舌鉾が横の方に向いた樣な感じがして來た。

惟神　靈幸倍坐世〳〵〳〵〳〵

（大正一〇・一二・一〇　舊一一・一二　櫻井重雄錄）

瑞月

久方の天津空より降りたる
ひとつの御魂は神の楯なる。
不思議なる赤繩の糸のからみたる
人の子終に世に勝てるなり。

第四九章　袖手傍觀（一四九）

澤田彦命、澤田姫命夫婦の間に生れたのは杵築姫、朝子姫、猿子姫の三女神である。

天地の律法破壞して萬妖一時に發起し、終には地の高天原の神政は、殆ど潰滅せんとするも、澤田彦命は對岸の火災を傍觀する如き態度を持し、少しも神界の爲めに全力を傾注せなかつた。そこで妻神の澤田姫命は、躍起となり、夫神に向つて

澤田姫『斯かる神界一大事の場合に際し、神界のために、奮發努力して萬妖を鎭定し、大神の神慮を安んじ、下萬神の苦難を救ふは、貴神の双肩にかゝる大責任なり』

と千言萬語を盡して奮起を促し、且諫言を熱烈に行つた。然るに澤田彦命は、その諫言を馬耳東風と聞き流したのみならず、無責任にも三柱の娘神を引連れ、妻神を地上に遺して空に乘り、再び天上に還つて了つた。澤田姫命は夫子の神々に生別れの辛酸を嘗め、あるにあられぬ氣の毒な憂目を味はつた。妻神は悲歎遣る方なく、天を仰ぎ地に俯して夫神の天より降りて混亂紛糾の神政を修理固成し給へと一生懸命に歎願した。されど一徹短慮なる澤田彦命は一旦決心したる以上は、初志を抛げずと斷然はね付けて了つた。

茲に廣宗彦命は、澤田姫命の窮狀を察して一方の力と成り、神政を輔佐せんと弟神の行成彦と議り、澤田姫命に向つて

行成彦『聖地の神政の斯くまで混亂狀態に陷りたるに就ては、吾々にも大責任あれば、袖手傍觀するに忍びず、故に今後は貴神と共に神界の爲め兄弟一致して貴神の神業を

助け奉らん」

と誠實を表に現はし、苦心に苦心を重ね、一時の困難を救ふた。

澤田彦命は天上に昇りて、自由自在に神界の經綸を成さんと焦慮したが、元來最愛の妻神の至誠の籠れる諫言に立腹し、地の高天原の混亂狀態を餘所に見流し、難を避け安きに就き、利己の目的を達する事のみに熱中せる無責任にして、且無慈悲な神格者であるから、犧牲的精神に缺けて居つた爲めに、何事も「志」と相反し、終には中界の天の八衢に現はれて、猛惡なる魔神となつて了つた。

また出雲姫は、天地の律法の神々によりて破壞されたるを憂ひ、善一つの行ひをなして、神々に模範を示さむとの義俠心を振起し、神國特有の麻柱の眞柱を建てんと百方焦慮したなれど、何分にも肝腎要めの大本元が破れて了つたのであるから、回天の神業は完成するに到らなかつたのである。

（大正一〇・一二・一〇　舊一一・一二　松村仙造錄）

瑞月

現し世の總ての人に幽世の
樣教へんと出でし斯神。
隔たりし天と地との結びより
生れ出でたる人の子神の子。

瑠　月

幽世の事は猶更現し世の
事さへ知らぬ神の子なれば。

如何にして知らさん由も無じやくり
鳴くほとゝぎす神の心根。

第一二篇　靈力體

第五〇章　安息日（一五〇）

天地剖判に先だち、宇宙の大元靈たる無聲無形の一柱の神があつた。

之を神典にては、天之御中主大神と稱へ奉り、神界にては大六合常立尊と申されてある。西洋にてはゴッドと云ひ、佛敎にては阿彌陀如來と言ふ。漢土にては古來天帝又は天主と言つてゐる。私は極めて言語の尠い簡單な御名を選んで、爰では天主と稱へ奉つて述ぶる事に爲たいと思ふ。

天主は、過去現在未來に一貫して無限絶對無始無終の大神靈にましまし、その絶對の靈威を發揮して宇宙萬有を創造し給ふた。

大宇宙の太初に當つて、極めて不完全なる靈素が出現し、それが漸次發達して靈の活

用を發生する迄の歳月は殆んど十億年を費して居る。之を神界に於ては、ヒツカ（一日）と言ふ。次にその靈の發動力たる靈体（幽体）なるものが宇宙間に出現した。之をチカラと稱へた。チとは靈又は火の意味であり、カラとは元素の意味である。この宇宙に元素の活用するに到る迄の歳月は、又十億年を費して居る。この十億年間を神界に於てフツカ（二日）と言ふ。

次にこの元素に靈氣發生して、現顯の物体を形成するに到る迄の歳月は、又大略十億年を費して居る。この十億年間の靈体の進歩を稱してミツカ（三日）と言ふ。茲によ〳〵靈、力、体の三大勢力發揮して、無數の固形体や液体が出現した。太陽、太陰、大地、諸星の發生は次の十億年の間の歳月を費して居る。これを神界にてはヨツカ（四日）と言ふ。

また次の十億年間の歳月を費したる神靈の活動狀態を、神界にてはイツカ（五日）と言ふ。イツは稜威にしてカは光輝の意である。此の五日の活動力によりて、動植物の種天地の間に現出した。いよ〳〵五十億年間の星霜を經て陰陽、水火の活用あらはれ、宇宙一切の萬物に水火の活用が加はり、森羅萬象の大根元が確立した。この歳月は六億年を費して居る。この六億年間の神靈の活用をムユカ（六日）と言ふ。

斯の如くして天主は宇宙萬有一切をムユカに創造された。それより天主は一大金剛力を發揮して、世界を修理固成し、完全無缺の理想世界所謂五六七の神代、松の世を建設さるゝその工程が七千萬年の歳月であつて、之をナヽカ（七日）と言ふ。ナヽとは地成名成、成就、安息の意である。七日の神靈の活用完了の曉に至つて、至善至美至眞の宇宙が完成さるゝ之を安息日と言ふ。

安息日の七千萬年間は天主の荒工事を終つて、その修理固成のために活動さるゝ時代であつて、世人の言ふ如く神の休息したまふ意味では無い。若しも天主にして一日はおろか一分間でもその神業を休め玉ふことがありとすれば、宇宙一切の萬物は忽ち滅亡して了ふからである。故にこの安息日は人々神の洪恩を感謝し、且つその神德を讃美すべく祝すべき日である。

斯して五十六億七千萬年を經て、五六七の神政全く成就され、天主の經綸の聖代が來るのである。然るに幸ひなるかな、五六七の歳月も殆ぞ滿期に近づいて居る。いよ〳〵五六七神政出現の上は、完全無缺、至善至美の世界となり、神人和合して永遠無窮に榮に行くのである。故に今日までの世界は未完成時代であつた。茲に天運到來して、神政の開かるゝ時機となつた。現代はその過渡時代であるから、その前程として種々の事變の各所に突發するのも、神界の攝理上己むを得ざる次第であらうと思ふ。

この安息日に就ては各敎法家の所說も、古今東西の區別なく論議されて居るが、私は世說の如何にかゝはらず、神示のまゝを述べたまでゞある。

【附　言】

聖書に、神は六日に世界を造り了へて、七日目は安息せりと言ふ神言がある。この神言に就て言靈研究の大要を述べて見やうと思ふ。

ナの言靈は宇宙萬有一切を兼て統一するといふことである。⊙の凝る形であり、行屆く言靈であり、天國の經綸を地上に移す事ともなり、⊙の確定ともなり、調理となり成就となり、水素の形となり、押し鎭むる言靈の活用ともなる。

次のナも同樣の意義の活用である。

カの言霊は、燥かし固むる活用となり、晴れて見ゆる也、一切の物發生の神力となり光明となるの活用である。

メの言霊は、世界を見るの活用となり、起り兆となり、本性を寫し、女子を生み、天の岩戸を開き、草木の芽となり、眼目となるの活用である。

以上の言霊に依りて、神は七日目に安息したまふと云ふ神語は、實に明瞭となつて來るのである。要するに宇宙萬有一切の生物に對し、神人、樹草、禽獣、鳥族、虫魚の區別なく、各自その所に安んじて、その天職に奉仕する聖代の現れである。

故に七日は現代の暦に云ふ日月火水木金土の一週間の日數の意味ではない事も明白なる事實であると思ふ。

（大正一〇・一二・一〇　舊一一・一二　加藤明子錄）

霊交活力體因出燃地成彌
凝足諸血夜出の神の功績。
隱身而形も見えず聲もなき
まことの神は御中主なり。
元の神人の初まりつぼらかに
知りたる者は神の外無し。

恥かしく無きまで心洗へかし
身魂の審判はじめかくれば。
何事がありとも世びと心せよ
罪ある限り祓ひ清むる。

=靈主体從（寅の卷）終=

〔附錄〕

岩井溫泉紀行歌

瑞月作

岩井温泉紀行歌

瑞の御魂に縁由ある　壬戌の一月の
雪降りつもる銀世界　黄金閣をあとにして
入日午前の巳の刻に　身魂の垢を清めむと
岩井温泉さして行く　湯淺篠原植芝や
松の大本の竹下氏　惠みの風も福島の
近藤の湯治を送らんと　信仰かたき石の宮
家並は古く朽ちぬれど　名は新町の正中を
足並速き自動車に　揺られて綾部の驛につく

汽笛一聲汽車の窓　記者の外山氏加藤女史
　西村氏を伴ひて　心も勇む石原の驛
煙をあとに初瀬の橋　飛びたつ斗り進み行く
　科戸の風の福知山　聞くも恐ろし鬼ヶ城
見捨てゝ走る山間の　上川口や下夜久野
　降り來る雪を突破して　安全守るかみ夜久野
梁瀬を渡りゴウ〳〵と　輪音も高き和田山や
　篠竹しげる養父の驛　入鹿江原を打過ぎて
外山に包みし豊岡の　昇降客のいと多く
　但馬名所の玄武洞　右手にながめて城ノ崎の

温泉場を振り返へり　竹野や佐津の驛も過ぎ
　日本海をながむれば　雪雲とほく香住驛
山腹包む鎧田の　雪つむ景色面白久
　谷を埋むる白雪は　山陰寒氣の表徵と
ながめて走る汽車の窓　煙草正宗菓子饅頭
　お茶〳〵辨當の賣聲に　空しき腹を滿たすとは
ま坂思はぬまうけもの　車のすみに居組つゝ
　いよ〳〵汽車も申の刻　岩美の驛に降りけり
雪より白きお梅さん　雲井の上の雪の空
　緩高梅の田舍道　ホロの破れし自動車に

一行六人ぶる〳〵と　自身神也屁の車
　廻る駒屋の温泉宿　湯治〳〵々々と月代の
一同夕餉も相濟みて　腹もポンポコ湯冠りの
　ヤレヤレヤレヤレの拍子歌　いと面白き雪の庭
ながら夜も茲に明しける　大正十年十二月
　十の二日の未明　新暦一月九日に
激しき吹雪降りすさみ　寒さに凍えた瑞月は
　炬燵の中の佗住居　横に立ちつゝ千早振
神世の奇しき物語　外山加藤井上氏
　筆を揃へてかくの通り

○　來訪者名讀込歌

出口王仁三郎
　温泉の神と現れませる　出雲に坐す大己貴
　岩井の湯口細くとも　藥の王と聞えたる
西村德治
神の仁慈の三ッ御魂　心地も日々に朗かに
　病の根まで斷り祓ふ　効驗は岩美に名西負ふ
加藤明子
田舍の村の湯の御德　療治を加ねて藤くより
　明々つゞひ遊び來る　男子と女子の宿りたる
外山豊二
これの駒屋の温泉は　外に又なき客の山
　豊二暮す玉の井の　この上もなき御神德
井上留五郎

留る三階に五郎々々と　ねころび乍ら靈界の
　ありし昔の物語　石より堅き信仰の　石波馨
丹波に馨る神の道　常磐堅磐の岩よりも　岩淵久男
　かたき誠の教の淵　汲取るものは久方の　嵯峨根民藏
天より降る變性男子　この世の峠や嵯峨の根に
　さまよふ民藏救はむと　誓ひ出ます神の世に　大野只次郎
生れ大野は只ならじ　深き因縁の著次郎く　田村兼太郎
　田づね來て見よ神の村　天地を兼太郎大神の　佐々木清藏
黄金の色や白梅の　佐和に佐木たる神の苑　紙本鐵藏
　清き藏昔のそのまゝの　紙より白くすがゝし

世の大本の金鐵の　身魂藏めし万代の　龜山金太郎
　龜のよはひの本宮山　二代教主にかゝりたる
金勝要の太み神　肌への色は山吹の　藤田武壽
　清郎比ぶるものもなき　景色も藤や田子の浦　古田時治
よはひも今は武壽の　古き昔を田ぢる時　船越英一
　治まる波路を加露ヶ濱　船にて越え來し三保の關
英米須の神を祭りたる　山陰一の神靈地　高嶋ゆか
　稜威も高嶋あとに見て　浪路を進むゆかしさよ　遠藤虎吉
神の御魂を迎遠藤　綾部に居ます牛虎の
　神の吉詞をかしこみて　やう〳〵平田に辿りつき

田植の中の道芝を　神のま盛りに踏みて行く　植芝盛隆

隆々昇る旭影　竹はなけれど松梅の　竹下斯藝琉

御杖を下げて道草の　斯藝れ琉野路を勇ぎよく

東の空の色良しと　俊老いたまふ大教祖　東良俊

桑原田原の道別けて　喜び一行幽世を　桑原道喜

知食します大社　榮ゆる松の神の代の　松田政治

尊き政治を偲びつゝ　苔むす藤のいと高く　藤松良寛

からむ社の千代の松　心持良く胸寛く　小林秀尾

進む小林神の森　秀づる尾の上の彌仙山　小林保一

鶴山龜山右左　神威を保つ一の鳥居

稻田の姫の命をば　救ふて得たる村雲の　稻村壽美

劍の光壽美渡り　須賀の宮居を建了へて

横暴無道の惡神の　山田の大蛇を斬放り　横山辰次郎

ひの川上に辰雲の　光も殊にいち次郎く

神の功ぞ尊とけれ　諸木の下を潜りたる　木下泉三

谷の泉も素鵞の川　三山の奥村芳りつゝ　奥村芳夫

夫婦は茲に八雲立　出雲八重垣つまごめに

八重垣作る八重垣の　譽れは今にコン近藤　近藤繁敏

榮えて繁る長の敏　我日の本のあなゝひの

道を教へし大巳貴　浦安國の田のもしく　安田武平

武力絕倫國平の　鉾を皇孫に奉り　田賀鐵藏

君の御前尾仕へなむ　これの誓ひは万代も

田賀へじものと手を拍つて　青柴垣にかくれたる　西村菊藏

事代主の金鐵の　堅き御言藏　尊とけれ

すぎ西むかしの物語　神有村の老人に　原祐藏

詳しく菊藏ありがたき　地の高天原にあれませる

神の祐藏うれしみて　詣でし一行十五人　德岡重光

神德岡さぬ皇神の　重き御命を拜しつゝ

神の光を照さむと　藤き山路や原野越え　藤原勇造

勇み來る造艮の　神の生宮直子刀自

社の前に田知よりて　祈る誠の美千香　前田美千香

この音づれを久方の　雲井の空や土の上に　井上敏弘

いと鄭やかに弘めかし　神の眞毛利は八洲國　毛利八彌

彌常永に傳はりて　榮え目出度瑞穗國

秋の足穗の御田代は　太田の神に神習ひ　田代習

敎の苗を植付ける　國常立大神の

高木勳を壽ぎて　三柱神の神の敎　高木壽三郎

田中も山も佐嘉榮吉し　五六七の御代に住山の　田中嘉榮吉

人の心は泰平藏　雲井の上も葦原も　住山泰藏

熊藏なき迄住渡る　清けき富士の高山に　上原熊藏

金銀龍の二柱　世人を眞森田すけむと　　住山龍二
御心くまらせ玉ひつゝ　大矢嶋國榮えゆく　　森田くま
祥たき御代を松の世の　浦安國の磯輪垣の　　矢嶋ゆく
秀妻の國藏尊とけれ　元氣も吉田の一行は　　松浦秀藏
身魂勝れて美はしく　聖地を西にあゝに見て　　吉田勝美
町や山村傳ひつゝ　又藏降り來る五月雨を　　西村傳藏
おかして伊佐田庭路の　福知へ歸り喜一郎　　伊佐田喜一郎
途上つはりの心地して　二代スミ子は澄渡る　　
石原の小泉すくひ上げ　教祖手づから清泉を　　小泉熊彦
口に富熊せ玉ひつゝ　國武彦の眞森田る　　森田勘太郎

綾の勘部の太元へ　雨の中尾ば六月の　　中尾豊弘
四日に豊かに弘前に　神德高く山の如　　山本惣吉
頭にいたゞき歸ります　大本役員惣一同　　
今日の生日の吉き日をば　祝ひ納むる吉祥の　　同　納吉
宴を平木て大神の　御稜威かしこ美山川の　　平木稜威美
供物を献じ石の上　古き太初の皇神の　　山川石太郎
直なる武の田ぐひなき　譽れを今に傳へける　　武田なを
大正二年の春の頃　十三才の直靈孃　　
瑞月柳月の三人が　出雲大社へ禮參り　　
共往きがけに岩美驛　馬車にゆられて晃陽の

やかたに再び逗留し　いよ〳〵三度の入浴に
　身魂の垢を洗ひつゝ　五ッと六との靈界の
昔語りを新らしく　天地宇宙の外に立ち
　言葉も清くいさぎよく　まはる駒屋の温泉場
心の垢をあらひつゝ　あら〳〵かくは識しけり

附　言

明治三十四年舊五月十五日、敎祖樣神勅を受けて、入雲立出雲の國の天日隅の宮に御參拜の節、山陰道を徒歩し一行十五人、岩井温泉駒屋に一泊せられ、歸路再び全家に宿泊されたる、大本に取つて由緣淺からざる温泉である。瑞月は大正三年の春、三代直靈、梅田信之氏と共に一泊したる事あり。今回にて三度目の入浴なり。靜養かたがた靈界物語の口述を爲すも、神の御仁惠と歡びのあまり、筆記者及び信者の訪問して色々と御世話下され其の厚意を感謝する爲、諸氏の芳名を讀込み、長歌を作りて卷尾に附する事となしぬ。

附　錄　終

大正十一年二月廿七日印刷
大正十一年三月三日發行
昭和三年八月五日再版
昭和七年五月二十五日三版發行

定價金壹圓

東都府南桑田郡龜岡町字內丸二六番地
編輯者 北村隆三

京都府南桑田郡龜岡町字荒塚內丸一番地
發行兼印刷者 天聲社
代表者 吉原常三郎

京都府南桑田郡龜岡町荒塚內丸一番地
發行兼印刷所 天聲社
【振替口座大阪七五九一七番】

不許複製

靈主体從【寅の卷】奥附

終